
悪魔の絵本 1 5 悪魔【逆】 (SUIT編?)

有月 仮字

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

悪魔の絵本15 悪魔【逆】（SUIT編？）

【Nコード】

N2023W

【作者名】

有月 仮字

【あらすじ】

遂に神の審判が始まったセネトレア。仲間のカード達の死に心が折れたリフルは守るものを失って……自ら死を望む。同じ片割れ殺しの混血であるヴァレスタは、気まぐれからか彼に延命を施すが……？

混血狩り達に襲撃され、混沌の渦に飲まれる混血の街《迷い鳥》。カード達がそれぞれで因縁の相手と渡り合うその傍ら、リフルの目を取り返すためアスカはロイルと命を賭した殺し合いへと挑む。

王都を巻き込む混血と純血の争いは、セネトレアに大きな隙を生み出して……。セネトレア女王を討つべく上陸するカーネフェル軍。表と裏のピリオドが、一つ打たれる時が来る……？

どうせバッドエンドな毒と狂気のダークファンタジー。悪魔の絵本 S U I T 編第四弾！剣と魔法はそこに、人の悪意が織りなす後味悪い物語。

敵も味方も死に祭り。裏本編最高潮が今ここに……？

0::Revelare pecunia! (前書き)

悪魔の絵本13 死神【逆】からの続きです。

この小説にしては珍しく、間髪入れない時間軸。

そのまま13章の続きとしてお読み下さいませ。本編だと6章（執筆中）→8章（まだ書いてもいない）辺りの内容です。

O::Revelare pecunia!

「母様……?」

その時私は何を聞いた? 確か花瓶の割れる音。

「来るなっ! 化け物っ!!!」

突き刺さるようなその言葉。それが痛くて、私は気付くのに遅れた。視界が赤い。陶器の破片で額でも切ったのだろうか。それが視界をこうしているのだ。でもそんな痛みなど、大したことはなかった。

「どうして!? どうしてなの!? 私は……今まで一体、何のためにっ!」

幸せになれるはずじゃなかったの? 今度こそ、幸せに。その緑の目が私を責める。

見事な赤目の子供。髪さえ誤魔化せば、王になれる逸材だ。私の髪は染料を弾くから、洗い流せばすぐに色が落ちてしまう。雨の日は外を歩くなとよく言われた。言われたとおりにじっとしていた。雨の日は。それでもそんな日が続けば、暇を持て余す。離れに暮らす母の顔を見たくなくても仕方ない。とても愚かなことだが、その時分の私は……子供に過ぎなかったのだから。

夜なら人目に付かない。こっそり部屋を抜け出して、母に会いに行ったのだ。けれど私を迎える母は、先の冷たい言葉を発したのだ。

「母様……?」

「このっ……悪魔っ!! 返してっ!! 私の子を返してっ!!」

それは本来生まれるべき子供。母様は……この女は認めないのだ。自分が生んだのがこの私なのだと。誰かがこんな化け物と、自慢の子供を取り替えたのだと。

母と呼ぶなど手当たり次第物を投げってくる。そんなに私が恐ろしいのだろうか？こんな子供が。細い女の腕にさえ、無抵抗に投げ出されたこの私が。首を絞められるままの人形が。

視線を向けるだけで、女のその手が震え出す。何がそんなに恐ろしい？私は唯……貴女を母と呼んだだけではないか。女は手を放し、私を床へと叩き付け……それから布団を被り、ガタガタと奮えていた。

何がいけなかったのだろう。翌日外は晴れていた。昨日は機嫌が悪かっただけかもしれない。そう思い、再び母の元へと赴いた。母様の好きな花を庭園から摘んできた。これで少しは気も紛れるだろうとは……なんとも浅はかな。

「母様……」

扉を叩いた。返事はない。そっと扉を開ければ、狂ったように半笑い……虚空を見つめる女があった。

「か、母様!？」

一晩で、母は狂ってしまった。廃人になってしまっていた。原因不明と言われて、医者も匙を投げだした。余程恐ろしいものを見たのだろうか？皆が口々に囁いた。

だがそんなことはありえない。後宮は悪意が渦巻く。毒でも盛られて気が触れたのだ。私が王位継承権を上げたなら、母もまた位を上げる。そしてその逆もある。母は後宮の他の女の怨みを買ったのだ。あの時はそう思った。

私に心ない言葉を吐いたのも、きっと毒の狂気に触れたから。幻覚でも見たのだろう。

赤子の時分よりそうだ。物心付く前というものが私にはない。覚えていゝし聞いている。言葉を理解していなくても、音声を覚えていゝ。故に後に理解する。そもそも言葉を覚えるまでも差ほど時間は掛からなかった。化け物と、違う意味で後宮の女達が囁いていた。

そういう不気味さは、母にとっては自慢の一つだったはず。だからあの日母が口にした化け物とは、それとは違う意味だった。

……我ながら子供にしては嫌な子供だったと思う。私は常に現実的な物の考えをしていたし、頭だけは同い年の兄弟達より抜きこんでいた。父が私から王位継承権を奪わずにいたのは、その才を見込んでのことだったのだろうと今なら解る。

「母様……」

見舞いに行っても母は私を見ない。いないものとして扱う。事実、見えていないのだろうか。私は母様ではないからわからない。

それでも私は通い続けた。その度に花を持って行った。部屋には枯れた花が増えていった。母が受け取らないから置いていく。置き去りの花だ。受け取っていないのだから捨てることもない。そもそもそれも見えていないのか。その内虫が集りだし、女中が気味悪がって捨て出した。それから花は摘まなくなった。見舞いに行く回数も減った。なんとなく、その方が良いような気がした。誰にとっても。

それでもある日、とても綺麗な花が咲いたのだ。だから思わずそれを見せたくなくて、母の部屋まで私は走った。

奇跡のようなその花は……本来あり得ない色の花。まるで魔法だ。それを見せれば、或いは煎じて飲ませれば、母が元通りになる……などという下らない幻想に私が取り憑かれることはなかったが、そ

れが余りに綺麗だから、母にもその綺麗を共有させたくなったのだ。

「母さ……」

扉を開けて、時が凍り付いた。何を見ているのか解らなかった。すぐに知識としては思い当たった。意味は理解した。それでもその驚愕を拭うには至らない。

母様は寝ていた。でも起きていた。つまりは“寝て”いた。母様は正妻ではないとはいえ、後宮の一人だ。だから本来一緒に寝るとすれば、その相手は父様……セネトレア王だ。

でもその男は父ではない。見知らぬ男だ。

口からヒューヒューと息が零れる。言葉を発することが出来ない。後ずさる私の足が纏れて……音を立てて転んでしまう。それに男が此方を向いた。気味の悪い目だ。情欲に染まった薄気味悪い、人のそれとは思えない……不気味な色をしていた。

（気持ち悪い……っ）

だって母様も、その薄気味悪い男と同じ目をしていた。二人の緑の目が濁っていく様は、苔が腐れていくようで。

「……お前の子供か、丁度良い」

母子まとめて相手にするのも悪くないと、男は下卑た笑みを浮かべる。

「ふ、ふざけるな！私は男だ！」

何故その男の視線が私に向くのかわからない。確かにこの国は腐っているが、倫理が歪んでいるが……この城までそんなモノに染め

られているなんて思わなかった。いや、違う。この男は外の人間だ。城の者ではない。

なぜならその一点に置いてのみ、この城は正常な場所だった。

「その様子じゃ何も知らないんだなあ……男遊びで緩んだこの女よりは、余程具合が良いんだろう？」

「は、放せっ！」

それは条件反射だった。掴まれた腕が気持ち悪くて。それ以上その指に触れられていたくなくて。その場所から皮膚が膿んでいくように。そういう生理的嫌悪感。

手にした花を投げつけた。その根が男の口へとはいる。

男は倒れる。動かない。死んだのか。……ああそうか。あれは綺麗すぎた。あれは毒の花だったのだ。でも、別にいい。あの気味の悪い男が死んだ。その事実には私は安堵した。

「か、母様……？ 大丈夫ですか？」

悪いのは全部この男だ。母は精神を病んでいる。助けを呼ぶことも出来なかっただろう。だから無理矢理襲われたんだ。きっとそうだ。そう思うのに……母はまだあの目をしていた。

「母様……？」

初めてだ。あの日以来、始めて母が私を見た。それは泣いてしまふほど嬉しくて、その胸に縋り付いた。

だけど妙な違和感。それを感じて我に返った。違う。これは違う。これは私を見ていない。母は男を見ている。死んだ男じゃない。私を男としてみている。私を私として認識出来ないのだ。

「か、母様……正気に戻ってください!」

何が恐ろしいと言えば、私は本当にまだ幼い子供だ。そこまで見境無い母か、3にも満たない時分にここまで回る私の頭か。

ここまで背筋が奮える嫌悪感はなかなかない。それが親愛のそれならどんなに私も救われただろう。額でも頬でもなく、触れられたのは唇だ。先程までこの女は何に誰に触れていた? 吐き気を催すような味がした。

もう何も考えられない。この女から離れたくて仕方がない。思い切り暴れてその手を振り払う。女の寝たきりの生活が祟ったのか、私はその手から逃れることは叶った。しかし部屋から飛び出す寸前に、一度私は振り返る。妙な違和感を感じていたのだ。以前より……母の外見が変わっている。太った? ……いや顔は寡れている。なのに腹だけ妙に膨れていやしくないか?

そこで正解を思い当たるこの脳が嫌になる。生々しい後宮に、夢も希望もありはしない。ここにあるのは悪意と絶望それだけだ。

認めたくない。だけど証拠は揃っている。

情欲を持て余し……男漁りをするような、この汚らわしい女から私は生まれた。その醜い女は誰の子とも知れぬ命をそこに宿している。それはおかしい。この女は王の妻なのに、何故王でもない男相手に足を開くんだ? 気持ち悪い。だってそれは恐ろしい可能性を私に思い起こさせる。

私だって、そうやって生まれたかも知れないのだ。私が王の子である保証が何処にある? 目の色も髪の色も似ていない。だって王は染めて誤魔化さなければならぬような……銀髪をしていない。

(私は……私は一体、何なんだ?)

私の起源は何処にある? 私は何で、私は誰だ? 兄弟の中の誰より王の器量が備わっていると、私は断言できる。他の兄弟達より優秀

なこの脳がそれを認めている。それでも……私に王の資格はあるのか？ 私の中に、王の血は……流れているのか？

＊

「レスタ兄い！」

「どうしたロイル？」

その間抜け面の弟は、見事な黒い髪と瞳を持つからと第一位王位継承権を持つ。

城には大勢の兄弟が居る。だから互いに顔を知らない名前しか知らないとか、名前も知らない……そんなこともざらにある。

他の異母兄弟達に陰湿な虐めを受けていたところを助けてやった。それがこれと出会った切っ掛けだ。そこから私に懐いた異母弟。馬鹿だが馬鹿だからこそ、少々可愛くも思える。あの屑のようなボロ雑巾のような異父妹と比べれば天と地の差だ。

「兄貴も付いてきてくれよ……タロックなんて外国、行くの怖えよ。護衛が薄くなったところ俺を殺そうとする奴らとかいるに決まってる」

被害妄想が、と言ってやりたいが……残念ながらそれは大いに起こり得る。この弟の日常は常に死との戦いだ。他の兄弟とその母親達から命を狙われている。王位に一番近い者……その日常は端から見ると分にも過酷なものだった。

この頃の私は、この馬鹿が王になっても良いと思っていた。こいつは馬鹿だから何時までも私が必要だろう。私はその宰相としてこれを支える。つまりは影の王だ。それはそれで私に似合っているようにも思えた。この馬鹿が無能な王であればあるほど、私の功績は光り輝く。そう言う意味でもこの弟は愛おしい。

（この辺りで恩を売っておくのも悪くない）

十分懐かれているが、今以上信頼されても悪くはならない。後の私の地位が約束されていく。これはその足場固めた。

「まったくお前は情けないな……」

件を教えてやっているがまだまだ私の足下にも及ばない。気弱なところがあるから剣に迷いがあるのだ。幼少の時分に既に一人殺してる私からすれば、恐れなど取るに足らない。剣を振るってそれで死んでもそれまでだ。死ぬような弱い奴が悪い。私は悪くない。その開き直りこそ、王に必要なものだというのがこのに。

「お前が私に勝つまでは、私がお前を守ってやる」

「あ、ありがとうレスタ兄い！」

この馬鹿がこんなに優れた私に勝つ日など来るはずがない。お前は生涯私に負け続け、囷続ける定めなのだ。だからそれは……お前が私が死ぬまで、そう言う意味だ。そのつもりで言っていた。この私がずっと傍にいてやると言っているんだ。それに気付けないような馬鹿なら本当に救いようがない。へらへらと笑う不肖の弟は、何処まで解っていたのやら。

弟の護衛として海を渡った先の大国……タロックはセネトレアより辺鄙な所。港や王都は発展している。それでも拾い大陸は未開の土地がまだ多い。発展しているとはいえ王都にも田畑が見受けられ、四季の佇む長閑な場所に見えた。

もっともそれは正しくはない。タロックは農業地帯が限られている。王都より北……大陸の三分の二はまず稲作に向かない。雪が季節の半分、或いは一年中解けない地域もある。だから出来る場所で

するしかない。しかしその限られた土地でこの広い国土の人民を満足に養えるとは思えない。

そのためにタロツクは戦争を繰り返し、我がセネトレアには良い鴨になって来てくれていた。カーネフェルよりはお得意様だ。まだ良心的に味方をし、その分戦地で稼がせて貰う……そうして国を豊かにしたのがセネトレアという国だ。タロツクより狭く、タロツクより農業に向かない。それでも世界一豊かな国になったのは、セネトレア王の君臨すれども統治せず……この方針が上手く機能してきたからだ。

人は醜い。だからこそ欲がある。欲のために人は動く。欲を煽り増長させる、それに邪魔なのは法。法をある程度野放しにすることで、この国は発展してきた。他者を蹴落とし這い上がる。それは城での生活によく似ていた。城は世界の縮図だった。視野が広がっても、結局人がやることは何も変わらない。所詮人間は人間だ。下らない生き物は下らないことしかない。

しかしその下らなさにも順位がある。このタロツクという国はセネトレア以下だ。だからこんな風に踊らされているのだ。

「それで？城には何のために呼ばれているんだ？」

「んー……何か式典ってのがあったってよ。眠い」

「しっかりしろ。今はまだそうではないがいずれはお前が王になるのだ。お前が舐められれば国が舐められる。要は喧嘩と同じだ」

「殴ればいいのか？眼飛ばせばいいのか？」

「そうではない……これだから馬鹿は」

「なあ、兄貴……」

「まだ馬鹿なことを言うつもりか？」

「っていうかここ何処？」

迷った。この馬鹿ならいざ知らず、この私が迷うとは。何なのだこの城は。ここぞとばかりに護衛も私だけ。先程まで先導のため前

を歩いていた他の護衛の者達が、完全に消えている。これは……ロイルを殺すつもりだな。金でも渡されたか。裏切りはよくあることだが、次期王を裏切るとはなんという愚行！ 幾ら金を積まれても、普通に計算すればそんなことはあり得ないだろうに。こいつが王にさえなれば、元は幾らでも取れるだろう。こいつには、人生費やす価値がある。

「……私から離れるな。いいな？」

「う、うん」

迷宮のようなその城の中。私は神経を尖らせる。人の気配のする方へ、歩いていけばきつと……拓けた場所に出る。

耳を澄ませて……風を読む。壁に遮られる中で、それでも此方に吹いてくる、風の気配を感じる。その方向へとゆっくり、ゆっくり……正しい道を選んでいった。

どれくらい歩いただろう？ 耳に大勢の人の歓声が聞こえた。随分時間は掛かったが、地下迷宮から無事に抜け出したことを知り、私はロイルと顔を見合わせ安堵する。

「レスタ兄い、肩車ー！ 向こうで何かあるみたいだ」

「よし、心得た」

「兄貴……それ投げ技の方の肩車だぜ」

「お気に召さないなら大車、膝車、袖車絞めなどもあるがやられたいか？」

「……遠慮します」

この私の肩に乗ろうなど百年早い。格闘技で沈めてやると身の程というものを思い知ったらしい弟。

それでもはぐれて迷子にでもなられてそこで暗殺でもされたら私の計画に狂いが出る。

「さっさと行くぞ」

手を差し出すと、馬鹿弟は馬鹿みたいな顔をして、その後笑って手を取った。そんな顔まで馬鹿丸出しだ。品性というものがまるでない。そう他の兄弟に責められることもあるが、その点だけは私も否定できない。だがこいつに品がないからこそ私の品性が際だつのだ。そう思えばこいつの品のなさにも意味はあるのだろう。

子供だと思って道を譲らない群衆の間をすりぬけ、抜けられない場合は膝裏を蹴ったりしながら私達は歩みを進めた。

「まったく……タロック王も呼んだからにはそれなりの対応というものがあるだろうに」

呼ぶだけ呼んで席も用意していないのか。これだから鄙びた国の王は困る。歴史が長いだけで何時までもふんぞり返れると思ったら大間違いだ。盛者必衰。永遠などあり得ないのだ。その傲慢さが王の証というなら確かにそれは立派なものだが、現実を知らずにそうしているならそれはあまりに愚かなことだ。

シャトランジアからの支援を受け国は落ち着いては来たが、それは向こうに貸しを作ることだ。私は信用できないな。平和だの正義だの、そんなものを口にする偽善者は。

商売は商品と金のトレード、等価交換。しかし奴らのそれは違う。だからこそ恐ろしい。何も求めない？ そんなの嘘だ。信用できない。腹の中では何を考えているのやら。後で揺すってくるつもりなのだろう？ 等価以上の金銭を、いずれ搾り取る算段なのだろう？ そのくらは考える。無償の愛などあり得ない。そんな物、この世には存在しないのだ。

（母様……）

母様だってそうだ。私を私として愛してはくれなかった。血の繋がった親でさえそうなのだ。ならば他人が他人にそんなことなどありえない。私がロイルを守るのも、有償だ。見返りを求めるからここにいる。だから守るのだ。こいつが王にならないのなら、私はこれを守らない。守った時間が無駄になる。それを無駄にさせないためにも、私はこいつを死なせるわけにはいかないのだ。

「大体こんな式典……」

これだけの人間を呼んで、パーティをする金が何処にあるのだろうか？ 機嫌取りのために呼んだわけでもあるまい。タロック王は何のためにこれを催したのだろうか？

そんなことを考える内に、私達は最前列まで進み出た。

「!？」

驚いた。周りが歓声を上げるのも解る。

その場を歩くその子供は……私より幾つか年下だろう。何とも美しい少女だ。見惚れるような整ったその造形。ケチの付けようがない。

唯一ケチを付けるなら、周りのざわめきが語る内容。どうみてもあれは少女なのだが、あれがどうやらこの国の……二番目の王子らしい。タロック王には子が三人。妻は二人しかいない。

それではもしもの時に、世継ぎ問題が出来たりしないのか？ 多すぎてもセネトレアのようになるが、少なすぎても問題だ。王の役目の一つは世継ぎを作ることだろうに、タロック王はその責任を果たしているとは思えない。三人の内一人は女だ。男が二人。戦死や病死……事故の可能性を考慮すれば、心許ない数字だろう。

（いや、しかし……あれが王女ではないのか？）

王子と聞いても納得できない。それは今ここで解決できる問題でもないだろうから捨て置いて……これは本当になんの催し物なの？ 自慢の子供を見せびらかすお遊戯会かタロツク王？

視線を上げる。遙かその先に佇む赤目の男。血のように暗い暗い……深い赤。あれが真純血のタロツク人。その傍に佇むのは真純血のカーネフェル人。シャトランジアのマリー姫……海のように深い青眼が美しい。見ればあの王子はこの姫の子のように見えた。父より母に似ている。

（ならばあれは妾腹か……）

途端に親近感が湧いた。私と同じだ。それだけじゃない。あの子供は私と同じ髪をしている。綺麗な輝く銀髪だ。それを隠さず人目に晒して歩く、その姿はとても美しく見えた

だがそれならば、何故同じ色の私はこの髪を隠さなければならぬのだろうか？ 出る杭はと言うからか？ 私と彼の違いは何だ？ 目の色か？ 彼は深い紫、私は赤だ。なんだ、それだけじゃないか。それなのに、どうして……？

「……あ」

打たれた。杭が……杭が打たれた。

毒を呷り、血を吹き出して倒れるそれは……やはり美しくは映る。いつかの男の死体などとは比べものにならない造形美。だからこそ、心の響く。何も感じない死ではない。私はその光景に、戦慄した。それは戒めのように私の眼前に横たわる。これは、処刑だったのだ。私が髪を晒していれば……そこに倒れていたのは私だったのかもしれない。

そして、あの日から……世界の流れは変わった。

私が……俺が、この髪を……人目に晒してはならないのだと、深く自覚したのもあの日から。絶対に知られるわけにはいかない。混血だと知られることは……即ち死に結びつく。これは綱渡り。絶対に足を踏み外してはいけない。どんな強い風が吹いても、絶対に……この足を滑らせるわけにはいかないのだ。

（それでも……）

俺は我に返った。これは今のこと。過去に浸る暇はない。血を吹き出して倒れているそれは……こいつは今ここにあるものだ。このまま放置すれば死ぬだろう。

（くそっ……）

こいつは俺を笑った。舌をかみ切る間際に俺を笑った。そんな勝ち逃げは許さない。俺を侮辱したんだ。それ相応の報いは受けて貰う。お前がそんなに死にたいのなら、まだお前を死なせてなどやるものか！

＊

「オルクスっ！！」

「うわぁ！どうしたのヴァレスタ異母兄さん？すっごい血まみれじゃあないか」

「いいからこっちへ来いっ！！」

綺麗なその戦利品を眺めて優雅なティータイム。そんな僕……オルクスの優雅な一時を無粋にも邪魔して来たのは血の繋がらない僕

の異母兄さん。つまりは赤の他人。

僕を脅すように睨み付ける赤。その危機迫る迫力に、流石の僕もたじろいだ。これ、断ったら瞬殺されるな。気狂いに刃物って言うのにこの人にコートカードなんて危ないったらありゃしないよ。

先程まで手術をしていた部屋。そこに連れ戻された僕の目に、飛び込んできたのは半ば死んでいる那由多王子の姿だった。元々生きる死体みたいな人だから、この表現もどうかと思うけど。

「さっさとこいつを治せっ！今すぐにだ！」

何をそんなに熱くなっているんだか。夏だねえ。あんまり関係ないか。

僕はやれやれと息を吐く。兄さんは確かに頭は切れるけど、その分ある意味ではとても馬鹿だ。人の心を自分の心を理解できない大馬鹿だ。何事も計算で理論で考えてしまうから、感情がない。だから計算は正しくても自分の心と違う結果を導き出してしまうんだ。例えばこんな風にね。

「うわっ……酷いものだね。兄さん、そこまで激しいことしちゃったわけ？舌嚙んで死にたくなるようなレベルの羞恥プレイとか」

「戯れ言はいいっ！」

「はいはい」

兄さんも数術は使えるけれど、兄さんは壺の数術使いじゃない。攻撃数術が得意な分、回復数術なんて使えない。可能性がないわけじゃないんだけど、僕みたいに両方使える方がレアなんだよ。強くて頭も良いから、死にかけたこともない兄さんじゃ……ちよつと難しいだろう。

「……そんなに彼が心配？」

施術をしながら僕は兄さんに聞いてみた。何のことだとその目は言うが、僕には解る。

兄さんは理由を付けて色々言っではいるけれど、本当はこの子が欲しくて堪らないんだ。兄さんにとっての片割れみたいなものだからねえ。馬鹿な男だよ本当。

「ここでこれが死ねば、西への牽制にならん」

本当に素直じゃないなあ。

「いや、ここまでなってまだプライドってのがあったんだねえ」

確かにそういうところは二人はよく似ている。プライドのために生きるのが兄さん。プライドのために死ぬのがこっちの彼。真逆だけれどね。

「下らんな」

「そう？そうは見えないけどね」

「王は死んではならん。民が死んでも国が滅んでも。王だけは死んではならんのだ。それをこれは理解していない。これに王の資格などあるはずがない。これは魂まで根っからの奴隷だと言うことだ。だから俺が使ってやる。奴隷は勝手に死んではならん。だから治す。それだけだ」

「……なんなら緑の目でも植え込もうか？兄さんの母様そっくりの色で」

「っ！？」

「それとも質は落ちるけど、兄さんと同じアレキサンドライトを入れようか？兄さんが彼に求めているのはそういうことだろ？」

同じ苦しみを知るから、傷を舐め合いたい……そんな同病相憐れむ精神は兄さんにはない。お前の傷を舐める気は無い。だが俺を舐めろ！慰めろ！そしてこの心を癒せ！つまりはそういうことだろう？誰も愛さない癖に、愛されたくて堪らない。無償の愛が欲しいんだ。全てを許してくれるような優しさが。

那由多王子……今はリフルと言う彼は、あまりに多くを許せる人だ。だからその許しが自分にも向いて欲しいと思う。出来ることならそれが自分だけに向けばいいと思う。そして試す。どこまでやれば？どこまでやっても？何をしても許してくれる？憎まないでいてくれる？或いは深く憎んで見つめてくれる？俺を愛してくれるのか？

兄さんの暴力はそういう欲の表れだ。確かに幼少の兄さんは飛び抜けて優秀だったかも知れない。それでも兄さんの精神はこんなにも幼い。昔得られなかった物を引き摺って今ここにいます。

愛されたくば愛せ。そうは言うけどその逆はあり得ない。愛さないうちに愛してくれだなんて都合の良い話、誰が聞いてくれるだろうね？僕なら絶対御免だね。如何に那由多王子といえどもどうだろう？

「鶏と卵。兄さんは刹那姫にご執心だったけど、それはどちらが先だったんだろうね」

「……………くだらん話をするな」

「それはそうと兄さん、彼に触ったんでしょ？毒は大丈夫？」

「返り血だ」

「返り血？」

「これが舌を噛んだ時に、思い切り鳩尾を蹴ってやった」

「ああ、なるほど」

舌を噛むこと自体はもう止められなかったから、それを中断する方法を選んだわけだ。その時血がかかったと。

「でも早く着替えないと最悪死ぬよ。こっちは僕が治しておくから水も滴るなんとやらになって来なよ」

僕がそう言えば、兄さんは去っていく。やっぱり自分の命は大切だもんね。でもまあ、あの兄さんがねえ。面白いことになってきたよ。確かに彼をここで退場させるのはちょっと惜しい気は僕もする。

「さあて……どうしようか？」

僕は窪んだ彼の臉を見つめて、何とも無しに小首を傾げて見せた。

＊

「兄さんっ！！」

「愚妹が。俺の裸体は高いぞ？」

ヴァレスタが湯を浴びていると、仰々しくも風呂場に現れたのはリイナ。その金髪と緑の目……成長すればするほどあの女に似て来るそれは、見ているだけで不快になる。

だが似ているのは外見だけで、俺をあんな風に見ない。かと言って、俺の望むようにも俺を見ない。それはそれで気に入らない。

「誰が兄さんなんかに興味持つのよ？」

「言ったな。損害賠償含めて後日請求書を送ってやるから覚悟しろ。払わなければどこぞのガキが痛い目を見る」

「そうやってすぐにエルム君を人質扱いして……本当最低なんだから」

息をするように俺を軽んじるこの愚妹は、もう少し俺を尊敬するべきだと思う。この素晴らしい俺を前にして美辞麗句の一つも出て来ないとは、まったくどこまでも欠陥品だなこの女は。

「その件は後日にまわして、そんなことよりロイルを知らない？ 昨日部屋に戻ったつきりで……あれから部屋に行ってもいないのよ」

折角ドケチの兄さんから休みを貰ったのに、どうしたのかしらと不安がるリイナ。この女のあれへの依存は果てしなく深い。それが気に入らないと思うのは、元々あれは俺の物だったからだ。俺より遅くであった癖に、俺に懷いていたあれを、突然現れ奪って逃げた。俺の計画と、それに費やした時間と労力、全てを無に返したこの女を俺は今も許せない。ロイルにあること無いこと吹き込んで、悲劇のヒロインでも気取ったのか。あの馬鹿のことだ、女の涙に騙されて俺の手から離れていった。

思い出も、過去さえ俺を裏切る。有償とはいえ確かに心を砕き、心を預けてやった相手でもだ。

(……愚弟が)

俺はロイルのこともまだ、許してはいないのだ。だが……

「愚弟の考えることなど俺には手に取るように解る」

「は……？」

「貴様に解らんことでも俺には解る。俺とあれの付き合いはお前のそれより些か長い。お前があれのことで俺を頼ると言うことの意味が分かるか？ お前が俺には勝てないと、認めたことに他ならない」

「……どういうこと？」

認めたくない。それでも俺の言葉に揺らぎ出す。緑の目に不安が

広がる。

「あれは一度この俺を裏切った。それが負い目だ。故に二度は俺を裏切れん。だからその二度を避けてきた。俺に会わぬよう生きてきた」

あれも俺の道具だ。躑ならとうに施してある。調教は完了している。

俺の命令には従う。暇を与えれば、考える。俺にとってプラスになることを考える。俺のために出来ることはないかと考える。道具は使われないことが苦痛だ。使ってやることが喜びだ。だから使われずとも、働きたくて仕方がないのだ。

「西に送り込んだ奴らが居ただろう？あれとは別ルートで攻略を開始したに違いない。あの馬鹿は目立つ行動が好きだからな。精々、いい皿になってくれるだろう」

「皿！？兄さんっ……ロイルを死なせるつもり！？」

「ここで死ぬようならあれもそれまでの駒だ」

「ッ！！最低っ！！」

俺に平手を打ち込もうとした愚妹。その手首を掴んで捻ってやれば、女の細い身体は苦痛の声を吐き出した。

その白い手は、何時か俺の首を絞めたあの女のそれによく似ている。だが俺は成長した。今なら負けない。

あの女やあの男のような目を、俺は知らない。浮かべられない。それでもその方法が、体の良い嫌がらせになることは学んでいた。簡単に人の心を踏みにじるにはいい手だと。そう言う意味では確かに、面白い遊びではあった。だからだ。妹の耳元で低く囁いてやる。

「男の風呂を覗きに来るとは、これくらいの覚悟はあったんだろ

うな？」

「は、放してっ！」

思い切り暴れるリィナ。その手が今度こそ俺を打つ。

あの女と同じ顔で、たった1人を愛するか？その身持ちの堅さが気に入らん。同じ顔の癖に、どうして違う？違うなら、違うのに何故……同じなんだ？どうしてあの女と同じく、お前も俺を拒むのか？

「安心しろ。混血と純血の間に、何かが出来た事例はない」

「そういう問題じゃないの！兄さんは何処まで女を、他人を馬鹿にすれば気が済むの！？それにっ……リフルさんにだって……なんであんなっ、酷いことを……」

ああ、所詮はあの女と同じ尻軽か。顔さえ良ければ好意を示すか？馬鹿女。

「リフルさんは……私の友達よ。今は敵だけど……」

「笑わせるな。あんな顔でもあれは男だ。確認した俺が言うのだからまず間違いはない。女のお前とあれが友人になれるとは思えない」

男と女など肉欲から生まれる共依存の關係に過ぎん。尻軽でないのなら、この愚妹はあれの顔に騙されあれを脳の一部で女と誤認しているのだろう。どちらにせよこれが馬鹿女であることには変わらない。

「兄さんは可哀相な人ね。そんな風にしか人を測れないなんて」「……なるほど。それとも妬いているのか？俺がお前ではなくあれに手を出したことを」

「ふざけないでっ！！私は怒っているのよ！！リフルさんは、リ

フルさんは……………」

愚妹の目が潤む。女の涙ほど苛つく物もない。とりあえず先の分の仕返しに、三発ほどその頬を打ち据えてやった。これで少しは気も晴れた。

「お前のような醜い女では俺も食指が動かん。金でも持って出直して来い」

俺は風呂から上がり、ついでに愚妹を投げ込んで置き去りにする。あれの涙は醜い。さっさと洗い流して少しは見られる顔に戻ればいいが。

(……酷いこと、か)

全くもって意味が分からん。その酷いことがこの国では日常茶飯事のように行われている。何をもって俺の行動だけ咎められるというのだろうか？それを咎める法もない。俺は別に悪ではないのだ。金を貰って仕事をした。唯、それだけの話だろうに。何故依頼主ではなく俺が責められるのか。まったくこの世は理不尽だ。何もそれは今日に始まったことではない。理不尽は、常に俺の隣にあった。

“お前が王になれない理由は、お前が一番知っているだろう”

王はかつてそう言った。この俺に、一度だけそう告げた。ロイルに出会う前だ。何故俺が王になれないのかと問い詰めた時にだ。

やはり俺は王の子ではなかったのだ。幾ら見事な赤を持って生まれても、王の子でなければ王にはなれない。俺とあの女が城から追い出されなかっただけでも温情だったと言えるだろう。そして、なにもそれだけではない。

暗がりでも光るこの眼は、太陽光と蠟燭の火……その下で赤から緑

に色素を変える。王者の宝石の仕組みのようなそれ。しかし俺では王にはなれない。それを覆すためには呆れるほど膨大な金が必要だった。しかしそれも半年前にタロックの姉弟によって潰えた希望。続く手段は、革命だ。そのための切り札が俺の手の中には宿っている。

悪行三昧の女王はそこにある。それを討てばそこで俺が英雄だ。新たな王になる権利もそこにある。

「もうすぐだ……」

俺は王になる。この国の王になる。

俺は間違っていない。俺が正しかったのだと……あの女に、この世界にそれを思い知らせてやる。

リフル……あの男と俺は違う。俺は落ちて終わる男じゃない。這い上がり頂点まで上り詰め、全てを従える者だ。

姿を偽らず、汚されどん底まで落ちたお前と。屈辱に耐え、姿を偽り嘘を重ね続けた俺は……ここまでやって来た。俺とお前の違いはそれだ。この世は正直者ほど痛い目を見る。のし上がるのは巧妙な嘘つきだ。

何も為せず、何も守れず平伏すことしかできない惨めな俺の片割れは、俺の横にこそ映える。俺の栄光を間近で見、屈辱に染まるその顔こそ、あいつには何よりお似合いだ。あいつはそのため生まれたのだ。そのための片割れ殺しなのだろう？

(……そうだ)

俺はそのためにあいつを生かしたのだ。哀れみなど、まして執着などそこにはない。俺はあいつをとことん嗤い嘲笑うために、傍に置く。俺が如何に優れた者であるかを確認するための、……あいつはその指標なのだ。奴が苦しめば苦しむほど、それは俺の幸福に変

わっていく。

同じ色。それでも違う。違うからこそ俺は、
……俺にはあれが必
要なのだ。

O::Revelare pecunia! (後書き)

15章 悪魔【逆】。悪魔のカードのイメージ人物はヴァレスタなので、彼視点からスタート。彼は敵だけど、ある意味ではこの章の主役みたいなものなので。理不尽の塊みたいな奴ですが、これからどうなって行くのやら。

敵ボスともフラグ立つとかどういうことか。邪眼恐るべし。いい加減リフルは女の子とのフラグを大事にさせてやりたいけど難しいなあ……不運属性だから。

この世で一番美しい色の一つ挙げろと言われたのなら、銀色と紫……俺は悩んだ挙げ句、選ぶのは紫だ。勿論あいつの銀髪も綺麗だけど、はじめて目が会った日の衝撃を俺は今も忘れられない。

タロツクの赤、カーネフェルの青。それが溶け込み調和し織りなす美しい奇跡の色だ。こんなに美しいものがこの世界にあるなんて信じられず、一瞬にして目を奪われた。

嗚呼、その目が何時の日も此方だけに向いてくれればどんなに幸せだろう。邪眼は俺の心を煽る。

初めは眺めているだけで、綺麗だなんてそれで良かった。だけど棺で眠る人を眺める内に、その視線を求め始めた。死んでいるこの人の目がもし再び開いたら、その時最初に目が合う……相手が俺であって欲しかった。だから毎日地下室に俺は棺を見に行った。

幸せだった。例えあいつが何も話してくれなくても。幸せだった。その目に俺が映ることがなくなつて。

俺の空想、俺の妄想。勝手に植え付けたイメージ。何も話さない、死んでいるからこそ俺を裏切らない。

腐らないその死体に取り憑かれた俺の妄執。下らないと思いがながら、眠っているだけだなんて思い始めた。信じ始めた。何時の日かその瞼が震え、あの奇跡の色が現れる。

花咲く日を待つように、俺は唯待ち続けた。あの小さな部屋が俺の世界。俺にとっての全てだった。

邪眼のまやかしが誘惑が俺の思いをねじ曲げる。それが本当なのだとしても、意味を変えられたとしても、俺にとってあいつが何より大切だということには変わらない。

あの目が余所を向くのを、止めることなんか出来なくても。悔しくても、悲しくても……それがあいつの望みなら、俺は笑って見送

る。時々で良い。思い出した時に、俺の方を振り返ってくれるなら。俺は俺を押し留められる。狂わずに生きていられる。あの美しい紫の……その目に魅入られたのだとしても。それだけでいい。それだけでもいいのに……俺はこの悪魔のような国、セネトレアでその全てを一度失い……そして再び、失い欠けている。

箱の中の硝子ケース。収められたその美しい色。見間違えるはずもない。唯一無二の奇跡の瞳。我を忘れるには十分過ぎた。魅入られたように、俺は剣を抜き吠え猛る。

理解はした。それでも許せないことがある。アスカは目の前の男を睨み付ける。

自分が狂わずにいられる理由が、破られた。何よりも大切な人が傷付けられた。あの綺麗な瞳が抉られた。

許せなかった。その目があの人の顔に付いていないことが。あの人を損なわせた、傷付けた奴らの顔に両目が付いているのも許せない。同じ目に遭わせてやろう。直接目の前の男が関係していなくても、そんなのどうでもい。理解はした。それでも許せないことがある。アスカは目の前の男を睨み付ける。

自分が狂わずにいられる理由が、破られた。何よりも大切な人が傷付けられた。あの綺麗な瞳が抉られた。

もう冷静に話など聞いてはいられない。あいつにそんなことをした奴の、下についているこの男まで俺は憎くて堪らない。過去も思い出も、こいつとの関係ももう何もかもがどうでも良い。あいつに流させた血の分、きっちり落とし前付けさせてやる。同じ量なんて生温い。三倍血を流させてやる。

(……ぶっ殺してやる!!)

力の入りすぎた目で俺は斬り合う相手に食らいつくよう、殺意を向けていた。

男は一瞬、悲しそうに笑った後……俺と同じ目になる。本気の

斬り合い、どっちが或いは両方が……死んでもそれはそれで仕方ないよなと言うように。

「ぐっ……」

俺の怒りは俺に大きな隙を作った。それを相手は見逃さなかった。

《アスカニオスっ！！》

「大丈夫だ、モニカ！」

モニカが回復に回っている内は切り札での攻撃が出来ない。防戦一方になっていく。

攻撃は最大の防御。こいつ相手にそれ以外の言葉はない。防御に回った時点でこいつの独壇場になる。だから止めろと言ったのだが、過保護な精霊は俺の声を聞きやしない。今はこれがたった一つの正解なのだと言わんばかりに彼女は回復に専念。

それに俺は更に苛立って……その内に一発、でかい攻撃をくらった。それで頭からも血が抜けていったのかな。少しずつ俺は冷静になっていく。

不思議なものでさ、いろんなことを考える。走馬燈とも違うんだが、頭の中をグルグルといろんな記憶が回り出す。戦いの最中に他のことを考えるなんて不注意なんだが、勿論次の攻撃、その次の攻撃、避け方等々考えていることは考えている。だから言い方が変だな。脳が働きすぎている。こうして剣を振るうことで、俺の思考は分化する。

＊

「アスカ、またそんな怪我なんかして」

「ほっといってくれ、ディジットには関係ないだろ」

俺は、馬鹿な俺を案じてくれる優しい幼なじみの言葉にもちゃんと耳を傾けていなかった。

当時の俺は荒れていた。日夜仕事に明け暮れて、高額な報酬の仕事さえあれば何でも手に染めていた。もっとも例外は勿論ある。

世話になっている宿の一人娘……失踪した父親に代わり店を次いだデジットは、奴隷貿易を何より嫌う。彼女にこうして部屋を借りている身としては、奴隷貿易には手を出せない。そんなことをしようものなら西裏町から追い出さされる。

第一そっちに手を染めたなら、西の大組織TORAを敵に回す。暗黙のルールを破り、西裏町まで混血狩りに来た人間と奴隷商。西裏町から奴隷商を淘汰したのはその組織だ。その長は圧倒的な強さを誇る数術使い。彼らに二度と西へ踏み込ませないだけの恐ろしい地獄絵図を見せたとか。それでもそのTORAは何も戦闘専門請負組織ではない。あくまであの組織は情報屋。この国最大の、そして最高の情報屋。

俺の求める情報を握っていきそうな宛がその情報請負組織しかないのだから、機嫌を損ねるようなことは出来なかった。それがどんなに金になる仕事なのだとしても、悪魔に魂を売ることが、俺には許されていなかったのだ。

それと、もう一つ。俺が俺に強いた禁がある。

人殺しにだけはなりたくない。両親を殺したあの男と同じような物になんかなりたくない。越えてはならないその一線、それを頑なに拒んでいたけれど……あの人が見つからない。その年月が積み重なって、金だけが唯増えていく。金さえあればいつかあの人に手が届く。そのための情報が得られる。それだけが希望で、縋れる物で。金はあの空に散らばる星だ。それを集めて集めて集めて集めて集めまくれば、どんな願いも叶えてくれる。死者を生き返らせる、それ以外なら、なんだって……この世の全ては金さえあれば叶えられる

願いのだ。

俺は生き急いでいた。俺の目指す物の先に生などありはしない。償うために死ぬために、俺はその日を生きていた。そんな俺を心配そうに幼なじみの青い眼がもどかしそうに見つめていた。

「なんでそこまでして……あんたはお金が必要なの？ そうまでして知りたいことって一体なんなの？」

俺を見るその青は母さんのそれには及ばない。それでもその長い金髪と優しい青の雰囲気は少しだけ似ていたんだ。

母さんにもういいんだよって言われているような気持ちになる。それでも俺は俺が許せない。それだけじゃない。俺があの人に会いたくて……もう一度この眼であの人を見たくて。そのために俺は金を集め続けるのだ。所詮はエゴだ。解っている。それでも立ち止まれないのだ。

「……それじゃあ仮に俺がある国のそれは有名な貴族の家の騎士で、行方不明のご主人様を捜してるとか言ったら信じてくれるか？」

「ううん、無理。私のこと馬鹿にしてるか適当な嘘で煙に巻こうとしてるかって思うわよ普通」

「だよな」

「もう……そんなに私が頼りないなら別に良いわよ！」

俺が本当のことを話す気がないので彼女は呆れてしまうけど、どうしろって言うんだ。我ながら嘘みたいな本当なんだ。信じて貰えるはずもない。俺だって縋れる記憶が日に日に遠くなり、夢だったんじゃないかとさえ思う。

俺に残された過去の証明は、両親の形見だけ。親父の剣と、親父がマリー様の……母さんの騎士になった時に親父に送ったその指輪。俺の身元を保証するのがそれだ。

もっとも俺の得物を見てそれと知れるのは親父と戦ったことがある奴くらいだし、指輪を見て解るのはシャトランジアの上層部くらい。つまりこの世の殆ど9割以上の人間は、俺が誰なのか解らない。そうやって過去を奪われれば俺も正しいことがあやふやになっていく。こんな俺がシャトランジアの王族だって？馬鹿みたいだ。こんな腐った国の裏町でその日暮らしみたいなの俺が。

「……でもその怪我は先生に診て貰いなさいよ」

呆れながらもディジットは俺の心配はしてくれる。それでも受け入れられないことはある。俺は地下室に棲み着いたあのタロク人が嫌いだ。何もかも勘に障る。互いにそうだ。生理的に受け付けない。俺の本名を知るあの男は、初対面時から俺を鼻で笑う等、気に入らない男だった。それにあいつも人殺しだ。元々タロク貴族だ。タロクからは指名手配されているとのことだが、ここに何しに来たのか怪しいものだ。最悪そういう建前で狂王からあの人を捜せと命じられた可能性だってある。俺が先に見つけて守らなければ。

数年のセネトレアでの生活は、俺の心を荒ませた。信じられるモノが本当に何もない。あるとしたらこの店くらい。ディジットだけだ。それだけだった。

大金に目が眩んで、だけど一人じゃこなせないような大仕事。そういうのを諦めきれなくて、これまで何度か仕事を誰かと組んだこともあった。けどどいつもこいつも俺を裏切る。金だって隙あらば10割持っていこうとする。

こうなれば仕方がない。小さい仕事を積み重ねて、大きな仕事をくれそうな依頼人の信頼を勝ち取っていく。堅実的な仕事をするしかない。悲しいことに大金の仕事での揉め事に巻き込まれるよりは、小さな仕事で自分が10割貰ってそれを繰り返す方が実入りの良い仕事となった。

人殺しはしない。それでも大金を手にするには、命を賭ける必要

がある。それが他人か自分の命かって話。他人を殺せない以上、俺が賭けられるのは自分の命だけ。戦闘依頼は危険な仕事ほど報酬が高い。強くなればその分手っ取り早く稼げる。大怪我して金を稼いでもその治療で消えるなら意味がない。俺は自分の身の丈にあった仕事をしている。この位の怪我なら問題ない。

「嫌だ。あんな奴に診察されたら幾らばったくらわれるかわかったもんじゃないねえ」

そうは言ったが、俺は唯の一度だけ……瀕死の重傷を負い、あのクソ野郎の治療を受けたことがある。その原因を作ったのが……ロイルという名の男。

そんな身体に鞭打って、無茶を続けた先での仕事でだ。俺は一人の男に出会う。黒い目と髪その男はタロック人だ。真純血では無いだろう。目の色は半分真純血のそれより薄い。それでもその黒髪は見事だ。角度によって紫がかって見えるのが印象的な奴だった。俺が一番好きな色は紫だから、少し目を惹かれたのは逃れようのない事実だ。

「お前、名前は？」

その男も、いや……当時はまだ俺もあいつも少年と形容しても良い年だった。その少年はそれまで死んだ魚みてえな面をしていたのに、俺の目を見た途端にぱあっと明るい笑顔になった。純粹な子供のように強者との出会いを喜ぶそれは、俺の力を嗅ぎ取って、それに歓喜する戦闘狂のその顔だ。

「時は金なりって知ってるか？」

俺は金が必要だ。依頼を遂行しなければ残りの金が手に入らない。

俺には戦いを楽しむ趣味はない。こんな時間を食いそうな奴に捕まるより、さっさと依頼を遂行したい。俺の依頼はこの少年を倒さずとも遂げられるもの、そのはずだった。

そいつが任かされているのはある宝の守護。だがそれは盗まれた物であり、俺はそれを取り返すのが仕事だった。見れば阿呆そうな面だ。上手く騙して逃げればそれで良い。適当に相手をして隙を窺うか。そう思った。それが間違いだった。

ある程度経験を積んだ俺は手の抜き方も覚えていた。そう。そもそも金さえあればのセネトレアにこんな男がいるはずがなかった。俺の常識、この狂った国の常識を更なる狂気、或いは正常にいかれた神経で覆したのはそいつ。

「んじゃ、俺が勝ったら教えろよ！」

「ふざけるなっ！」

勝ったらだって？馬鹿言うな。その時俺が生きてる保証がないだろうが！殺すつもりが無いならそんな危ない攻撃するな！

手を抜く？馬鹿か？隙だって？んなもの全くない！手を抜いたら俺が死ぬっ！

そう思い必死にその猛攻に食らいつく。

「初めてだぜ。この国でそんな目をしている奴を見たのは！」

「何のっ、話だっ！！」

一撃一撃が半端無く重い。何度か攻撃を防いだけで腕に痺れが生じ始める。そんなに背丈や体格は変わらないはずなのに、なんつう馬鹿力だ！このままともに相手をしていたら得物ごと俺の骨にヒビが入ってしまう。そう考え、俺は避けることに専念。そうして機を窺うしかないだろう。

「死んだ目してる、他の奴らとは違う。腐ってねえのに死んだ目だ」

唯金を求める金の亡者達とは違う。金が欲しくて金が欲しいんじゃない。目的があつてそのための手段として金を求めている。そんな俺の目は腐っていない。それでもその目は死を見つめていると戦闘狂の嗅覚が嗅ぎ取った。

「お前は死ぬのが怖くねえ。それでも何か目的がある。それはよ……つまり、こういうことだろっ！」

「んなわけあるかっ！」

戦うために生きているんじゃない。死ぬために戦っているんじゃない。俺はあの人に殺して貰うために生きているんだ！他の奴に殺されて堪るか！あの人あの白い指に俺の首を絞めて貰うんだ。あの日俺がそうしたように。その罪を償うように。

だから負けられなかった。そいつには明確な意思がない。唯戦うことに意味を見出すだけ。俺は仕事を引き受けた以上、依頼はこなすし金は絶対手に入れる。一秒一秒、気が急ぐ。それが命取りになるのでは。あの人はもうどうにかなっている。死体さえ残らないなんて、そんなことさせて堪るか。俺の金集め、俺の仕事。それを邪魔する奴は皆敵だ。あの人との再会に、立ちほだかる奴は皆敵だ。確かな憎しみを持って俺はそいつと対峙した。疲れていたんだ。うっかり手が滑ったなら殺してしまっても俺の所為じゃない。その位に考えていた。多分、それが間違い。死ぬつもりじゃない。それでも互いに、あの日……俺達は、殺すつもりでやり合った。

その結果……俺が目を開けたのは見慣れぬ薄暗い部屋だった。

「まったく、面白味のないガキめ。年齢なら許容範囲にありながら……ここまで診察、治療のし甲斐のない身体もそうそうない」

母は美人だったのに、お前には父親の色がよく出過ぎてしていると呆れたように言う洛叉。

俺はそこまで親父に似ているとは思わないが、親父を知るこいつが言わせれば外見はまだ似ているとのこと。

初対面時から俺はこいつを変態変態と言いつづけてきたが、この男はあくまで少年少女性愛者であり同性愛者ではない。年端もいかないう少年は好きだが、野郎に興味はない。故に戦闘を繰り返して適度に筋力の付いた俺の身体にはまったくそられないそう。むしろ俺としてもそっちの方が有り難い。

しかし、目覚めて一番最初に見るのが大嫌いな男というのは気分が悪い。第一その第一声が酷いにも程があるだろう。

「変態に欲情されるくらいなら首吊って死んだ方がマシだ」

「失敬な。貴様のような鳥頭に手を出すくらいなら、俺も憤死しかねんぞ」

「んじゃ死んでくれよ、今すぐに」

「減らず口を叩ける位には回復したようだな」

それならさっさと出て行けと、俺は診察室から追い出された。不意に甦る痛み。腹が痛んだ。服を捲れば包帯からまだ血が滲んでいる。後から聞けば何針も縫う大怪我だったらしい。

これで洛叉に医療費ばったくられたら俺の貯金がやばい。俺が貯め込んでいるのはバレているだろうしあいつは鬼のようにかっぱらって行くだろう。

「アスカ、もう大丈夫なの？」

上の階へと上がれば、俺に駆け寄ってくる宿屋の少女。

「ディジット……心配してくれたのか？」

「当たり前でしょ！」

彼女のこういうずけずけと物を言う様が俺は好きだった。父親の前では息を潜めるように生きていた、昔の彼女を知っているから尚更。

「……私が先生に頼んだの。お札に家賃三ヶ月分タダにしておいたから、代わりにあんたの家賃向こう一年一割増しよ！」

元が取れるのか取れないのか微妙な要求は彼女なりの俺への気遣い。俺と洛又の仲の悪さを知り、それで両方に言い訳と逃げ道を作らせる。

なんだかんだで洛又はディジットに甘いというか、頭が上がりないところがある。聖十字に終われていた犯罪者のあいつを匿ってくれたのは彼女なのだから、当然と言えば当然か。

彼女に適度に礼を言いつつ、俺は自室へと戻るために階段を上る。だが俺には宿まで帰って来た記憶がまるでないのだ。

(……何があったんだったか)

俺が覚えているのは、最後の痛み。あいつと斬り合って、守りきれずに腹に一撃食らった激痛。それでも俺もぶつけてやった。

そこからなにがあったのか。どうにもこうにも思い出せず俺は自室の戸を開ける。鍵が掛かっていなかった。そのことに違和感を感じたその直後……俺は訪問者の声を聞く。

「よ、生きてたか」

「勝手にお邪魔してすみません」

二人の訪問者は外ではなく、中に。俺の部屋の中にいた。

金髪のカーネフェル人の少女と黒髪のタロック人の少年。その黒髪の方は忘れようにも忘れられない。まだ切られた傷が痛んでる。

「おい、何人様の部屋で寛いでるんだ？」

「んだよ、こまけえことは気にするな」

「気にするに決まってんだろうがっ！」

「……うるせーな。ほら」

「え？」

ロイルが投げて来たのは俺の仕事の依頼品。こいつが守るはずだった宝。なんとかそれをキャッチするも、危うく弾き落とすところだった。万が一壊してたら大変なことになっていた。

しかし本来この守りを命じられていたこいつがどうして？ 礼を言うべきか依頼がパーになるところだったと責めるべきかちよつと迷う。

俺の視線の意味に気付いたのか、礼など不要とロイルは笑う。

「俺らお前に負けたからあそこの仕事クビになったんだわ。なんか苛ついたからこれ持って来た。お前にやるよ」

「やるよって……あのなあ」

俺としては依頼が達成できるから助かるが、そんな子供の腹いせみたいなことをよくやるな。

「……って、負けた？」

つーことは俺がこいつに勝ったのか？ 全然覚えてない。俺の記憶が有る限りでは、むしろ俺が劣勢だった。

「ついでにここにお前を運んできてやったのも俺様だ」

感謝しろと言うよりは、俺って凄くね？という自慢みたいだ。確かに……俺だってそこそこ身長はある方だし、こいつの方が少し低いかも。平然と自分とそうそう背丈の変わらない相手を運ぶって言うのは凄いつっちゃ凄いかもしれないが。

「でも俺にこんなことする義理、お前らにはないはずだろ？」

「そうは思ったんですが、ロイルがどうしても言いますので」

少女の方が苦笑する。それにロイルの目が輝いた。何かを思い出すように。見れば俺が戦った時より包帯の数が増えている。元々生傷の絶えない物騒な仕事なんだろうとは思ったが、……その増えた分は俺が付けたってことなのか？

しかし心当たりのある箇所と、そうではないものが多数ある。後者の方がより適確に急所を狙いに行っている。まるでこいつは本当に殺されかかったような……

（それを、俺が……？）

信じられない。だが仮にそれが真実なのだとして、普通そんなことをした相手に……こんな笑顔で接する馬鹿がいるだろうか？ いるわけない。いるはずがない。だが目の前にいる。

「リイナも見ただろ？」

「ええ。貴方が興味を持ってしまうのは無理もないわ。ギリギリとはいえ真っ向勝負で貴方を負かすなんてそうそうないもの。卓越した剣技があってこそ……何度か止めに入ろうとしましたが、あ後は全く隙がありませんでした」

「え？」

リィナと呼ばれた少女はくすりと笑って手にした弓を指で弾いて遊ぶ。その三本弦は楽器のように綺麗な音を奏でるが、その旋律に俺は戦慄する。俺は少女の気配は気付かなかった。隙あらば後方支援で俺を射殺すつもりだったのだと知り、ぞっとした。女って怖い。

「そんなわけで俺はお前が気に入った！もっかい俺と勝負しろ！」

「普通に断る」

「えーけちけちすんなよ。別に良いだろ？減るもんでもねーじゃん」

「減るっ！医療費に俺の貯金が！最悪命まで減るだろうが！」

「は？だってお前別に死んでも良さそうな顔してたじゃねえか。っていうか元々死んでるみてえな」

「馬鹿なこと言うな！勘違いで人を死に差し向けようとするのは止めて貰おうか！」

「そう言わずに、もう一戦だけでも。こうなったロイルはしつこいですよ？多分貴方が死ぬまでまとわりつきます。そんなの貴方も嫌でしょう？」

「それは嫌だが、戦っても死ぬ可能性があるんだが」

「つか、この部屋になんか食い物ねえのか？腹減った。昨日から何も食ってねえんだよ」

「知るか」

「でもなー。住み込み食事有り無くしたのは痛いかな」

「でもロイル、あそこその代わりに給料一切でなかったじゃない。その分元を取れるよう二人で食べまくってはいたけれど」

「あのなあ、お前ら請負組織初心者か？そんな理由で仕事を選ぶな！あそこかなりブラックな所だったんだぞ！？それくらい調べて仕事引き受ける！“賄い付き！”表記は飯以外の報酬は出ねえ！“住み込み可”は、給料一切出ない宅内契約合法奴隷募集中！“昼寝付き”は昼から風俗業って意味だ馬鹿っ！裏町なめんな！……まっ

たく、お前ら何処の箱入りだよ……」

ロイルは馬鹿だし、女の方はおっとりしていて世間ズレしている。

「あら、そうなんですか？でも背に腹は代えられないとは言いますし」

「……どうのことだ？」

「ちよつと私達訳ありで。なかなか部屋を借りられないんです。そうなると高額のお金が必要になりますし、仕事の選り好みも出来なくて」

身元を保証するものがない。それならそれを問答無用で、振り払うような金が必要。幸い俺は運が良かっただけで、普通はそれが当然だ。貸し宿もそういう客からはぼれるだけぼったくろうと思うのが常。

この裏町に放置するには目覚めが悪い。面倒臭いことになった後、また仕事で鉢合わせても嫌だ。ここまでインパクトのある奴らだと、何処かで死体と再会するのも気分が悪い。

「仕方ねえ……確かデジタル上の階が空いてたって言ってたな。俺の口利きで家賃安くして貰えるよう頼んでやる」

「でも、私達今は家賃を払えるお金ありませんよ？勿論敷金礼金も」

「当面の金なら気にするな。しばらく俺の仕事に付き合え。請負組織が何なのか、一から叩き込んでやる。後デジタルはその辺甘いから身の上話でも適当にしてやれ。そうすりゃ大目に見てくれる」

二人が請負組織として一人前になるまでの間、暫く俺は二人と時間を共にした。ロイルは戦えればそれで良い奴だし、リイナも差ほど金には興味がない。生活資金が手に入ればそれで良いといった感

じだ。だから当然依頼金を奪って逃走するなんてことは一度もなかったし、それどころか世話になってるからと、取り分の面で俺を立ててくれることも多々あった。

ロイルは相変わらず油断も隙も無い奴で、隙あらば俺との殺し合い狙っていたが、徐々に俺もあしらい方を覚えてきたし、所構わずは流石にリィナもキレて次第に奴も少しは自重するようになった。その頃には殺し合いがじゃれ合い程度に変わってきていたのかも知れない。俺が多少構ってやればしばらくは諦める。やる気を出さない俺から本気を引き出すのは難しいと理解したのかも知れない。第一俺だって奴の言う本気って言うのが解らない。俺の知る本気は、奴に刺されたところで終わったはずだったんだから。

ちなみに二人が俺と別れ自分たちの請負組織を作った後も、そんなやり取りは続いていた。俺はセネトレアでの生活が長くなるにつれ手を抜くことを覚え、仕事の効率化を図るようになった。しかしあいつはどんどん強くなるし、正面から相手なんかしてられない。武器か俺が壊れる。俺の卑怯戦法に磨きが掛かったのは半分以上奴の所為だ。これを素直に成長と言って良いのかは、自分でも判断に困る。

……それでも、だ。ディジットという理解者がいても、彼女の店っていう居場所があっても……仕事の面では俺は一人だった。無茶してたんだな。金が絡むとどいつもこいつも信用出来ねえ。みんな敵に見えていた。

だがあの世間ズレした二人は、そんな俺の思いこみを変えたんだ。こんな言い方は恥ずかしいが、仲間のようなものだと言ってもいいのかもな。腐れ縁と言えばそれまでだが、その腐れ縁もいつの間にか、俺の生活の一部に溶け込んでいたんだ。

そう……“瑠璃椿”が現れるまでは。

＊

回復が終わり、再び攻撃に乗り出した俺を見て、ロイルが笑う。

「そいつが、新しい剣か！譲った甲斐あったぜアスカあつ！！」

第二島でロイルに譲られた触媒。そこから作った新たな刃、風琴刀ハルモニウム。一振り一振りに奏でる風がまるでオルガンのような音を出す。だから一連の技の動きが曲になってしまう。攻撃の型を曲によって覚えられてしまうと言うのがこの風琴刀の欠点だ。

もっともその性能自体は悪くない。

モニカを刀身に宿らせ数術で刃を強化。風の数術で攻撃を受け流し、隙あらば風で切り裂く。刃を防いでも風まで防げはしない。この剣なら遠くからでも風を送り鎌鼬のように切り裂くことが可能なんだが、今は風向きが悪い。接近戦でしか使えそうにない。それでも十分優秀な剣だ。

しかしそんな剣とのやり取りに、ロイルは満面の笑み。本当にこいつは今を楽しんでいる。先程までの憂いもやるせなさも全て今は何処かに置き去り。俺との邂逅を心から喜んでいる。そういう姿を見て、俺もそうなればいいのになと反面、なれない俺はこいつへの礼儀に欠けているんだろうと恥ずべき心もある。

昔のあいつはいつもこうだったが、次第にオンオフを切り換えられるように成長した。オフの時は俺に似て面倒くさがりな所もあったが、やっぱりどこか俺に似てお人好しなところもあった。リフルの頼みを聞き入れてフォースの依頼に協力したり、ディジットの下へアルムとエルムを取り戻すため、帰りたくもない城へと帰って、王位継承権までかなぐり捨てて……それでも足りず、こうしてヴァレスタの下に降った。

兄である男を、恩人の縁者を見捨てられない。そう言う気持ちがあるこいつは、真っ当に育ち真っ当に生きたならそこそ良い王になったんだろう。それが何処でどう狂ってこいつがこんな戦闘狂になっちゃったのか。やるせない気分になるのは俺の方だよ。

全然あいつと似ていないのに、リフルのことを思い出してしまう。

王の器にあるのに、その身分を失った。……正確にはこいつは投げ出した。自分のためじゃなく、他人のために。

一度逃げたとか、国を思っていないとかそういうことじゃないんだよな。お前は。お前の国は、リイナだけだった。それが広がった。そこまで接点がなかったはずのエルムも見捨てられずに……お前の守ろうとした国ってのは、あの日常だったんだろう。

リフルがそこに来ることで壊れた、壊されたそれ。それがもうもう一度同じ物に戻せないと解っている。だから、二年前のレフトバウアーのことを口にした。戻りたいではなく、戻れないんだと言ったのだ。

俺がリフルを追いかけた一年半……その傍で藻掻いたこの半年。お前はお前でお前の新しい国を作ろうとしたんだろう。守る範囲は、自分の国は何処までか。その時に一度捨てたはずの兄をも抱え込んでしまった。だからお前はそこにいるんだろう？　こうして今、俺の敵として。

(何だかなあ……)

笑えてくる。向こうはこの二年ででかくなりやがった。抱え込む相手が増えた。お前の国はお前の世界は広くなった。だが俺はどうだ？　俺は切り捨てていったばかりじゃないか。あいつ以外何も見えない。何も要らないと……大切にしてきたはずのものを蔑ろにし続けた。

俺は俺が押されているのは何も力の差だけではないと思い始める。勿論この二年、俺だって変わった。多くが防がれている、交わされてはいるが一撃一撃を殺すつもりでやっている。そういう思い切りはある。それでも決定的な何かが俺からは欠けている。失われている。そんな気がしてならない。ロイルが磨いてきたのは守る力で、俺は殺す力。入れ代わっちまったみたいの違いで剣を振るっている。

この二年の俺は以前に増してろくでもない男だった。

ディジットのピンチも知らず、双子のことも構わない。腹違いの妹と揉める洛叉の悩みはどうでもいいとして。トーラからも離れ西から離れ、東へ行った。あいつへの手がかりが手に入るなら何でも良かった。

それは今思うと変な話だ。内心俺は、最初はロイルを恐れていた。再戦することを主に恐れた。俺に負かされた、その男はそれ以来俺に興味を持った。付き纏ってまたあの、死と隣り合わせの戦いをと俺に迫るから。

そんなの御免だ。俺は人殺しはしちゃいけない。狂王と同じ生き物になんかなるものか。そうやって、逃げて逃げて逃げて来た。

その先でとうとう見つけたあの人は……俺が何より拒んだ生き物にその身を落としていた。この世で一番神聖だと信じた人が、俺の所為で、俺がこの世で何より嫌悪する……人殺しになってしまった。

だというのに俺は再びその色をこの眼に映せることが嬉しくて、幸せで、泣きそうで……その絶望を正しく感じられない位その再会を喜んだ。あの人のその美しい手を汚させるくらいなら、俺がその代わりに殺しても良い。命令さえしてくれるなら……そう思った。その位俺にとっての禁忌の程度が軽くなった。不思議なくらいに。

俺がその絶望を正しく理解したのは、再びその人が居なくなっただけ。その人が俺の傍から消えたのは、自身の人殺しの力を憎んでだ。瑠璃椿にとって、殺人は禁忌ではなかった。主に俺に命令されたなら、相手が何であっても彼はそれを殺しただろう。だけどリフルはそうじゃない。

リフルは人殺しに罪を感じ始めた。それは自身の名を知って父親がああ狂王と知ったからだ。俺と同じだ。あの男と同じになりたくないから、理由のない人殺しを拒んだ。自分のために誰かを殺してはならないとあの人は学んだんだ。だからこそ、自身の罪を自覚した。例えばその目の暴走でも、人殺しは人殺し。言い逃れは出来ない。

あの人が……あいつが死を見つめるようになったのもそこからだ。

あの日俺があの手を放さずに、ずっと傍にいられたなら。命令に背いてでも、海へ飛び込むその手を掴み、共に落ちることが出来たなら。あいつはいつか自分を許せた。死ぬために生きるような者に成り得なかった。

いつもいつも、俺の所為。トーラはリフルを匿って、俺に情報を与えなかった。いつまで経ってもあいつの安否を知らせないトーラに痺れを切らし、俺は東へ行った。あいつに会いたいがために、もう手段は選ばずに……あの半年俺は奴隷商に荷担したし、何人も殺した。

結局はやっぱり会いたって言う俺のエゴ。それを知ったあいつはますます死を見つめるようになった。俺の所為とは一度も責めず、そうさせた自分自身をあいつは深く呪っていた。

俺はあの聖十字の坊やみたいにはなれないから。離れていてもお前の支えになれるような奴とは違う。隣にいても救えない。俺ではあいつを生かすことが出来ない。いつそ俺が狂ってどうしようもない人殺しになったなら、それは未練に変わるだろうか？自分が傍にいないければ、俺がそういう者になってしまおうと自覚させれば、ずっとあいつは生きていてくれるだろうか？

(下らねえ……)

そうだ、下らない。

無理だ。あいつならきつと……悩みに悩んで最後に俺を殺しに来る。そしてそのすぐ後に自分の命を絶つだろう。自惚れとかじゃないが解るんだ。あいつはそういう奴なんだって。

聞かなくても解ってしまうようなこと、それを考えてしまうような時間の無駄をしてしまう。

それくらい俺の国は世界は狭くなった。この二年、俺は前に進んでいるのか後ろに進んでいるのか解らない。歩いたつもり、走った

つもりで我に返れば本当はもう道も足場も底にはなくて、俺は何処かに真っ逆さまに落ちている最中なのかも。それでもそこに一緒にあいつがいてくれるなら、それでいいと思ってしまう。その位俺の世界は、心は狭い。……それでいて、俺はこんなにも弱い。剣が押されていくのは、力負けだけではないだろう。

ここまで来た、その過程を悲しむ心がロイルにはある。それでもこの一瞬を、この一戦を悔やむ心はない。その剣に迷いの心は微塵にも感じられない。本当にお前は楽しそうに笑っている。あの日の再来が訪れたことを心から喜んでいるのだろう。

(リフル……)

ごめんリフル。俺はお前が何よりも大事だ。お前のためなら他の何もかも、捨てられると自負している。それでも俺も人間だった。痛む胸はあるらしい。だから、俺の剣には迷いがある。

お前を探した九年間……それは凄く凄く長かったんだ。この二年なんてあつという間だ。お前がそこにいるだけでこんなにも時間の流れが変わるなんて思わなかった。お前がいる限り、俺の一生なんて瞬く間なんだろう。幸せってそういうもんなんだなきつと。

だからこそ……だ。お前が俺を知らない、眠っていた一年をカウントしても三分の一。九年の歳月には至らない。その間いろんな事があつたんだ。全然話せてないし、一生話せないようなこともある。あまりにも情けなくて、みつともなくて、本当に自分が嫌になることも何度もあった。長すぎたんだ、あの九年は。

お前を見つけるそれ以外の生き方も出来ず、保身にも走れない。そんな中途半端な心で惚れた女を落とせるはずもない。国にも帰れない。今更王位に興味もない。面倒事を増やすのも面倒だ。

何もかも中途半端で適当で、金だけを集め続けた俺は、それでもあの宿の連中に世話になったり世話したり、そんなこんなで生きていた。

エルムもアルムも、出会った頃は本当にちっこいガキで……4才くらいだったかな。今から八年前か。当時の俺は10で、ディジットが9か。……結構あいつらとも長い付き合いだったんだな。でもそうか。セネトレアに来てすぐ行き倒れてた俺をディジットの親父さんが拾ってくれて……その親父さんが失踪したのがその二年後。その失踪の原因になったのがあの双子なのだからそれで合ってる。

（八年か……）

エルムとディジットも、5つしか違わなかったんだな。いつまでもガキだと思ってたが……そうだよな。もう4、5年もすれば気にならなくなる程度の年齢差だろう。でもまあ……そんなに長く子供みたいに相手してきた彼女からすれば、いきなり男として意識してくれて言われても困っただろう。絶対にあり得ないことだが、俺がアルム相手に女として見てくれといわれているようなものだ。無理だ。あの変態なら余裕とか言いそうだが生憎俺は変態じゃない。

その後は何があったんだっけ？あの変態が宿に立て籠もり、ディジットを人質に取ったのは確か俺が13ん時。ディジットは12……つまりディジットは当時完全にあの変態のストライクだったわけだが、あの頃のあいつは今より無口で根暗で、そんな変態らしい素振りを見せなかった。物騒なことしか考えていない、暗い目をした男だ。第一印象から危険な匂いがしていた。だから俺は警戒した。

それがあそこまで軟化したのは誰のお陰だったんだろうな？少なくともあいつがロリ属性に目覚めたのは、そんな最悪な出会いをしたにもかかわらず、犯罪者を通報もせずを客として迎え入れたディジットの慈悲に触れてだったんだと思う。そこでディジットに惚れるではなく何故その才能の開花に至ったのか、変態の考えることは俺にはよく分からないが、

後に洛叉自身から聞いたがディジットがあの変態に惚れたのは人質が犯人に惚れてしまうとと言う症状らしい。故にそれは病気という

精神疾患なので本気で相手にしなかった。そういうことなのかもしれないな。

（それから、それから……）

ロイル達と会ったのはその一年後……俺が14ん時だったかな。その一年はあいつらとよく一緒に仕事して。俺とロイルが15、リイナが14になった時にあいつら組織として独り立ちしたんだ。そこからの二年間はたまに手を組んだりもしていたな。そうだ。その年だ

。俺が17になった年。俺は瑠璃椿に出会い、那由多様と再会した。こうやって振り返ってみるとロイルとリイナとあの宿で過ごした時間は三年。出会ってから五年が経過しているが、実質三年。まだ俺がリフルと過ごした時間より十分長い付き合いだ。

《ちょっとアスカ！やる気あるの！？》

（あ、悪い）

剣に同調しているモニカに怒鳴られる。同調している間は俺の心は思考は筒抜けなのだから仕方ないか……いや、今は俺に同調してるんじゃないくてダールシュルティングなんだから、そこまで筒抜けではないはずだ。それでも俺の様子がおかしいことには気付くほどには俺はどうやらおかしいらしい。

それでも一撃振り下ろし防がれ押され弾いて庇って守って振り切り距離を取る。そして仕掛けて仕掛けられ、そんな刹那の攻防に、俺の脳は目まぐるしく動き出す。

《解ってる？解ってるはずよ！この男の桁違いの幸福値っ！》

（ああ、だな）

まともにやり合って、まともにやらなくたって、どう足掻いても勝てる気がしねえ。それでも勝たないといけないんだ。

(なあ、リフル)

こんな無理ゲー、勝っても何も褒美がないって言うのは酷くないか？俺はこれから三年分の思い出全部殺しに掛からないといけないんだ。

それならこの一年、どうか生き抜いてくれよ。俺の捨てる時間よりも長く俺の傍にいてくれよ。じゃねえと釣り合い、取れないだろう？

どんな途方もない目標だって、その先に約束されたものがあるなら俺はやる。俺の剣が迷うのは、お前が約束してくれないから。

どうか声を聞かせてくれ。俺の名を呼んでくれ。こんなエゴ丸出しの俺の願いをどうか聞き届けてくれ。お前が約束してくれるなら、俺はこれまでの十九年分の過去をぶん投げて構わない。これから十九年先まで、お前が死を見つめずに居てくれるなら、俺はこの審判の勝者梓だって歪めてみせる。俺もそこまで生きてやる。

そうだ。どうか、約束してくれよ。せめて、その言葉を交わすまで、どうか死なないで、生きていてくれ。お前の目を取り戻してやるから。大丈夫だ、すぐに痛くなくなる。数術で治してやる。

(……約束？)

不意に甦る声。星の降る夜。その直前に俺達は何かを約束しなかったか？

“私は願いがある。その夢を叶えるまで、私は死なない。何を失っても私は生きる。私にはまだやるべきことがある。だから無茶はしない。自分の命を軽んじない。お前に誓おう”

そうだ。リフルはそう言った。俺に約束してくれた。でもその願
いって何？

奴隷と混血の解放？狂王を葬りタロックの民を救うこと？周りの
人々を守ることに？

周りの人々。もう欠けている。ラハイアがない。その変えるこ
と無い空白の不在は、あまりにもあいつの心を深く抉った。それ
でもまだ同じことを願えるのか？

(……………)

あの日あいつは俺に助けてと言った。弱い自分を支える剣になっ
てくれ。私に守れないものを代わりに守ってやってくれ。あいつは
確かにそう言った。

狡いよな、その約束は。今頃俺は主様が俺より一枚上手だったこ
とを知る。この俺を騙すとは、卑怯に磨きが掛かっている。この俺
を卑怯で越えるなんて、とんだ悪女男だ。

その言葉は、あの人の生死が限りなく不明な今においても発動す
る。

ロセッタの選んだ扉、その先にリフルはいなかった。それでも正
解はあった。あんな新参者のお嬢ちゃんに解ることが、俺は解って
いなかった。

俺が戦うべきはリフルの目のためではなく、あくまで迷い鳥とい
う街を守るためにやらなきゃならねえ。出来る限り迅速に倒す。そ
れが出来ないのならこいつが街に向かうことが出来ないように、限
りなく長く足止めをしなければならぬ。

「……アスカ？」

俺の纏う雰囲気、そして目の色が変わったのに気付いたらしい口

イルは手を止めた。

「そうか……お前と最後にやり合ったのは、もう二年前なんだな」
「ああ、リフルがお前の所に来た日だろ？」

どうせロイルの馬鹿だ。覚えているはずもない。洛叉の変態は俺を名前表記から鳥頭と呼んでいるが、本当の鳥頭はこいつだ。興味の無いことはすぐに忘れる。だから俺は、俺が呟いた言葉に言葉が返されるとは思わなかった。それに俺はようやく迷いを振り払う。

まだ何処かで昔なじみとの戦いに抵抗があった。頭では口では何を言ってもそれは確かにあったんだ。

「……っち。ああ、くそっ！止めだ止めっ！モニカ」

俺は剣からモニカを剥がし、同調を止める。それにはロイルも驚いたよう。見えてはいないが俺のプレッシャーが軽減したのに気付いたのだろう。途端に間抜け面になる。

「……………え？」

「どうにもこうにも集中できねえと思ったら、そういうことだったんだ」

俺は新しく手に入れた刃を鞘へと戻し。剣を入れ換える。即死刀は壊れた。残っているのは猛毒刀と鋼鉄刀。俺が引き抜いたのは、鋼鉄刀。ロイルの馬鹿力とやり合うにはこれしかない。切れ味は悪いし重いことこの上ないが、選択肢は他にない。

「俺がモニカの力でお前に勝ってもそれは俺の勝ちじゃない。この一戦だけはモニカに頼るのは俺の負けだ」

《はあ！？何を言ってるのアスカニオス！！リフルちゃんが大変

な時につ……」

「リフルは死なねえ！俺の主を馬鹿にするな！」

これはいつもの卑怯で勝って良い勝負じゃない。俺が正面から勝ち取らなければならない勝負だ。譲れないものが俺にもこいつにもある。だからこそ……

それに勝機がないわけじゃない。ここまでやりあって理解した。相手は俺より強いカードだ。俺は卑怯にも毒に頼ろうと思った刹那もあった。しかし風向きが悪い。悪すぎる。奴は追い風、俺には向かい風が常に吹く。小細工では打ち負かせない。唯一の勝機が、俺が逃げ続けた真剣勝負。純粹に剣と剣の技と力、それで競い合うしかない。

俺が本当に本気でやるにはこうだ。迷いも加減もあり得ない。そのくらい追い詰められなければ駄目なんだ。

常に自分の死をイメージしろ。勝利でも敗北でも生でもない。勝てるとか負けちまう、じゃない。何処の判断を誤れば死ぬか。それを感覚的に察知するほど、気を研ぎ澄ませ。瞳を思い切りこじ開ける。道はこの死の先にこそある。

「……一つ聞いてもいいーか？」

剣を持ち直すため一度地に刺し、ロイルは疲れたように手を振るう。あれだけ重い剣を二本も振り回せばそりゃあ馬鹿のロイルの馬鹿力でも疲れはするか。見れば前に第2島で出会った時より包帯の数が増えている。また怪我をしたのか？

向こうには数術使いのエルムがいる。アルムが回復数術を使えない以上、エルムは回復に優れた数術使いであるというのがトーラの見解。どうして彼に治して貰わなかったのだろう？ロイルが傷の手当てを怠るというのは……過去にも何度かあったこと。対戦相手を認めた場合。その勝負の記憶を留めるようにわざとそれを治さない。

記憶力がないからそれがないと忘れてしまうつてことなのかもしれない。それならロイルが残す傷は、忘れたくない何かがあった場合と言うこと。

(……誰かに、何か……あったのか?)

トーラか? 鵲紅葉か? 蒼薔薇か? 誰を倒したかわからない以上、ロイルのカードがますます見えない。場合によっては俺の決意も碎きかねない。

(いや……)

俺よりずっと強いカードなら、むしろ好都合。俺にこいつが殺せないって言うなら本当になりふり構わず遠慮無しにやっちまっていってことだ。そう解釈する! そう思え!

「……何だ?」

自らを奮い立たせつつ、俺はロイルに言葉を返す。

「……お前が必死になって、金貯めて……探してたのってあいつのことなんだろう?」

疑う余地もない。あの日のお前を見れば誰にでもそれは解った。そんな口調でロイルが言った。

「……ああ」

それがどうした? 聞いてやれば、しばし奴は口籠もる。

「俺にはよくわかんねーけど……お前にとって主ってのはそんなに大事なもののなか？」

「当然だろ？俺にとっての全てだからな」

「……でもあいつは二年前までお前を知らなかった。だよな？」

「……ああ、そうだな」

「それっておかしくね？」

「お前はお前を知らない相手を探してた。死に物狂いで」

それは本来あり得ないこと。あり得たとしても普通じゃない。それでも俺にとっては自然なこと……

「あいつ、一体何なんだ？」

「何って……」

「お前は周りがどうでもいいような感じで構えてる。それでもそこまでどうでも良くもない。だから剣に迷いが出る。それでもそこにリフルが絡むと別だ。そうでもなかった物が本当にどうでも良くなる。思い切りが出る」

「……………」

「確かにあいつは綺麗だ。それでもお前がそれだけで何かに興味を持ったりするとは思えねえ」

普段美形揃いの混血に囲まれていても別に何とも思わないような男がそういう風になるのはおかしいと俺は指摘されている。

「おまけに弱えし毒有るし」

「……それでも俺の弟だ」

俺の口から漏れた言葉に一瞬ロイルが瞬きを忘れた様に俺の言葉を吟味する。そして今度は何度か瞬き。頭の中のリフルと目の前の俺を交互に見比べているのだろう。やがてロイルの口から出たのは、

疑う……と言うよりは率直な感想。

「……………全然似てねー」

「親父が違うんだ、当たり前だ」

「……でも、なるほどな。そういうことか」

ロイルはしきりに頷き、小さく笑って見せた。

「おい、アスカ」

「は？お前、これ……」

「俺じゃ戦う最中に落として壊したりしそうで怖い。お前が持つてろ」

俺に受け取らせたのは、この戦いの賭け品であつたはずのリフルの目。今は有り難くそれを大事にしまい込み……この持ち場を離れて一刻も早くあいつの所へ行きたい衝動に駆られるも、居場所の情報がまだわからない。それでもこれを俺が持つと言うことは、この戦いの意味が半分以上無くなるのだが……

「こんなもん無くてもお前は本気でやってくれるんだろ？」

「そうしねえとあの街壊されるんだろ？ならやるしかねえじゃねえか」

互いに笑って、再び剣を構える。

その前にここで、いつもの卑怯戦法に戻って毒で昏倒させてその辺に転がしておく……ということも勿論出来たが、この眼を俺に返してくれたこいつ相手に今はそんなことは出来なかった。

その時点で俺の負けだ。俺は何度もロイルとの勝負に勝ってはいたが、同時に同じ数だけ剣士としては負けていたんだ。

それを俺気にしていない風を装っていたが、自分が正攻法で勝て

ないことに磨り減るものがあつた。

それはプライド。俺の騎士としてのプライドだ。身分を地位を失
えど、誇りまで無くしたつもりはない。世間一般の騎士様とは違
うが俺にも誇りはある。

（負けて堪るか）

俺は騎士だ。王じゃない。王になるために育てられたロイルとは
違う。物心付く前から俺の傍には剣があり、生活の一部……身体
の一部として存在していた。それが騎士の家に生まれた俺の宿命だ。
むしろ俺って言う人間はおまけのようなもので、手にした得物が本
体。俺自身が一本の剣のようなものかもしれない。

だけどロイルは違う。剣を握るまでに時間があつた。王は大切に
育てられる。そんな危ない物に触れられるようになるには、ある程
度身体が出来上がってからだろう。俺よりも遅く剣を手にした相手
に俺がまともに勝てないというのは屈辱だ。それは俺という人間を
根幹から否定するに等しい痛み。

親父は俺に何も残してくれなかった。唯一の形ある物がこの剣ダ
イルシュルティング。

自分は王に身の潔白を証明し、マリー様を救うために城へ行く。
だから剣は置いていく。親父はそう言って俺にこの剣を預けた。預
けるって事は取り返しに来るってこと。生きて帰って行くという
……嘘だったんだ。

だって親父は自分の身が潔白じゃないことを知っていた。だから
もう一つ俺に置いていった物がある。

それは指輪だ。親父がマリー様に仕えた日に貰った指輪だ。宝石
などの飾り気はない。マリー様の髪の色を思わせる金細工の美しい
指輪。

その時から親父は彼女の騎士になり、誰よりも何よりもマリー様

を優先し守ることが義務付けられた。そういう契約の証なんだ。

悩みに悩み彼女が出した答え。それさえ優先し、親父は彼女を手放した。それで俺がどんなに悲しい思いをするか、知っていただろうに。親父は立派な騎士ではあったが、俺のことなんか何時も二の次で、親の資格なんか無い男だ。尊敬しつつ忌み嫌い、大嫌いで大好きだった。俺が捻くれたのは親父の所為だ。

親父の背中を見送る時に、なんとなく……薄々気がついては居たんだ。もう親父が帰ってこないような気はしていた。親父が俺にくれるものは、いつだって目に見えない物ばかり。その背中が俺に伝えたのは、騎士としての姿勢とか心構え。そんな物だった。

親父のマリー様への気持ちの何処から何処までが騎士としてのものだったのか、一人の男としてだったのか、俺にはわからない。

……俺だってわからない。俺がリフルを思うそれが、騎士としてののか兄としてなのか境界は定かではない。それでも逃げてはいけない時が、あることだけは教わっている。

俺の誇りが汚されることは、あの人を汚されるに等しい。俺の誇りは、あの人 of 思いだ。あの人 of 願いが俺の誇りだ。俺が守るべきはあの人 of 心でも身体でもなく、その夢で願いで理想の世界。

ラハイアのようにその心を支えられないと嘆くのでなく、数術使いのトーラのように教会兵器を振り回すロセッタのように桁違いの戦力を誇れなくても。この腕で……俺が守らなきゃならないものがある。

俺がそれを諦めない限り、どんな苦境にあってもあの方は必ず這い上がってくれる。今はそう信じたい。

「ロイル、お前が本気で来てるのはよく解った。だから俺も俺の力だけでお前にぶつからねえと意味がねえってことも理解した」

最初の戦い。記憶に残らぬ、他人伝えの勝利の記憶。それを塗り

替える時を、俺も待っていたのかも知れない。

「だから決着、つけようぜ？」
「おう！」

俺はそんな俺達を理解できないと言う……モニカの溜息を聞きながら、鋼鉄刀を振り上げた。

1::Qui omnes insidias timent in nulla

ロイル視点でも良かったんだけど、トーラと蒼薔薇戦のことを伏せる意味でアスカ視点。

2: **Primum est non nocere.**

「……遅い」

日はもう高くに登っている。いくら何でも遅すぎる。ロセッタはそのことに苛立っていた。

（あの馬鹿何処まで行ったのよ？）

探しに行きたいのは山々だが、ここを離れるわけにはいかない。こんな戦闘素人達ばかり残して持ち場を離れられない。

（何だってこんな一般人ばっかカードに選んだのよ）

裏町住まいの人間を一般人と言って良いのかどうかは置いておく。それでももう少し選びようと言う物があっただろう。幾らカードが上から下から決まるとはいえ、……この一帯はリフルに巻き込まれたカードが多い。キングに選ばれていた人間の周りにいたから選ばれてしまった。リフルが必死に彼らを守ろうとするのはそういう負い目があるからだろうか。

「赤髪のお姉ちゃん」

「ロセッタって教えたでしょ」

窓を開け外を眺めつつ、溜息を吐いている私に……桜色の髪の混血の少女が近づく。先天性混血児。その外見は私達後天性混血児よりも洗練された美しさを持つ。神子様程じゃないけれど、天使のように愛らしいと形容してあげても良いレベル。スタールビーのその瞳は私の赤より色濃い色だ。それでも純血のそれとも違う。彼女の

寛恕の揺らぎを移す輝きがそこには宿る。

「ご、ごめんなさいロセツタちゃん」

「ちゃん付けてあんたねえ……」

何故そうなる。さっき名前を教えたときは呼び捨てだっただろうに。何なの？嫌がらせ？親しみを込めてなの？

拷問後にこういう邪気のない子供を見るのは疲れる。私がどんなに汚い人間か思い知らされるようで。

（でも、妙だわ。あの子供……）

境界兵器を用いた拷問に掛けても口を割らなかった。それどころか途中から気でも狂ったかのように笑い出した。防音数術でそれが外に漏れることはないとはいえ、ずっとその狂気に当てられる私達の身が保たない。あの闇医者にストップを掛けられ私は外の空気を吸ってこいと言われたのだ。その間ここに落ち着くまで一悶着あったがそれはまあどうでも良い。

（子供相手には荷が重すぎた？）

精神負荷が掛かりすぎたのか。

勿論毒、というのは言葉の綾だ。それでもそう思わせ追い詰めた方が効き目が早い。脳波を読み取りやすくする。要は思考に隙を作るのが目的で……そのために大いに言葉責めで脅したし、引っぱたいたし蹴り飛ばしたし……

（でも、おかしい）

ちらと見れば私の横にはあの子供達と同じくらいの年代の少女

「な、何するのーロセツタちゃん」

「うっさい。ちょっと黙りなさい」

ちよつと頬を捻っただけで涙目だ。ついでに平手で頬を叩いてや
った。あ、泣いた。

「痛いよお……」

「うん、これがあんたくらいの年代の正しい反応よね」

「そんなことしなくてもアルムは本物だよ」

「……本物？」

「会議室でい眠りしてた子達は、トーラちゃんのお友達？あの子
達も数術使いさんなんだよね？」

何処か抜けているがこの少女も数術使い。視覚開花は私よりずつ
と進んでいる。

「そうか、しまった!!」

その正体を見破るまで行かなくとも、数術を使っているかいな
い。かまでは読み取ることが出来ていたのだ。

「早く言えええええええ、馬鹿っ!! ありがとう!」

私は少女を軽く小突いて会議室へと飛び込んだ。

「洛叉っ!! 無事!？」

「何とかな」

すぐ傍に壁にもたれた医者がある。少し怪我をしているようだ。

見れば吊していたはずの子供二人が縛めを解かれている。二人とも不気味な空気を纏っていた。

「相変わらず君は無粋なお嬢さんだね」

「その声っ、オルクスっ!？」

子供の一人が口を開くと、それは死神商会の頭の声がそこから飛び出る。ゴーグルを降ろしてそいつを見るが、その子に関してだけ言えば、それは視覚数術ではない。

「どういう、こと……?」

「前にここに忍込んだ時に、僕の妹のナイト君以外にもちよっかい出してたんだよね。今僕が操っている子がそうだね」

「操る……ですって?」

蒼薔薇のように目を埋め込まれたってわけでもないらしいのに。不思議がる私を死神がけたけた笑う。

「リアの件で気付かなかったかな?僕は元々今の仕事を始める前に、脳を弄る専門だったんだよね。お嬢さん、君の知り合い……或いはその知り合いの知り合い辺りには僕のお世話になった子がいるんじゃないかな?」

「幾ら拷問されても僕自身は痛くもかゆくもないからねえ、君たちは罪のない子をいたぶっていたわけだ。それが正義だって?あははは!面白いねえ教会は」

「黙りなさい!」

「撃つなら撃つても構わないけど、貴重な情報源が無くなるよ?それに君の好きだった聖十字君が君に失望するんじゃない?」

「っ……あんだなんかに、何がっ!」

「落ち着け。あれは唯の挑発だ」

洛又に肩を押さえられ、私ははっと我に返った。

「なるほど、お嬢さんは僕の妹がメロメロの王子様にちよつとだけ似ているんだね」

「余計な物を連れて来るに留まらず、リフル様に何をした」

オルクスが憑依した少年、その隣の少女を睨み、闇医者は舌打ちをする。

ゴーグル越しに解けた視覚数術。無機質な笑み。

甘んじて拷問を受けたのは、私の教会兵器の情報を取れるだけ取ろうとしたからなのだろう。ゴーグル越しに見る少女はガラス玉のような透明な瞳に流れるような青い髪。

（うげっ……青髪ですって？）

私の大嫌いな色。私はウマが合わない同僚少女を思い出す。

嫌な気分になった私同様、私の隣の男も渋い顔。どうやらその少女の正体を彼は知っているようだった。その嫌そうな視線に気付いたのか、少女の方はうっとりとした目で闇医者の方を見る。

「どうせ拷問されるなら、兄さんに打たれたかった」

そうして出来た傷を一緒の宝物にするのとうっとり語るその顔に、私はぞぞと身震い。やばい、この女やばい。

教会兵器の特殊弾が効かなかったのは、もう既にこの女の脳が精神がいかれているから。それは弄くられたらしいオルクスが憑依している子と同じ。

あれは人格矯正促して、間借り腐った性根を叩き直し洗いざらい

吐かせる弾だつてのに。矯正不可能なレベルまで完全に逝っちゃつてゐるこの女。

「生憎俺も打つ相手と場所は選びたい派だ。貴様などを打つくらいなら畏れ多くもあの方を対面座位辺りで泣くまで尻を打つ叩いて打ち首にされる方がよほど良い」

「そういうあんたも頭に血い上つてゐるじゃないっ！！ていうかどういう怒り方してんのよ！このセクハラ魔っ！あんた仮にも自分の主をそういう風な目で見るなっ！リフルが可哀相でしょうがっ！！」

「いや待て。冷静になれ。君も理解しているはずだ。あの方の顔が見えない体位に意味など有ろうか？いや断じて無い。というかあの方なの泣き顔にはそそられる物がないか」

「ば、ばばば馬鹿じゃないの！？確かにちよつとだけなら……泣き顔可愛いと思わないであげないでもないけどって何言わせんのよ！」

「何を。思うくらい罪では無からう」

「思うだけならな！口に出す辺りであんたは余裕でアウトなのよ！！」

「最近またリフル様分が足りていない。俺がもう何日あの方に会っていないと思つてゐるのだ君は！」

「知るか呆けっ！！」

冷静なふりしてこいつ怒り狂つていや、とち狂つてやがる。しっかりしろと私は黒衣の医者蹴り飛ばす。そんな私と洛叉のやりとり、死神がくすくすと自分だけが小気味よい笑いをこぼす。

「あはははは、本当ここは面白い人ばかりだなあ。そんな君たち一つ、いや二つばかり教えてあげたいことがあつてね」

「実はその闇医者さんがベタ惚れしてる那由多王子なんだけど、

まだ辛うじて生きてるけど酷い有様なんだ。というのも心が完全に折れてる。彼はこの街が滅んだと思っているからね」

「は？」

オルクスの言葉に私は一瞬奴が何を言っているのかわからなかった。だってこの街はまだ何ともないじゃない。

（あ……）

そうか。それは嘘。それでもこれから嘘じゃなくなる。そのためにこいつらは来た。ここで排除しないと、その嘘は本当になってしまう。リフルが本当に絶望してしまう。

神子様にちゃんと支えろって言われたのに、私は何をやっているの？ しっかりしなきゃ。

ここで殺さなきゃ。

「あのままじゃ、心が死んで身体も死ぬか、それかヴァレスタ兄さんに落ちるのも時間の問題かな。同じ片割れ殺し同士、案外気が合うかもね」

「生憎俺にはあの鳥頭のような属性はない、そんなこと俺が許すか」

「へえ。あの人の決定に逆らうんだ？ 前はさあ、この子のために那由多王子を裏切ったって貴方が」

私が手早く弾を入れ換えている間にも、オルクスのお喋りは続いている。っていうか何なのこの話の流れ。さっきからおかしいとは思ってたけど……

（まさカリフルの奴……この洛又って男まで毒牙に）

何人野郎を魅了すれば気が済むのよあの男は。神子様私もう本当にここ嫌です。なんで年頃の女の子スルーして野郎ばっかに野郎がモテんのよ。

（そ、そりゃあ……無駄に顔だけ良いけどあんなの顔しか取り柄のない男じゃない）

そう言い訳して見るも、思い出すいろんな表情。そのどれもが文句の付けようがない。確かにあんな奴の傍にいたら私程度の後天性混血……霞んで消えてしまう。

（わ、私は絶対魅了なんかされて堪るもんですかっ！）

ぶんぶんと頭を振って雑念を振り払う。なんか苛ついたからあの馬鹿取り戻したら問答無用で一発あの綺麗な顔をぶっ叩いてやる。

私が軽く舌打ちしていると、同じような悪意を傍に感じる。見回せばあの青髪の少女が元の顔は悪くないのに今は般若のような形相だ。

先程洛叉^{ラクシャ}を兄と呼んでいたのを見るに、神子様の情報にあったこの男の異母妹だろうか？ 確か名前は埃沙^{アイシャ}だったか……？

洛叉は元タロック貴族の家の嫡男。その父親の妾の子がこの少女。その二人の関係がここまで歪んだ原因は何処にあるのか。ちよっと聞いて嚙った程度の私には何も解らない。唯この少女が酷く歪んでいることが解るだけ。

「兄さんはまだあんな男に誑かされてるの？」

「誑かされてなどいない。唆されているだけだ」

「あんな奴兄さんのこと全然愛していない！」

「今は確かにそうかもしれない。しかしそれは俺があの人を嫌

う理由にはならない」

「私の方がずっとずっと兄さんのことを思っている！だから兄さんはもっと私を見るべきよ！」

「見るべき相手は俺が決める。貴様に指図される道理など無い。それに何処を見てあの人が俺を思っていないと断言できるのだろうか」

「は？」

「あはははは、面白い事を言うんだねこの闇医者さんは」

唐突な闇医者者の言葉に私の目が点になる。少年に憑依しているオルクスは腹を抱えて笑っている。妹だけじゃない。兄の方も大概だ。

「俺は確証のないことなど口にはしない。かつての那由多様は間違いなく俺を慕っていた」

妙に自信ありげにこの男は。過去の男だと言わんばかりのその余裕はどこから来るのか。っていうか本人がいらないところでそんな惚気ても何の意味もないじゃないのよ。

「あの方が一度死ぬより以前、あの方の世界の大半は俺で占められていたようなものだからな。今思うと何故写真に収めておかなかったのか手を出さなかったのが悔やまれるほど愛らしかったぞ当時の那由多様は。こう、散々毒を盛られていた所為で発達が遅れているのか舌っ足らずでな……身体も弱くていらっしやいながらそれでも俺の後ろをとてとてと歩いてくるのが実に堪らん。当時の俺に今の属性が開花していなかったことが悔やまれる」

「いや、あのね……誰もそんな思い出話のリクエストはしてないわよ？」

「う、うあ……あああああああああああああ……！！！」

それ以上私にそんなものっ！聞かせるなっ！！」

盲愛する兄が別の男との思い出を惚気始めた事にとうとう耐えきれなくなったのか、彼女の感情が暴走。部屋が熱気に包まれる。その熱気は少女が手にした斧から発する。

何時の間に得物を出したのかと思ったが、先程の少女の悲鳴を媒体に、オルクスが音声数術で此方に転送した物か。

（火の気……あの子、クラブね）

元素を操る以上コートカードではないだろう。それでも混血だから才がある。これまで攻撃数術を使えなかったと聞いていた少女が攻撃数術までマスター。

私は水のカードだから相性が悪い。それにゴーグル越しに見た幸福値……私と同程度。そこに属性が加わると、正攻法じゃ勝ち目が薄い。

（こんなところで……もうあれを使わないといけないなんて）

おまけに目の前にはオルクスもいる。しかも本体じゃない。だが出し惜しみなんかしていたら、あいつが守りたい場所があったという間に焼け野原。そんなのは、駄目だ。今、やらなきゃ……

ここはシャトランジアが保護しきれなかった相手を受け入れている場所。言うなれば本国が受け入れ私が守ったかもしれない相手がわんさかいるのだ。だから他人事じゃない。壊させて堪るか。

舌打ちをして、銃を構える私の前に……すっと出るは漆黒を宿した真純血のタロック男。闇医者風情が何を勝手な真似を！

「危ない！下がりなさい！！」

「生憎俺は年下に庇われる趣味はない」

タロック人は女は男が守るものだとかいう固定概念があるのかしら。そんなの私に関係ない。私は、私が教会兵器。もう人間、女も捨てている。

「いいからっ！」

退けと睨むが医者には聞かない。仕方ないのでその脇から少女を狙おうと腕を振り上げ……手の妙な軽さに驚いた。

「怪我人を増やしては医者が増える、面倒事は避けたいものだ」

「え？」

私は引き金を引こうとして、手に銃がないことに気がついた。辺りを見回すが見つからない。落としたわけでもない。私が狼狽える内にも少女の凶器が此方に迫る。

もう駄目だ。そう思って思わず目を瞑り……しんと静まりかえった室内。窓など開いていないのに、何故か風を感じてそっと私は目を開ける。

「あ、あんた……」

素早い展開、そして正確にして膨大な式。それはあまりに見事な数術だ。部屋中に展開したその数式は数の鎖。蜘蛛の巣のように張り巡らされたその数字の網に少女は囚われ空中に縛り付けられている。

男は何ということはないというように、その高度な数式を紡いでいた。

「信じられない、純血が……ここまで」

それは私の心の声そのもの。オルクスさえ息を吞んでそれに見惚れる。いや、それだけじゃない。動けない。動けないのだ。一步でも動けば自分もその数式に絡め取られてしまうような、そんな得体の知れない恐ろしさがそこにはある。

教会のそれとも違う。おそらく独学。この男の創作数式。だからその事象も解除もどんなものか誰にもわからない。

「俺も医者だ。埃沙、お前が壊れたのが俺の所為ならば……せめて俺が治してやろうと思ったこともあった」

「……っ、兄さ……」

「俺は那由多様に出会い、俺もまた人に過ぎないことを知った」

自惚れていたのだと男は言う。恵まれすぎた才能に傲り昂ぶって、自分は人間よりも優れた存在なのだ当たり前のように信じていた。それが誤りだと教えたのがリフルなのだと。

「あの方は、誰よりも美しくありながら、それでも人と同じようになりたがった。……人ではなくなったリフル様の悲しみに触れ俺は気付いた。人の枠から外れることはそう言うことなのだと」

洛叉の言葉に何故か私は目が熱い。込み上げてくる何かがある。それはあいつの笑う顔。泣きながらそれでも笑っていた。いつも申し訳なさそうに、あいつは私を見つめていた。

「俺があの方を思うのは、俺にあの方が救えなかったからだ。あの方が処刑などされあんな身体になったのは俺の責任だ。故に俺は生涯賭けてあの方の治療を行う。そしてこれ以上あの方が不幸になることはあってはならない」

誰よりも救いたくて、救えなかった患者。不治の病でも何でもない。毒が盛られているんだとどうして教えてやれなかったのか。親の愛に縋って、そんな言葉を信じない……そんな相手をそれに替わるような思いでどうして包んでやれなかったのか。無理矢理でも、薬を盛って気絶させてでも連れ出し逃げることは出来なかったのか。悔やんでも悔やみきれないのだと男は苦悩の表情。

常に正しく正確な計算で生きてきた。だから完璧な計画だと思った。そこに人の心を勘定に入れていなかった。それが間違い。人は彼より愚かで、頑固で意思が固く……計算上どうでも良いようなことに固執する。そこまで計算に盛り込めなかったのが最大の誤算。

「アスカという男を覚えているか？半年前にお前も会っているはずだ」

「知らないわ」

兄さん以外の男になんて余程のことがないと覚えていないわと言わんばかり……心底知らんという表情。この少女がリフルを覚えているのは余程憎くあったからなのだろう。けれど洛叉は妹の記憶力の低さを嘲笑うような笑みを向けるだけで、特に教えてやるつもりもないらしい。

「あの鳥頭はお前のように多少いかれてはいる上、俺に劣るところばかりの屑だ」

凄い自信だ。うん、これはアスカと仲悪いはずだわ。ここまで言われて嫌わない奴がいたら見てみたい。

「だが、俺はあの鳥頭に一つだけ教わったことがある。あの男が唯一俺に勝っているものそれは……肉親への情だ」

多少、いやかなり大分行き過ぎている感が否めないのは事実とはいえ、アスカが兄として……リフルを愛しているのは確かだ。それを本人に伝えないから、リフルの方が何度か参ってしまったりはしているが。彼らの側に来ても間もない私でも、彼が弟兼主様を溺愛しているのは知っている。

それを傍で見て、この洛叉という男は何か思うところがあつただ。自分に懐いた人を奪われる苛立ち怒り以外にも、気付かせられることがあつただ。

「埃沙。お前を壊したのが知を求めた研究者としての俺なら、お前を救うことが出来るのは、奴のように家族を思う情なのだと考えた」

「俺はお前の兄だ。だからお前を伴侶としては愛せない」

「そんなのおかしい。矛盾してるわ！妹が駄目なら、兄さんがあの人を好きなのだっておかしいもの！」

この闇医者がリフルに惚れることは、普通じゃない。それがこの男の中で肯定されるなら、妹である埃沙の想いも肯定せざるを得ないはず。どちらも道ならぬ思いならば。

「ああ、そうだな。俺の嗜好が吐き気を催す王道ぶった普通という概念から多少ずれているのは確かだ」

「それなら、私を愛してよ！兄さんなら出来る！兄さんならきつと……！だって父さんと母さんが想い合ったから私が居る！兄さんは父さんそっくり！私は母さんそっくり！愛せないはずが無いじゃない！」

それはとても悲しい理論だ。少女が縋れる愛はそれしかないのだ。

敵とはいえ、私の心にも哀れみが生じる。

親子の顔が似て、親子の嗜好も似るのなら、愛し合った両親から生まれる二人は相思相愛に成り得る。これはそういう話。

ああ、普通に考えればそんなことはあり得ない。でも本当にあり得ないの？少女の言うことは的外れとも思えないのだ。事実、世には母に似た女を求める男が居る。その母にそっくりの姉や妹が居て、何も思わないという確証が何処にある？

唯、そんな縋るような哀れな理論。この男には響いていない。男は別の生き物を見るように少女を見上げていた。

「その理論は根本から誤りだ、埃沙」

眼鏡を掛けた男の、その硝子越しの目のなんと冷たいことか。先程まで僅かに感じた声の温かみも消えている。誤った理論を叩きつづ、正しき者の迫害の目だ。

「あの男はお前の母を愛することなどなかった。あれは俺に唆されて、知的好奇心に負けお前の母を娶った。混血という生き物、そのサンプルを得んがためお前達は作られた」

「嘘っ……そんなの、そんなの嘘だわ！」

少女は泣き叫ぶ。認めてなるかと、彼を睨んで。

「いい加減にしなさいよ！あんたそれでもこの子の兄貴なの！？」

味方はあっちの男。解ってる。解ってるけど見ていられなかった。私も混血だし、私も女だったから。

「……貴女、どうして……？」

私に庇われたことに、一瞬驚いたような硝子目の少女。傍で見ればその目はうつすらと水色を纏う水面の色。触れれば壊れそうな彼女の心に似ていると思った。

だけど少女の言葉に私が何か言おうとした時に、彼女は思い出したように先に、泣きながら言葉をこぼす。

「兄さんを、悪く……言わないでよ」

この期に及んで、まだあんな男を庇うほど愛しているというのか。それこそどうしてなのか解らないけど、本当にこの子には他に何も無いのだと知る。

(……アスカより重傷じゃない)

それでも。どうしてと聞き返す彼女に返す言葉がない。切っ掛けとか理由とかそんなものはもうわからなくなる、どうでも良くなるその位この目の前の男に執着している。

法律だから？ いや、それはこのセネトレアではあまり関係ない。金さえ積みめば偽りの戸籍を用意できるから。タロックだって王族貴族の連中は血を守るためと未だに近親婚が盛んだし。必ずしもこの少女の想いが間違っていると言い切れるのだろうか？

この医者が彼女を拒むのは、倫理から？ それとも医学的観念から？ いやそのどちらでもないような気がする。

そう、悲しいことだけど……愛を語るこの少女を、本当にゴミを見るようにこの男は見ているのだ。そういう風には愛したことなどないし、これからもそんなことはあり得ないとその冷たい漆黒が語る。

その目は、自分勝手な慕情を美しいと感じていない目だ。自身の想い、欲に振り回されるような心に意味などはなく……誰かを思いそのために回る心こそ美しいと、遠くをその目は見つめている。リ

フルが自分一人のためだけになんて絶対に振り向かないからこそ、この男はリフルに魅せられている。

そりゃあ確かにこの子は自分勝手かも知れない。それでも普通はそうだ。誰かを思うって事は余裕がない。なくなること。

おかしいのはリフルの方。あいつは極力誰も好きになろうとしなから、だから多くを思えるだけよ。この男を誰より強く想っている。それが自らだと名乗るこの少女は、間違っではないのだ。この男のためにではないけれど、思いの強さだけなら本物だ。

それでも世界は残酷だ。強い想いを捧げたから、必ず報われるとは限らない。この男にはそういう気持ちがないのだ。あいつとは違う。

リフルは、あの馬鹿は……毒人間だから、どんなに想いを寄せられてもそれに応えることは出来ない。それでも何か出来ないか、報いることは出来ないか……あいつは思い悩んでいたわ。トーラのこともあいつはあいつなりに……大切にしていたんじゃないの？有能すぎる彼女を傍に、自分の無力さを知りながら、守られてばかりの自分をあいつは悔いていた。

私がまだ彼女に会ったことが無い頃に、私とアスカに力を貸してくれと切羽詰まった顔で頼みに来た。自分の力だけではどうしようもないと、素直に認めて。男のプライドとかかなぐり捨てて。

そんなあいつだから……アスカだってあんなに溺愛してるのよ。

あいつの代わりに手を汚したいと思うくらいに、あいつのことを大切に想ってる。

「馬っ鹿じゃないの？」

そう……それはこの男だって。

「あんたは、十分リフルに報いて貰ってる。あんたは幸せなんだわ、それを享受している！なのはどうしてこの子にその分報いてや

ろうと思わないの!?! 幸せにしてやろうと思わないの!?!」

「男としては思わんな」

「最っつっつ低!」

「だから、兄さんを……兄さんを悪く言わないでっ!!」

叫ぶ少女の声に紛れて闇医者が小さく言葉をこぼす。それは一筋の光明のよう……少女の瞳に差し込んだ。

「だが、……兄としてなら別だ」

「え……?」

「お前がもう二度とあの方に危害を加えないと約束し……そしてお前が望むのならば、兄妹としてならお前を愛してみようと思う。お前を守り何者にも傷付けさせない。傍にもいてやる。あの鳥頭を見習い……きょうだいという関係を俺なりに見つめ直していこうと思う」

それならどうだと闇医者は言う。少女の傍まで歩み寄り、少女が一言頷けば、その縛めから解放するのだろうか?

「嫌……」

「埃沙……」

「そんなの、嫌!」

嫌々と首を振る彼女は、聞き分けのない子供のようだ。この男を失ったら他に何もない。縫う愛はそれだけなのだと思死になってそれを拒んだ。

「だって兄さんは、あいつが好きのままなんでしょう!?! それを傍で見ているなんて、見ているだけだなんて……」

「お前の世界は狭い。しかし世界は広い。お前はお前が俺しか愛

せない、俺にしか愛されないと思い込んでいる。それは誤りだ。世には必ずお前を愛する男或いは女が居る」

一見良いこと言ってる風で実は台無し。無駄にここで可能性を狭めない辺り、本当に奔放な男だわ。この男らしいと言えはそうなのだろうけど。

「その時お前がどうするかは、お前自身の判断だ。俺は口出しはしない」

決して振り向かない。それでも思い続けること自体は構わない。リフルに危害を加えないなら。そう言う条件、譲歩を申し出ている。

「……嫌」

ああ、この兄妹は似ている。それでも決定的な違いがある。

洛又はあいつが欲しくても、無理矢理にそんなことは言わない。軽口のような口だけだ。死を見つめるあいつには、何をしてもその心は誰のものにもならないことをもう悟っているのだ。だから安堵しているの？ 少なくとも誰かの物になることはないんだって。だから彼の中で自分の地位を確立し、そのキープだけで満足できる。他に多くは望まない。

それでもこの少女は違う。欲しいものは欲しいと言い手を伸ばす。その身体を縛める、数術を関節を外して破ったのか。あらぬ方向を向く両手……それを兄の方へと彼女は伸ばす。

これだけ願って手に入らないのならと……その手は数術を描く。発動は本当に早かった。彼女はその身体を燃やした。燃やして数式を塗り替える。あの見事な数式が全て塗り替えられていき、少女の縛めは解け……数字全てが炎に変わる。

彼女の？ 的にこんな大きな数術、使えるはずがない。多分これは

一度きり。かなりの幸福値を賭けている。いうなれば命を賭けた数術なのだ。

この子はきつとこの部屋ごと、洛叉もろとも燃やして殺して自分の物にする。永遠を手に入れるつもりなのだ。

「馬鹿なことは止めなさい！こんなの間違ってるわ！」

彼女の妄執は私が忌み嫌った女のそれと重なって、広がる炎は私の罪を思い起こさせた。助けなきや。そう思うのに、足が竦んで動けない。水の数術弾を撃とうにも……私の二丁拳銃。どちらも今はない。

ラハイアの形見の白銀の銃……これは空。急いで私が弾を詰め始めた時……コツコツと近づいて、私を通り過ぎ炎の中に入っていく長身の黒い影。

「……愚かだな」

それはお前が女だからなのか。それともお前がお前だからなのか。それを問うよう男は笑って彼女に片手を突き出した。それは私が探していた教会兵器！十字銃！あの男何時の間に私からスったのよ。呆氣にとられてる内に、洛叉は躊躇いなく、少女の眉間を打ち抜いた。そして素早く数術で風を起こして全ての炎を吹き消した。炎の海に飛び込んだとは思えない、その涼しげな顔が憎らしい。私は駆け寄り少女が事切れていることを知り、思わず味方であるはずの男を睨んだ。睨まずには居られなかった。

「あんた何してんのよ！？この子、あんたの妹だったんじゃないの！？」

「リフル様に害が無い場所で仕留められたのは大きいな。これであの方への危険が減った」

「そういう問題じゃなくてっ……」

「あの方にこういふところを見られずに済んで良かった」

幻滅されるのだけが怖い。嫌われたくないんだと、語る男の顔は人間味に溢れていて、私は先程までの冷たい目をした男とこいつが同一人物なんだと認められるまで暫く掛かった。

「なるほど、良い物を見させて貰ったよ」

オルクスはかがみ込み、倒れた少女の手を検める。手袋の下から現れたのは私と同じ数。

「この子はクラブの？。となればまずは時が来るまで同属性同士しか殺せないと考えるセネットレア女王の解釈は誤り。ついでに原則としてある上位カードが下位カードを殺せないと言うのも誤りだったって事だね」

「どうだかな。俺がこの愚妹より強いカードだったとは思わんのか？」

「思わないね。貴方はスペードの？。勝てるはずがないんだルール上なら。ああ、ちなみにね、さっき担がれたときにさ、触って手袋の下を透視させて貰ったんだ」

オルクスはにっと笑って考え込む素振りを見せる。

「まだまだこの神の審判には僕らの解らないことが隠されてるって事だね。ありがとう、有意義な時間だったよ」

「……………あんた、この子の仲間じゃないの？」

「その子は兄さんの駒ってだけで別に、ねえ？ああでも勿体ないから貰っていいのかな。この子の目もなかなか良い最期を刻んだね。良い触媒になりそうだ」

「触媒……？」

点と点が結びつかない私の目の前で、オルクスは少女の両目を挟む。そしてその眼球を愛おしそうに光に透かして微笑んだ。

「っ……！？」

そうだ。知ってはいた。先天性混血が数術の才能に恵まれているのは、生まれ持った触媒があるから。先天性混血児の数術器官、それは宝石のように綺麗な目に集中している。

死んだとはいえ殺したとはいえ妹があんな目に遭ったのに、洛叉はまだ涼しげな顔。いや、僅かに怒っている？ 違う……何か今の光景から察した危機感。それに僅かに動揺している。

「お札に幾つか僕も貴方たちに教えてあげよう。まず山道の方に行ってみると良い。そこに一つ、那由多様への手がかりがある。そしてもう一つ……火が消えたはずなのに、この部屋熱いと思わない？」

「まさかっ！？」

言われて私は慌てて室外へ。オルクスは防音数術を弄っていた。内の音が外には聞こえない。それを外の音が聞こえないにいつの間にか変えていた。黙ってみている振りをして、そんなことなどなかったのだ。

扉の外は人々の悲鳴。逃げまどう人々の叫び声。

「そんな……」

「ああ、安心して。そんな逃げ遅れる事なんてないと思うよ。僕らとしても商品はなるべく失いたくないからね。退路はちゃんと確保しつつ……そう、誘導してあげている」

「誘導、ですって……？」

「そう、今日は商人連中にとっては凄い稼ぎ時ってわけ。いろんな所にチークしてあげたからどんどん増えるよ？ 生きた商品が欲しい人間、パーツが欲しい人間、そして殺したいだけの人間。その人間同士も殺し合う。言うなればこの街はセネトレアって国の派閥争いを賭けた戦場になるって事だよ」

良い眺めだろう？ そう笑って、死神はその子の身体から離れて消えた。

「……くそっ！！」

いつまたこの子を操るか解らない。この子自身は悪くない。解ってる。それでも……生かしておけば、また余計な煽動をされる。そんな混乱、これ以上……

「返さない、それ」

私は奪うように洛叉の手から銃を取り返し……気絶したままの少年が、目覚めないよう引き金を引く。

死の感触は手には残らない。それでも、やるせない気持ちは残った。だから先程の洛叉の気持ちが解ってしまった。

（ここに、リフルが居なくて良かった）

いたらあいつはどんな目で私を見たんだろう？ 昨日のアスカを見るように、脅えた目で私から逃げるのだろうか？

（何よ、今更……）

これまでだってこんな殺しはあったじゃない。例え罪がない人間でも存在が悪なら、それが大勢の人間の不幸を呼ぶのなら……正義の鉄槌を振り下ろせ。何度もしてきたことじゃない。仕事を始めたばかりの頃、ミスも多かった。あの頃は私の弱さと甘さが本当にやるせない殺しを招いた。そう、だからこんなの……

（よくあることよ）

煙が目に染みるのは、燃え広がった炎の所為に違いない。

「……他にも忍び込んだカードがいるのは間違いない。先を急ぐぞ」

「解ってるわよ」

優しい言葉なんて別に要らない。冷静に次にやることを促してくれた、闇医者……それが私にとっての優しさだった。

＊

ロセッタちゃんが会議室に戻ってから、叩いてみても扉は開かない。

機嫌が悪かったのかな。それともアルムが私がかいけいないことをしてしまった？

ちょっと沈んだ気持ちでアルムはそこから離れた。

「フォース君と、仲直りして貰うと思ったのに……」

二人は幼なじみでお友達なんだから、喧嘩なんか良くないよ。そうフォース君に言ったのに、彼は悲しそうな目で曖昧な笑みを浮かべるだけだった。

離れている内にもうどうしようもない、取り返しの付かないことが起きてしまったんだよと彼は私に言っているようだった。

「アルムちゃん」

呼ばれて振り返れば、綺麗な青い眼と長い金髪をした可愛い男の子がいる。この子はエリマス……愛称だとエリス。だから私はエリス君って呼んでいる。洛又先生に診て貰っている患者さん。病気だっただけで最近元氣になってきているみたいで良かったと思う。

「あ、エリス君！部屋から出てきて大丈夫？」

「うん、平気。今は先生がいないから怒られないよ」

見つかる前にまた戻れば良いんだと、彼は悪戯っぽく笑う。最初に見たときはもっと気の弱そうな子だと思ったけど、男の子って強いなあ。

私はすぐには変わらない。今だって変わろうと藻掻いている最中。それなのに彼はこんなにも早く明るく元氣になっている。その姿を私は羨ましいと思いつめる。

何も言わずに私が見ていることに彼は気付いて、いきなり顔を真っ赤にして視線を逸らす。私は馬鹿だけど、それに気付かないレベルは脱してみたい。何となくエリス君は私のことを気にしてくれているんだって、それは解るよ。

（だけどどうしてアルムなんだろう？）

私は何も出来ないし、良いところなんて一つもないし。みんなに迷惑かけてばかりだし。エルムちゃんにも死んで欲しいって思われるくらい嫌われてるのに。そんな私なんかをどうしてエリス君は好きになってくれたんだろう？ 好きでいてくれるんだろう？

だからますますわからなくなってアルムは……じゃなくて、私はエリス君をじっと見てしまっただよ。

（嫌われるようなこと、すれば……エリス君もアルムを嫌いになっ
てくれるかな）

だってそんな価値私にないから。

トーラちゃんから聞いて、アルムは数術使いでおんせー数術使いで、声で人の心を操る悪い子なんだって教えられた。エルムちゃんが大嫌いなアルムの傍にいてくれたのも、全部その所為。離れていったのはそれに気付いちやっただから、だから魔法が解けたんだ。

ああ言うのはもう嫌で。もし今も私、そう言うことをしちやって
いるなら早く止めないと。数術は今コントロールしてる。出来てる
はず。それでももしもそうなっているなら……あの時みたいに何か
嫌われるようなことをしないと。

「エリスちゃん」

「え、エリスちゃん！？」

これまで君付けだったのにいきなりちゃん付け。嫌だよね。だっ
て男の子なんだから。私がエルムちゃんを傷付けていたのも、多分
そういう些細なことから始まっていたんだと思うの。

（ごめんねエリス君）

別に嫌いだからとかそういうことじゃないんだよ。それでも私は
そんな価値がないんだよ。死んじゃえばいい人間なんだから。

「ね！せっかくお部屋の外に出たんだから、アルムの部屋で遊ば
うよ！」

私は彼の手を引いて、鼻歌交じりに廊下を歩く。誤魔化すための鼻歌なのに、エリス君は可愛くふわっと笑うんだ。だから思わずぎゅっと抱き締めたくなった。

空いた片手がわきわきしている私を見て、エルス君は首を傾げる。はあ……本当に可愛い。お人形さんみたい。本当に男の子なのかなエリス君。

「え。何？」

「な、ななな何でもないよ！」

そんなにこっちを見られると、考えていたこと全部ばれてしまいそう。私はさささと目を逸らす。

嫌われるための嫌がらせ。エルムちゃんが嫌がったこと。それを私は歩きながら考えていたけれど、今ので決まった。あれしかない。

私は辿り着いた私の部屋のドアを、パタンと閉めて鍵を掛ける。そして彼を鏡の前に連れて行く。何をされるのかわからないのか、目をパチパチさせているエリス君。

「ねえアルムちゃん、何して遊ぶの？」

「あのね、あのね！これ！」

私がクローゼットと衣装箆笥から取り出した、着替え一式に彼はちよっと口を開けて驚いている。

「エリス君可愛いから、可愛い格好したらもっと可愛いよ！」

「アルムちゃんは、可愛いのが好きなの？」

「うん！大好き！！」

あの時のエルムちゃんは本気で怒った。一ヶ月くらい口を利いて

くれなかった。「僕は姉さんの玩具じゃない！」と怒鳴られた。だから本当はここで嫌がる予定だったんだけど、エリス君はエルムちゃんとは違う顔を私に見せた。

「それじゃあ……僕やってみる」

照れた顔で視線を逸らすエリス君に、驚いたのは私。

「あ、ご、ごめんね！アルムあっち向いてるからっ！」

着替えを始めた彼の方を見ていることが出来なくて、背中を向けて……後ろで聞こえる衣擦れになんだか鼓動がどくどくしている。どうして私はこんなに緊張して居るんだろう。

「アルムちゃん、これでいいの？」

その言葉に振り返る。駄目。もう駄目だった。

「きゃああああああああああああああああ！可愛い可愛い可愛い可愛いっ！エリスちゃんすごく可愛いっ！お嫁さんにしたいくらい可愛いっ！！」

あんまりにも可愛いからもう思わず抱き付いてしまった。髪を解くと本当に女の子みたい。こんな可愛い女の子見たことがないってくらい可愛い。うっとり彼を見ていて、はっと我に返った。可愛いのは男の子には禁止ワードだった。エルムちゃんとかフォース君にそういうことを言うと怒られた気がする。

「ごめんねエリス君……」

「え？何が？」

「エリス君は男の子だから、可愛いとか言われるの……嫌、でしょう？だから、ごめんなさい！」

「別に気にしてないよ。僕の父様なんか毎日言うんだもの」

「エリス君のお父さん？」

「うん、だからもう慣れた。父様だって悪気があって言っているんじゃないんだ。だから別にいいんだ」

私の言葉も悪気は感じられないと彼は優しく笑って許してくれる。

「そ、それに……僕は僕が恥ずかしいのと、アルムちゃんが喜んで笑ってくれるのなら、恥ずかしいの我慢する。いつも可愛い格好しててもいいくらい」

優しすぎるその言葉に、私は視界が揺らいでいく。

「エリス君……」

「え、ああああアルムちゃん！？」

泣き出した私に、何かいけないことを言ってしまったのかと戸惑うエリス君に、涙を拭いながら違うんだよって首を振る。

「アルムは……凄い悪い子なんだよ。それなのにどうしてエリス君は優しいの？アルムはそういう価値がないんだよ？」

「そんなこと無いよ！どうしてそんなこと言うの？アルムちゃんが悪いっていうならこの国には、この世界にはもっと悪い奴がいっぱい居るよ！本当に悪い奴は自分が悪いとも思わない奴のことだよ！」

「そう言う事じゃないの……」

私より悪い人がいるから。それで私の罪は無くならない。エルム

ちゃんを沢山傷付けたっていうのは無かったことにはならないもの。

「いっぱい謝ろうと思ったの。だけど、その子はアルムの顔なんか二度と見たくない。死んじゃえばいいって思ってる」

それしか償いがないのなら、そうするしかないんだと思う。けど迷うのは、……まだ生まれていない子の鼓動のこと。

幸せって何だろう。わからない。生まれること？ 生きていること？ 死んでしまうこと？ 生まれないこと？

エリス君は私もこの子も生きていればきっと良いことがある。幸せになれると言うけれど……私はまだそれを信じられないんだ。

だってこれまで生きて来て、私はいっぱい人に嫌な思いをさせて来て。それを知ってからは私も嫌な思いを私に対して思うようになった。生きるのってそういうこと。生まれなければそんなこともなかった。エルムちゃんを傷付けたりしないで、馬鹿な私を庇ってデイジットが倒れることもなくて。みんな幸せで居られたはずだよ。

「それなら会わなきゃいい」

「え？」

「君に会わないのがその人の幸せなら、無理に会うことはない。その人に謝ることが出来ないなら、その分アルムちゃんは他の人を許してあげなよ。関係ある人もない人も、いっぱい許してあげれば良いんだ」

「どういうこと……？」

「世の中には君みたいに、謝れなくて悩んで苦しんでる人がいっぱい居るよ。取り返しの付かないことをしたって、謝る相手が居ない人だっているんだと思う。そういう人は誰かに許されるのを待っている。だから君が許してあげればいい」

「でも……」

「君がいっぱい人を許したなら、許された人は他の誰かを許せる

ようになる。それが巡り巡って、いつか君が謝れなかった人を許してくれる誰かにその子は出会える。その時その子は君を許せるようになるよ。それじゃ……君の望む償いって事にはならないかな」

まるで夢、夢のような話。彼の言葉はキラキラ輝いて、星のように綺麗。

私みたいな汚くて汚れた子には、考えることも出来ない夢。

そんなこと本当にあるの？ わからない。それでもそれがあんまりにも綺麗だから、私はその言葉に引き寄せられる。

だけど私の傍にいたらこんなに綺麗な彼も薄汚れてしまうんじゃないか。そんな不安が胸に芽生える。

そんな私の気持ちに気付いたのか、エリス君はちょっと考え込んだ。さっきまで自分の髪を結っていた綺麗なリボン。それを手に私を鏡の前へと彼は招いた。

「ちょっと、ごめんね」

そうして彼は私の髪を解いて、櫛でとかして、別の髪型へと変えていく。

それはさっきまでエリス君がやっていた髪型。長い髪をクビの後ろで一つに結ったそれ。

「アルム君、格好いい」

「え？」

そう言って彼は笑う。さっき私がしたことのお返しなんだって気がついた。

「僕は今、嫌なことをしました。悪いことをしました」

「別に私嫌じゃないよ」

「でも僕は悪い子だよ。女の子が格好いいなんて言われても嬉しくないよね？」

「うーん……でもちよっと、嬉しい」

「それじゃあ話が成り立たないから、ちよっと怒って」

「もう！エリス君ったら！」

「あはは、そうそう！」

良くできましたと彼は言わんばかりの表情だ。

「それじゃあ僕はこれからアルムちゃんに謝るよ。ごめんなさい……許してくれる？」

「うん、いいよ」

で、これはどういう遊びなのと尋ねると、遊びじゃないよと笑われる。

「悪いことをした僕は今、アルムちゃんに許された。許された分、僕はちよっとハッピーな気持ちになった。その幸せを誰かに分けてあげたい気持ちになった。そう言う余裕が出来た」

「幸せ……」

こんな小さな事で、幸せ？私は誰かを救えるの？傷付けてばかりだった私が。信じられない。それでも信じてと、目の前の彼は言っている。

「だから僕はこれから誰かを許すって君に約束する。……ね？これが続いていけばさっきの話もきつと嘘じゃない。嘘じゃなくなる」

何時か必ずそれを本当にしてみせると私より小さな背丈の男の子。それが胸を張って宣言するのだ。僕は誰より立派な公爵になるよと。

この国の仕組みを変えていくよと。

「だからアルムちゃんは何時か必ず許される。だから生きていて
良いんだよ」

「エリス君……」

ありがとう。その言葉が胸につかえてどうしてか吐き出せない。
また泣いてしまいうで、そんな顔を見せたくなくて……また私は
衝動的に彼に思い切り抱き付いた。

その瞬間だ、ぐらりと建物が大きく揺れた。

「……じ、地震なの!？」

「う、うわあっ! ゆ、揺れるっ!!」

地震の耐性がないのかエリス君がびくびく脅えている。さっきま
で格好良かったのに、また可愛いに戻っちゃっている。そんな変化
にちょっと私の心が軽くなる。

「エリス君っ! こっち!」

ベッドの下に二人で隠れようと彼を先に押し込んだ後……揺れが
突然収まった。もう出て良いのかまた来るからわからないから隠れ
ているべきか、それとも避難するべきなのか。

判断に迷い、鍵を外して廊下を見た。他の人達に正しい判断を仰
ごうと思った。

「ひっ!」

だけど私の目に入ってきたのは、丁度目の前で人が倒れる場面。
後はピクリとも動かない。死んで、しまったのだ。

急いで私は扉を閉めて、鍵を閉めようとした。だけど扉と床の隙間から赤い水が流れ込んでくる。

それが怖くて、扉から離れてしまった。鍵はまだ掛けていない。扉の外の人にもそれが伝わったんだろう。ガチャリとドアノブの音。扉から入ってきたのは、私より随分背が高くなった……赤い髪に冷たい桜色の瞳をした少年だった。

「う、嘘！？え、エルムちゃん！？」

私は誰よりも会いたくて、彼は誰よりも私に会いたくなくて。……そんなエルムちゃんがどうして、どうしてこの街、迷い鳥にいるの？

「……まだ生きてたんだ、姉さん」

随分と厚い面の皮だねと、私を本当に冷たい軽蔑の目で彼は眺める。

「え、エルムちゃんも……ここに逃げてきたの？」

「そんなはずないだろ。馬鹿だね姉さんは」

そうだ。それなら人を殺したりなんかしない。

「この主要メンバーが瓦解したって聞いたからね。忍び込んでみたら本当簡単。逃げてきた混血の振りしたら、簡単に中に入れてくれたよ」

そうして内側から、隙を窺っていたのだ。私の弟は、本当にこの場所を壊しに来たのだ。相容れない存在になってしまったこと、それがどうしようもない事実として横たわるのに……私はまだ信じら

れない。信じられずにいる。

《エルム、そいつも殺す?》

物騒な言葉に顔を上げれば、この間見たときよりもエルムちゃんに取り憑いている精霊が大きくなっている。子供のような姿をしていたそれが、等身大の大人の女性みたいな綺麗で禍々しい姿になっている。また、沢山血を吸ったんだ。

「どうしようかな」

「エルムちゃん……」

迷ってくれている。それは少し私を許してくれたって事?

少し救われたような私の表情を見取って、彼は勘違いするなと私の浅はかさを嘲笑った。

「その腹の奴ら、丸ごとかパーツかは置いといて、高く売れるかもしれないだろ? 金になるならヴァレスタ様も大喜びだ」

「ヴァレスタ……“様”?’

うっとりとの男を湛える弟の姿に、私は言い様のない恐怖感、そして違和感を覚えた。

「どうしちゃったの、エルムちゃん!? あの人! 悪い人だよ! 酷い人だよ!? なのはどうして!?’

「俺のご主人様を馬鹿にするな。今すぐ死にたいのか?’

ギリと強く睨まれた。エルムちゃんは本当に私の言葉に怒っている。

「あいつは確かに最低だし！嫌な男だし！性格悪いし！ドSだしっ！拷問好きだし！嫌味ばかり言うし！僕のことなんかあんまり省みないし！その癖リフルさんに入れ込んでるしっ！取り柄なんか顔くらいしか無いような最低野郎だけど……それでも僕の、俺のたった一人の王なんだ！」

なんでそんなに優しい目で、あの人のことを口にするの？私にあれを吹き込んだのは、あの人なんだよエルムちゃん。

傍にいない人を思い出すような言葉の羅列。そして輪郭を生み出していく。その言葉一つ一つに、確かな親しみと温かみ。宿る想いに私は気付く。エルムちゃんは、あの人が大好きなんだ。本当に取り返しの付かないこと。それを私は今強く感じていた。

ああ、その優しい目が……私に移動した途端またあの鋭い氷の視線へと戻る。本当に貴方は私が嫌いなんだと思い知る。

「僕にとってあの出来事は人生最大の汚点だし、姉さんは死ねばいいと今でも思う」

「エルムちゃん……」

「それでも金になるなら話は別だ。僕みたいな奴でもあの人の役に立てる。金を稼げる道具になれたんだって思えば、僕はその反吐を吐きたくなるような汚点も肯定出来る気がするんだ」

彼はとても嬉しそうにここには居ない人へ見えない尻尾を振る。

手遅れなほど躰けられたわんちゃんみたい。エルムちゃんはべったりあの人に依存している。

私を見る冷たい目。その意味を私は理解する。エルムちゃんは、本当にお父さんになれない。だって私のこともこの子達のこと、もうお金にしか見えていないんだ。

何時も私を守ってくれて、誰より近くにいてくれた。誰よりも優しく、大好きだったあの子がもういない。壊れてしまった。私が、

私が壊してしまった。

「姉さんが死にたくないって言うなら伝手で環境最悪の混血奴隷の専門店に流してあげようか？何処のウマの骨かもわからない薄汚い男共に犯され嬲られ続ければ、あの日の僕の気持ちもわかるだろうね。せっかくだし病死でもするまで可愛がって貰ったら？」

「……っ、ううっ……エルムちゃん……」

「僕がそんなに簡単に姉さんを死なせるとでも思った？」

そんなにすぐ楽にさせるものかと私を嗤う。

「……？」

そして彼は気がついた。床に散らばる男物の服に。それが私の服ではないことくらい気付いただろう。彼はそれを見、私を心底軽蔑するような目で見る。

「随分とお盛んだね。店の紹介するまでもなかったか」

「ち、違うの！これはっ！」

「別にどうでもいいよ。僕には関係ないし」

嫉妬なんてあり得ない。熨斗つけてくれてやるよと言わんばかりの興味なさ。

「どうでもいいけどこのままこの部屋居たら死ぬよ。この階のいろんな所に火付けてきたし早く行かないと火の手が上がって逃げられなくなるかもね」

「え、エルムちゃんは」

「僕を姉さんなんかと一緒にするな。行こう、クレプシドラ」

呪文のようにその精霊を彼が呼べば、数術が発動……瞬時に姿が消えた。それに少しほっとした自分が嫌になる。どうしてそんな風に思ってしまったんだろう。相手は大好き……大好きだったエルムちゃんなのに。

「え、エリス君！大丈夫！？」

私はベッドの下から奮えるエリス君を引き出して、その手を引いて廊下へ向かう。火の手は強くなっている。それにあちこち人が倒れている。嫌な臭い。気分が悪い。

でも私がしっかりしなきゃ。エリス君は病人なんだ。私の方が年上……お姉さんなんだから、しっかりしないと。

「大丈夫、大丈夫だからね」

水の気配は弱い。それでも感じる。地下深く。水の流れは確かにある。

「エリス君は、私が守ってあげるから」

思いを込めて発した言葉。それが私の数術になる。地下から床へと階下の天井を突き破って吹き出した地下水。

それを操り私は周りに水を浮かせる。ふさがれた道を消火しながら火の手を抑え、逃げ遅れた人の誘導。

「急いで！みんな、逃げて！」

この階の、生きている人達は全員なんとか逃れさせられたはず。先に逃げて良かったのに、エリス君も私と同じ最後まで誘導を手伝ってくれた。いや、だから時間内に間に合った。それを私は感謝

するべきなのかも知れない。

「行こう、エリス君！」

彼の手を引いて私は走る。階段を駆け下りる。一階はまだそんなに火は強くない。これなら無事に逃げられる。先を急ぐ集団の背に、ほっと胸をなで下ろす。……そんな暇もなかった。今度は悲鳴。建物の中に逃げ込んでくる人々。

「え！？え？えっ！？」

「落ち着いて、アルムちゃん」

その人達を追いかけてくるのは、こんな所にいるはずがない……あれは商人達。

「僕が話を付けてくる。僕の名前を出せばそんなに悪さは出来ないはず。いざとなったら僕を人質にしてくれて良い」

「だ、駄目だよそんなの！」

慌てる私を余所に、彼は酷く落ち着いた表情。駄目だ。彼はあまりに何も知らない。人の悪意なんてオルクスのもれしか知らないんだ。けどそうじゃないんだよ。伝えようにも一言で上手く言い表せる言葉がない。

「この騒がしさは何事だ！第五公、デイスブルー公爵が嫡男エリ阿斯が前で見苦しい真似は止せ」

「第五公の、跡継ぎ様？」

「エリアス坊ちゃんだって？」

人々を庇うよう、進み出たエリス君の姿に……商人達は悪い笑顔

を浮かべて嗤う。

「な、何がおかしいっ!!」

「坊ちゃんだって? どう見てもお前さんはお嬢ちゃんじゃねえか! ぎやはははは!」

「ぶ、無礼なっ! これは貴様らのような野蛮な者から逃れるための変装に過ぎぬ! カーネフェリーの男児など、貴様らの良い標的だからな! この者達が私を守ろうとしてくれたのだ!」

「だってよ、お前ら! 聞いたか?」

「へーへー、そいつはお利口なこった。お坊ちゃん」

彼の言葉を話半分、それ以下で聞く。この人達は商人じゃない。その手下だ。だからエリス君の話が通じない。

(どうしよう……どうしよう……)

どうしたらいいの。わからない。

「父様が私を取り戻しに来たというのなら大人しく帰ろう。だがこの者達に危害を加えることは私が許さない。彼らは私の病を治してくれた恩人だ!」

「そうは言いますけどね、お坊ちゃん。あんたが第五公のご子息だって証拠が何処にあるんですかい?」

「つーかそもそもお坊ちゃんかどうかも怪しいもんだ」

「確かに私がデイスブルー家の人間だと保証する物はない。だが、私を連れて帰れば父様から多額の金品が与えられるだろう。それでは不服か?」

「そもそも第五公つつたらあれだろ? もう初老差し掛かった爺さん。あの爺さんの子種からこんな絵に描いたような美少年生まれるもんか」

「嘔吐くならもう少し頭を使うんだなお嬢ちゃん！」

「と、父様を馬鹿にするな！」

「いや、しかし本当にここは稼ぎ所だな。いい穴場があったもんだぜ。混血だけじゃなくて上玉の純血までいるとは。一人頭何億って金になるぜ！野蠻な連中が来る前になるべく生きたまま確保しろ！」

「は、放せっ！」

エリス君の腕を掴んで宙に釣り上げた侵入者。私はその男の下へと急ぎ、彼の足を踏みつけ腹に頭突きをかます。

「エリス君を返してっ！」

その声に数術発動。噴き出す地下水。それに驚き手を放す男から、何とかエリス君を取り戻す。

「水から離れろ！」

「え？」

咄嗟にその声に従った。そこに爆音。その後立ち上る綺麗な電気の花火。

水を浴びた男達はその電流をともに食らって、焼き焦げて昏倒。その肉を焼く臭いに生き残った者達も、悲鳴を上げて逃げていく。

「間一髪、だな」

外の木から飛び下りてきたのは黒髪のタロック人の少年。私より二つ年上の男の子。上の階から木を伝って逃げてきたのだろう。

「フォース君っ!!」

「フォースううう!!」

顔見知りのフォースが現れたことで堰を切ったように童心に返るエリス君。頑張って強がってたんだよね。本当に偉い。でも可愛い格好のエリス君に抱き付かれてるフォース君がちょっと羨ましい。

「お前、……変装って発想はナイスだけどそれは逆に目立つだろ」
「フォース君、お顔赤いー」

「赤くねえよ!!」

鼻を嗅っているエリス君。その頭を撫でるフォース君は、ちょっとアスカに似ている。何だか少し頼り甲斐がある。大きく見える。そんな気がするの。

「でもアルムもよくやった。偉いぜ。お前の数術があったから何とかなったようなもんだしな」

そういうフォース君の手には、黒い銃がひとつ握られている。確かロセツタちゃんが持っていたもの。

「良かった! 仲直りしたの?」

「逆だって。いきなり俺の部屋に来たと思えばこれで頭殴って消えやがった。あんたが弱くて頼りないから貸してあげるとかなんとか言って。……ってそんなことよりだよ!」

フォース君は周りの人達に号令を掛け、先頭に立ち道を拓いて退路を示す。

「早く逃げよう! 山を越えて西裏町まで戻るんだ! 向こうには隠れる場所もある。あっちにはトーラの本部のあるんだ。そう簡単に

手出しは出来ないはずだからな。アルム、山道は解るか？」

「ええと……」

「とりあえずルートは何でもいい！山さえ下れば王都を囲む城壁に出会す。そこを伝えていけば西裏町に通じる隠れ通路に出る！余裕がある奴は地下通路からでもいい！兎に角逃げろ！良いから逃げろ！わかったな！」

とりあえず逃げろとフォース君はみんなに伝える。後ろから追いかけてくる人がいるかもしれない。だからフォース君はみんなの最後に立っている。道は解っても案内できないのはそのためなんだ。フォース君と離れるのが少し不安で、それでも走れと言われた私はエリス君の手を引いて必死に走る。そうして山道へと飛び込んで……しばらく。エリス君の息が荒い。

「大丈夫、エリス君!？」

そうだ、彼は病人なのに。無理をさせすぎたんだ。

何処か休めるところはないか。辺りを見回すと……私は不意に涙腺が緩んだ。だって何時もその人は私を助けてくれる声。

「アルム!」

その声に振り返れば、金髪青目のカーネフェル人の少女。私のお姉さんでお母さん代わりのその人は、私が何より頼りにしている人だ。

「デジットっ!!」

逃げてきたんだ。無事だったんだ。良かった。私は彼女に抱き付いた。さっきのフォース君に会った時のエリス君の気持ちがよく分

かった。凄く安心できた。

「あら？その子も連れてきてくれたのね？偉いわよアルム」

そう言ってディジットは私の頭を優しく撫でてくれた。

「エリ阿斯君、大丈夫？悪いけど休んでる暇はないわ。ちょっとごめんね」

「で、ディジット!？」

ここでまさかの……お、お姫様だっこ!？おんぶとかじゃないの？抱えられたエリス君は恥ずかしそうだ。抱えられてることが恥ずかしいとかそれとも……ど、どうせアルムはディジットみたいにおっきなおっぱい無いもん。ごめんなさい。

「こら、ふて腐れてないで行くわよアルム？これが一番守りやすいのよ」

後ろから追いかけるのに、背中に抱えるわけにはいかない。そう言ってディジットが苦笑している。

ディジットは私に、手は繋げないからしっかり掴んでいなさいよと服の裾を掴ませる。私は頷いて、ぎゅっと彼女の裾を掴んだ。

西裏町まで逃げれば……お店がある。あそこまで行けばきつと安心。大丈夫。もう怖いことなんか無い。

そうだ。エリス君も一緒にお店をやってくれればいいのに。可愛いからきつと看板娘っていうのになれるよ。服だってエルムちゃんのが残ってる。……きつと似合うだろうけど、それでも心にぽっかりと空いた穴があることを、私は感じ取っていた。

(エルムちゃん……)

記憶の中の彼の姿と、今日見たそれが全く重ならない。

どうしたら。……私が彼に許される所まで、幸せは巡るのだろうか。それは余りに遠すぎて、もう一度大丈夫だよってエリス君に言っ
て欲しくて。

だけど疲れているエリス君は本当に気分が悪そうで。だから私が
彼に言う。

「大丈夫だよ、エリス君」

アルムは年上だから。アルムがお姉ちゃんなんだから。

「アルムが絶対、守ってあげるから」

2::Primum est non nocere. (後書き)

さくつと埃沙ちゃんがお亡くなり。

洛叉……相手妹なんだからもう少し容赦してあげようよ。

ルールブレイクな数値破りが表に。敵側にも知られちゃったがな。

あと、エリス君無双。地味にアルムとフォースも頑張ってるね。

3.. **A l i t u r v i t i u m v i v i t q u e t e g e n d o .** (前

雰囲気グロ回注意報。

元々僕の中には僕というものがそんなになくて。半ばどうでもいい気持ちで占められていた。何のために生きているのか生まれたのか解らずに、ぼんやりと唯生きている。

本当の父さんも母さんもいつも溜息ばかり漏らしていた。僕の顔を見て、二言目にはこうだ。「いつそお前が女だったら」

そんな事言われても、僕にはどうしようもないことなんだけど……その気持ちも解らなくはない。タロツク人じゃ稀少な赤目。それで容姿も悪くない。僕が女だったならさぞ高く売れただろう。

男子虐殺令には穴がある。跡取りのために男子は一人だけが残される。そのため長男がある家に次男が生まれれば処刑という流れだが、長男が死んでいた場合次男はそのまま生きられる。その次男が死ねばもう一人男を設けることが許される。先に女が生まれた場合も同じ。稀少な女は何人生まれても構わないんだから。

つまり僕の家がそこそ裕福になったのは、僕の上に姉が居たからだ。その姉を売り飛ばした金で、両親は裕福になった。だけど湯水のように金を使えばいずれは底を尽きる。その豪遊を続けるために二人はまた女を望んだ。だけど生まれたのが男の僕だ。それは不覚失望したんだろうけれど、僕だって失望したよ。そんな理由で作られたなんて思うと。

金が底をついてきて、あの人達は始めて身の危険を覚えた。あの人達は余所へ移り住みたかったんだろうな。下手に財があると飢饉の時なんか他の村人からやっかみを買う。施などをしておかないと、いつ家が燃やされるかわかったものじゃない。かといってあまり甘やかしておくとは破産するまで集られる。そんな未来が目に見えて、ここから逃げ出したかったのだろう。そんな物騒なタロツクを捨てて移住するための金が欲しかった。いつそ女装させて高く売り飛ばして、その内に国外へ逃げるか何て算段。そんな馬鹿みたいな

発想、実の親だなんて呆れてしまう。

こんな人達のために生きる意味はない。価値もない。

「おらっ！さっさと歩け！」

「フォース！それにパームも！どうしたんだい？これは一体何事ですか！？」

家を飛び出してすぐ、僕は幼なじみが縛られ連れて行かれるところに出会した。

「グライド……」

僕には会いたくなかったと、フォースが黒い眼を細めた。今にも泣き出しそうだ。

「俺様すげーんだぜ！わけーからフォースより高く売れたんだ！」

幼いパームは奴隷になるって事をよく解っていないようだ。兄貴分のフォースより高い値段が付いたことに胸を張って喜んでいる。駄目だこの子。頭が弱すぎる。

「お別れは済んだか？これから屋敷のお嬢ちゃんを迎えにいかねえといけねーんだからさっさとしろ」

「待って下さい」

「ああ？」

僕は奴隷商を呼び止める。心配だった。フォースがパームがロセツタが。あんな両親なんかより、僕は彼らの方がずっと大切で……

「僕には幾ら値段が付きますか？幾らでも構いません。どんなに

安くても良い。あの家に後から届けてやって下さい」

「いや、安ければ安い方が良い。あの二人には良いお灸になるはずだ。」

「……田舎育ちには勿体ねえ、小綺麗な面してやがる」

「これで女か混血なら高く売れたのに、勿体ねえな。まあ、上手いところ良い変態に売りつけられればそこそこ高く売れるか？」

「だってよ、いいぜ。ついて来な」

縛られる僕に、フォースは顔面蒼白狼狽えて、パームの方は此方の足元を見た値段にげらげら笑っている。

「馬鹿！ 何考えてるんだよグライド！」

「ひやはははは！ なっさけねーグライド！ 俺様より安い」

「僕の方が君たちよりお兄さんだからね。こんなこと、見過ごせないよ」

何も解っていないパームもパームで心配だけど、特にフォースは母さんから捨てられたのだと落ち込んでいる。そんな親友を放っておけるほど、僕は友達甲斐のない男にはなりたくない。

彼が辛い思いをする時は、僕が助ける。一番傍にいてあげたい。彼がそうしてくれたみたいに。彼は僕に助けられたと思っているかも知れないけれど、違うんだ。助けられていたのは何時も僕の方なんだ。

君は僕を女扱いなんかしないし、女だったら良かったなんて言わない。その上で君とは違う僕の目を髪を褒めてくれるんだ。綺麗だねって。僕が大嫌いな僕を少し好きになれたのは、全部君のお陰なんだ。家から追い出されている君の傍へ行ったのは、僕が家に帰りたくなかったから。僕が君に癒されていたんだ。いつも強がって

兄貴風を吹かせている君、そんな君が僕の前だけで泣く。そんな君の前で強がることで僕は、強くなれるような気がしたんだ。

「フォースっ！こっちだ！」

「駄目だ！パームの奴がはぐれた！俺探してくる！」

「ッ……、僕が戻る！君は先に」

「俺の方がお前達より足が速い！俺が行くからお前が逃げろ！」

「フォースっ！」

ロセッタの機転で奴隷商の所から逃げ出すことが出来た僕たちだけれど、行く当てなど何処にもなかった。だから何処へ逃げればいいのか何処まで逃げればいいのかわからず、僕らは道に迷い込む。セネトレア王都ベストバウアー。世界貿易の中心地は数え切れない店、入り組んだ裏路地とまるでゴミその物と言う言葉以外見当たらないような人混み。僕らみたいな子供、すぐに飲み込まれて見えなくなってしまう。僕は急いで彼を追ったけど、もう後の祭り。

僕が踏み入れたのは薄暗い裏通り。潜む息遣いのような、生暖かい風が僕の首筋を撫でる。

「……どうしよう」

「そんな場所に行くのは懸命ではありませんよ」

「え？」

振り向いた先には、多少古めかしいが身なりの整えられた老紳士。暗がりに踏み込んだ僕を明るい表通りへと誘う。

「この街は物騒ですからね。君のような子供が一人で裏町などを歩いては行けません。屋敷はどちらですか？お送りしましょう」

「いえ……あの……僕、奴隷なので」

服装を見ればすぐ解るかと思ったのだけど、その人は僕がそう口にするまで僕の身分に気付かなかった。

「これは失礼。あまりにも君に品があるので何処かの家のご子息かと」

「ぼ、僕がですか？」

「ええ。見目もですが、君の言葉は綺麗なタロック語です。セネトレアの訛りもない。しかしなるほど。本国から連れてこられたわけでしたか」

「……はい」

「それで何かお探しのようでしたが？」

話して良いんだろうか。信用できるんだろうか。この人だってこれから僕を何処かに連れて行ってどうにかするんじゃないのか。言われるがまま馬車に連れ込まれた僕は今更ながら身の危険を感じていた。

そんな僕からの不信の眼差しを受けたその人は、何も言わず僕を自分の屋敷へと招いた。僕らを迎えた老婦人は、僕を見てうつすら涙目。快く僕を迎えてくれる。

何日かぶりのお風呂は、僕の家なんかのそれよりずっと立派で。出された貴族風の服に袖を通すと鏡に映る僕は田舎者のそれとは違うように見えて、何だか妙な気持ちになった。フォークとナイフの使い方が解らない僕に、その人は微笑しながら教えてくれた。

「あの……どうしてここまで親切に、してくださるんですか？」

「……君がね、昔亡くした我々の息子によく似ていたんだよ。どうかね？行く宛が無いのなら……老い耄れの我が儘を一つ聞いてはくれないか？友達捜しにも拠点が必要だろう？」

「若くしてあの子を奪った運命、神とやらを深く呪いましたけど、今ならそれに私も感謝出来ますわ。本当に……奇跡はあるんですね」

老夫婦は目頭を覆って感涙している。だけど僕はわけがわからない。何処にも居場所がない、こんな僕が……こんな僕を。僕がここにいることを、泣くほど喜んでくれる人がいるなんて。その人達は一緒に僕の友達を捜してくれると言った。他人に無関心な人ばかりのこの国で、そんな優しい言葉を掛けられたのは初めてで……それがどんなに嬉しかったか。僕がこの家の名を名乗ることに喜びと、誇りを見出したのは……僕がその二人を大好きになったから。

探しても探してもフォースはパームは見つからない。それが次第に諦め変わる中、僕は新たな居場所をそこに見出していた。それは、そんなある日に起きた。

＊

「大丈夫です。僕が何とかします」

そう微笑んで飛び出した屋敷。時は一刻を争う。今日中に何とかしないと、父さん母さんの私財全てを奪われてしまう。それでも足りなければ最悪奴隷、或いは解体されて殺される。そうなれば僕は、また帰る家を無くしてしまう。

やっとみつけた居場所なんだ。この最低な国の中で、あんな親切な人達に出会えた幸運。今無くしたら、僕は二度と至れない。もう何かを失うのは嫌だ。守れないのは嫌だ。だってそれは僕の帰る場所が無くなるって事なんだ。

（だけど……）

金だ、金だ！金さえあればっ！

僕は町を駆け巡る。金さえ貸して貰えば、後は何とでもなる。

僕はまだ若い。僕の人生はこれからだ。これから幾らだって稼げる。

返せる。ああ、だけど……この国じゃ、人の信頼すら金で買うんだ。表は駄目だ。相手にしてくれない。多少汚れていても金は金。僕は東裏町の高利貸しを片っ端から渡り歩いた。それでもどこも相手をしてくれない。

「おとといきやがれ！傾いた商家なんぞに誰が金を貸すものか！」
「それともだ。返す宛があるのかい？フィルツァーのお坊ちゃん？」

「幾ら顔が良くてもタロークの野郎は金にならねえんだよ。私財で借金が足りないってんなら腎臓でも肝臓でも何でも売って来いよ」
「金もねえ癖に養子だなんだ、こんなガキ拾う偽善者なんて、商人の風上にも置けねえや。損得勘定考えれば赤ん坊でも解るだろ普通はよお」

「それともあの没落貴族の爺はそっちの趣味でもあったのかい？通りで跡取りが生まれねえわけだ」

「そりゃ、嫁が老けてやる気でねえだけじゃねえの？」

「なら、他に女でも作ればいいのによ。ああ、そんな囲える金もねえか！」

「僕への侮辱は結構ですが、父さん達を馬鹿にしないで下さい！あの人達はそんな人じゃありません！」

それまで何とかこの人達に取り入って、金を貸して貰おうと思っていたけど、聞くに堪えない罵倒の言葉にとうとう僕も反論してしまう。そんな僕の目を見て、金貸し連中のリーダー格の男が僕を睨んだ。

「腹立たしいガキだぜまったく」
「気分を害されたのなら、その点については謝罪します」
「なあお坊ちゃん？お前さあ、どっかおかしいぜ」
「仰る意味が分かりません」

「お前は完璧すぎるんだよ。人間らしくねえ」

金貸しは僕に煙草の煙を吹きかける。煙かったが僕は我慢し、彼を見つめる。そんな僕の様子に男は忌々し気に舌打ちをした。ここで咳き込むか目を閉じるかすれば追い返すつもりだったのだろう。

「お前は見目も悪くねえし、養親思いで性格も良い？ ついでに頭も切れやがる。年老いた爺が来るより若いガキが来た方が、確かに将来性はある。下っ端の金勘定がわからねえ馬鹿なら金を貸してやってたかもしれねえ」

「……それはどうも」

「だがなあ、俺はそういうお綺麗なガキは嫌いなんだ」

「え……？」

人としての美徳を何故か僕は貶されている。

「人間何かしらどっか壊れていかれてるのが人間だ。解るか？ 正常を絵に描いたようなお坊ちゃん、てめえは逆にいかれてやがる。つまり人間じゃねえ。俺らは人間相手に商売してんだ。だからお前に貸す金はねえ。とっとと帰んな」

「あなた方も商売ならそんな理由で客を追い返すのはどうなんですか？ それでも商人なんですか？ 商人のプライドって言うのは無いんですか！？」

「言うじゃねえかガキ」

「ええ。ここに金に困ったガキが居る。そのガキはまだまだこれから働ける！ 仰る通り僕は馬鹿ではありません！ ですから必ず借った以上の金を稼いでお返しします！ してみせます！ それが出来ないときは僕を煮るなり焼くなりどうぞして下さい。……ここまで言う馬鹿相手に、騙して陥れて金を儲ける位の算段が働かないんですかあなた方は！？」

「ああ、無いね。俺らは客は選んだ。面白くねえ仕事は仕事じゃねえ。趣味と金儲けの両立できてこそその仕事ってもんだ。解るか若造？」

もっと汚れた目になってから改めろ。希望ではなく絶望をその目に灯してから来い。その絶望の海から頭を出して必死に浮かび上がろうとしている亡者を掬い上げる振りをして、その頭を踏みつけ海の底へと突き落とす。

これは唯の金儲けじゃない。その快感の虜になった奴らの職だと男は言った。僕には解らなかった。その頃の僕は誰かを蹴落とすこととか傷付けることなんかしたことがなかったから。そういうことはいけないことだと思ったし、それで愉悦を感じるような人間の方が何処かおかしいに決まっている。そう思っていた。……金貸しは、僕のそんな気持ちに気付いていた。

「なあ、坊ちゃん？お前はこんな薄暗い裏町まで来て、それでもその目は光を宿している。それがこの街の人間にとってどれだけ不快なことか解るか？てめえのその目は、俺らを見下してんだよ」

「僕にそんなつもりは……」

別に見下しては居ない。彼らがこういう場所でこういう事を始めたのにだってきつと何か理由がある。僕らみたいに攫われて売り飛ばされて逃げ出して……自分が犠牲になるよりは他人が犠牲にすることを是としたんだろう。

……とまあ、そんなはずはないだろうけれど、何らかの理由があって彼らはこうなった。他人事だから下手な同情とかするの怒りを買うだろうし、かといって見下す気はない。一歩間違えば僕だってどうなっていたか解らない。フィルツァーの家の拾われなければ僕なんか他の奴隷商にまた何処かへ売り飛ばされるか、或いは野垂れ死んでいた。

だからこそ僕は父さんと母さんに感謝していて、力になりたいと思っている。けれどそんな僕の気持ちは目の前の人には伝わらない。

「そう、その余裕が気に入らねえ！お前は窮地にありながら、それを窮地と思っていねえんだよ！自分なら絶対何とか出来るって妙な自信があるんだろ？」

それには言い返せなかった。根拠がない訳じゃない。

僕は何処にいてもある程度どうにか出来る程度には頭が回る。波風立てず、平穏を守る。それで厄介事の大半は回避できる。処刑祭りの国に生まれた以上、出る杭が打たれるのは知っている。だけどタロックとセネトレアではその処世術が違うのだ。

（人にあるまじき汚い側面を見せないと、彼らの信頼は買えないということなのか？）

だけど、人にあるまじき汚い事って何？そんなの咄嗟に思い浮かばない。どうすればいい？

ここで始めて焦りを感じ始めた僕に、金貸しは大げさに溜息を吐く。

「いいから帰んなお坊ちゃん、借金はてめえの養親共が払うのが筋ってもんだ。どうしても奴らの力になりたいってんなら奴隷商の所にでも行け。奴らならお前にも値段を付けてくれんだろうよ」

奴隷商。そう聞いて僕の顔が変わったのに気付いたんだろうか。

「奴隷商に追いかけられた覚えでもあんのかい？そうだな、お前みたいなタロークのガキ金にはならねえが、適当に女装でもさせて馬鹿に売りつけ大金掴んでとんずらでもすりゃあ……………おい、そ

れだ！それだよ！！」

「え？」

「金、貸してやってもいいぜ。没落成金貴族のお坊ちゃん？」

それは突然だ。それまで門前払いだった金貸しの態度が、一変。まじまじと僕の顔を覗き込んで来る。

「その面なら十分騙せるだろう。まあ、最近はチェックも厳しくなってきたし万が一って事もある。金貸して欲しけりゃ女になれ」

「は？」

「下のやつさえとっちまえば胸のねえ女だって誤魔化せる。流石に高価な商品相手だ、触りはしても脱がせるまで手荒なことはしねえだろ」

「ちょ、ちょっと！待ってください！」

相手が何を言っているのか解らなかった……いや、解りたくなかった。それでも解ってしまった。だから身体が震える。怖い。怖くて堪らない。

僕のそんな表情に、金貸しは満足げに笑う。その顔が見たかったのだと言わんばかりに。

「とりあえず一回脱がせてみるか。実は男装女ってパターンもあり得る。タロツク人には多いんだろ？それならフィルツァーが拾った理由も納得だ」

「や、止めろっ！放せっ！」

僕は暴れるが金貸しの手下達に押さえつけられて動けない。もうお終いだ。そう思った時、男の手が僕へと伸ばされる。

「残念、男だったか」

「っ……」

悔しげに睨み付けることしか出来ない僕を、興味深そうに男が笑う。この期に及んでまだそんな顔が出来るのかと。

「その薄い目と髪の色、どうせ生まれは大した出じゃないだろうに、プライドだけは一丁前に貴族かいお坊ちゃん？」

寛げられた衣服。羞恥に打ち震える僕を嘲笑う奴ら。許せなかった。

「でもよ、お頭。こいつなかなかだぜ、男でもそこその値で売れるんじゃない？」

「馬鹿言え。混血かカーネフェリーでもない限り、外見だけ良くても男なんか大した額付かねえよ」

混血。ここで僕の前にも立ち塞がるのか混血。

それまで僕は混血を憎んだことなど無かった。だけどそれは父さんと母さんが憎んでいる種族。奴隷貿易が始まった所為で、セネトレア市場は大きく変わった。フィルツァー家が傾いたのはその所為だ。

父さんは商才がある。だけどプライドがある商人だ。だから奴隷貿易にだけは着手できなかった。悔しかったんだ。認めたくなかったんだ。

人には差があり、値段で数値化されて優劣を見せつけられることが。血の薄まった純血ほど、混血が奴隷貿易が許せない。才能など関係なく、外見だけで自分が無意味で無価値な人間だと決めつけられることが許せなかったのだ。

だからこれまで通りの商売を続けた。けれど段々家は落ちぶれた。奴隷貿易に着手した者ばかり大もうけを始めた。これまで他の嗜好

品に流れていた金銭が奴隷貿易へと回り始める。そうなければうちは火の車。これまで高く売れた物、その商品価値が低下していく。：となれば仕入れに掛かった金が赤字となり、そうして自信を喪失した父さんの商才は曇っていった。借金はその最中抱え込んでしまったものだ。

そう、そんな大変な状況。いつ貴族の称号を失うか、土地を家を失うか。そんな状況だったのに……父さんと母さんは僕を拾ってくれたんだ。

若くして亡くした息子を思い出したからとか、そんな理由だった。僕は商人なんて金の亡者ばかりなのだと思うていたし、金のためなら人を人とも思わない。そんな連中だと思っていたけれど、その時それは誤りなのだと知った。

僕を拾ってくれた人は、とても優しい人だった。だから僕はそんな二人が大好きになったし、本当の両親以上に彼らを慕った。苦手な場所もあったけど、それは嫌う理由には鳴らない。二人は唯、僕と違う価値観を持っていただけ。そこで僕が養親を軽蔑したら、それは僕の大好きな二人の唯一大嫌いなところを真似てしまうことになる。それでは何の意味もない。だから僕は話を合わせて微笑する。……これまでずと、そうして来た。だけど今、僕は父さん達の気持ち解った。

僕は比較されている。混血という種族と。目の色、髪の色が違うだけ。それだけで彼らには価値があり、僕には価値がない。

「なあ、坊ちゃん。髪色染めて目玉交換して混血として売りに出されるのと、男の証取られて女の振りして売り飛ばされるのどっちがいい？どっちもそれなりに儲かるからな。騙される阿呆は出てくるだろう。俺らはどっちでも構わんぜ？それでお前の養親には金の手助けしてやるよ。なんたって、そうなりや借金帳消し所の話じゃねえ。たんまり釣りが入ってくる」

「……………」

まだ、女は解る。タロツクの女は少ない。だから貴重。ちゃんと裏付けされた理由があるんだ。だから僕は納得できる。

だけど、混血はそうじゃない。タロツク人とカーネフェル人が交わって生まれるその種族は、外見色が奇異というだけで高い商品価値を持つ。その全体の数は関係なく、一人一人が高価な値段で売買される。

目の色？髪の色？下らない下らないっ！そんなもので、そんなものに踊らされるされるなんて！そんなモノのために父さんが母さんが僕がこんな思いをするなんて！

「……僕の目に、僕の髪に触れるな。僕は僕のタロツクの血に誇りを持っている。お前達の様な血の薄まった、セネトレー……っ、タローク擬きなんかと一緒にするな」

そうだ。僕の色は血が薄まったんじゃない。唯両親が、或いは先祖が下民だったってだけだ。僕の中には一滴たりとも高貴な血なんか混ざっていない。それでも僕は混血なんかと違う。こいつらだつてカーネフェリーの血が入ってる、時代が違えば混血だ。僕の敵だ。貧しくても卑しくても僕は純血のタロツク人。それは僕の誇りだ。汚されて堪るか。

「なるほど、どっちもお断りってか。それならいい案がある。金の方は何とかしてやるよ、ははははは！」

睨み付ける僕に、男は顔を歪めて一度笑った。そして指を鳴らして手下に僕を運ばせる。薬を嗅がせられたのか、建物内に入ってから記憶が僕にはない。唯、目を開けた時には僕は裸で……手術台に拘束されていた。身を振ると、拘束していた鎖が切れた。それに辺りを見回すと……

「なっ……何、これ……!？」

辺りは一面の赤。炎と血の海。そこに浮いているのは見覚えのある人間達と層ではない人間。先程の金貸し達……それから身なりの良い男や女。皆仮面を付けているためその高貴な人達の顔は解らない。……あと、あれは医者か何かだろうか？血に染まっているとはいえ白衣らしき物を着ている。

「全く……この俺の縄張りで金貸し風情が随分と大きな顔を」

聞こえた声。振り返る。そして誰もが息を呑む。僕も同じ。

暗灰色の黒髪と、僕なんかよりずっと深くて綺麗な赤い眼。端正な顔立ちのタロック人の青年。タロックの男には価値がない……それでもそんなことを言わせない何かがその人にはあった。迫力、と言うのだろうか。その場の全てを従えるような絶対的な何かをその人は持っているようだった。

一つ訂正するなら、血の海に……まだ生きている人間が一人いた。あの金貸し共の頭だ。

「確かに愛らしい子供だが、あれは女ではなからう。奴隷商を商人組合を騙す算段とは面白い」

「こ、これは誤解です！ヴァレスタの旦那！滅相もない！俺達はそんなつもりではありませんでね、唯あれはショーの一環でっ！」

「ほう……その誤解を解くために、貴様は幾らまで出せる？」

「五千……っ、いや一億シエル出しますっ！」

「足らんな。貴様の所の総資産額はそんなものではないだろう？全額出すなら見逃そうとも思ったがその必要はないようだな。口封じに貴様を殺し、商人組合がその金を巻き上げた方が余程俺へ流れる金も多い」

「や、止めてくれっ！出すっ！出します全額っ！だからっ……」

「この世には金で解決できることも少なくないが、その金でさえどうしようもないことがある。貴様はそれに触れたのだ」

振り下ろされる剣の軌跡。それを僕は見つめていた。薄暗く血生臭い室内に現れた、その綺麗な白銀の輝き。それが赤に染まっても、その人の黒は何もかもを飲み込むように、その色に汚されず、そこにある。

「あ、あの……助けてくださって、ありがとうございました」

「礼には及ばん。……私に謝らせてくれ」

「え！？そ、そんなこと」

「ここは私の治める場所だ。そこで議席に名を連ねる家の者をあの様な目に遭わせてしまったのは至らない私の咎だ」

「そんなことないです！あれは僕が……」

こんな綺麗で凄い人に頭を下げられるなんて申し訳ない。むしろ僕が頭を下げたい。願われるのなら土下座だってします。その位僕は畏まっていた。緊張していた。

「そ、それにしても貴方は凄い剣の使い手なんです。惚れ惚れしました。ここの人達も貴方が……？」

「……覚えていないのか？」

「え？」

「いや、何でもない。気になることがあっただけだ」

そう言ってその人は僕に上着を残して離れ、血だまりに横たわる医者を蹴り付ける。

「起きろ、貴様は庇ってやったからまだ息があるだろう？」

「おや、バレてしまいましたか」

悪びれない調子で身を起したのは気味の悪い顔の老人。目の奥を映さない分厚い妙な眼鏡と白髪なのでタロークかカーネフェリーかわからない。

人を顔で判断するのは良くないことだけど、その人は顔だけではなく顔が……正確には彼の浮かべる笑みとその薄気味悪さの決め手ではあるが、雰囲気そのものが気味が悪い。気持ちの悪いことを考えていてそれを隠そうともしていない。だからそれが周りに伝わってこんな嫌な気分にさせているんじゃないか。そんな風に思ってしまうような男だ。

「その顔……見覚えがある。貴様、確か医術師のフロドゥール卿か」

「ご明察ですよ、東の主に覚えていて貰えるとは光栄ですね」

「議席所持の貴族の名と顔は記憶しているのでな。……こんなところで何をしている」

「何、仕事で彼らに呼ばれましたね。その少年を手術で少女にするか混血にするかを頼まれました」

「……確かに奴隷貿易では数術を扱える医者世話になることはあるが、そんな話は聞いたことがない」

「でしような。純血を混血にする手術をしたことは私もありませんでね、ひひひ、お楽しみは最後に取っておこうと思ったのですが」

僕は咄嗟に外見を確かめるため室内の鏡へと走る。髪も目の色も僕のまま。ほっと安堵の息を吐く暇もない。

「いやはや、残念。彼には強い守りがあるようだ。唯の外見弄りの手術ではつまらないので、ついでに輸血用の血液にカーネフェルの血を注いでみようとしたら、拒否反応が起きて……それに当てら

れてしまったようだ。この惨状は君が起こしたことだよ少年」

「……え？」

「やはり私の研究は間違っていないかった。純血でも優れた数術使いが存在する。つまりやってやれないことはないということ。いや、君には感謝しているよ」

「ならば感謝ついでに無償で彼から奪った物を返してやれ」

「それは出来ない相談ですな。痛み止めくらいなら私にも出来ますがなあ……」

「え？それって何の……」

嫌な予感がする。不意に背筋に額に冷や汗が。言われてみれば、何か……違和感。そして老人の言葉通り、じわじわと痛みが甦って……痛いっ痛いっ痛いっ！僕は立っていられずその場に座り込む。

「私がこの騒ぎを聞きつけたのは、町の様子がおかしかったからだ。私がここに潜り込んだ時には、……君も意識があつたのだが、あれだけ恐ろしい目に遭わされたのだ。忘れようと脳が機能するのも致し方ない」

赤目の人にそう言われて、ぼんやりと僕は思い出す。そうだ。僕は縛れていて、大勢の人が僕を見ていて。あの金貸し達がいい金になったと笑っていて。僕の悲鳴と泣き顔に、観客達は大喜び。泣いても叫んでも誰も助けてくれない。あまりの激痛に頭が真っ白になつて……そして僕は、あの血だまりにいた。

「奴らは趣味の悪い連中から金を取り、君の公開手術オークションを行ったんだ」

「……そ、そんな」

「これだけの美少年なら、切断してホルモン供給を止めればどんな容姿になるのか好事家共が好みそうなことだな。或いは新たな奴

隷貿易の境地の開拓にでもなるかと興味を持ったのだろう。切断プレイなどまったく加虐趣味の風上にも置けん。ここは蠟燭か鞭と相場が決まっている」

「切……断……」

「ひっひっひ。混血相手では勿体ないし資金もかかる。人体切断ショーは、純血奴隷が使われることが多い。坊ちゃんみたいな顔も良く幼い少年をいたぶるのが好きな人は結構いましたね。その方が来なければ可愛いお坊ちゃん、貴方は両手足まで切断されていたかも知れません。世の中には居るんですよ、そういうのが好きなお客もねえ」

真実を知った僕はその場に泣き崩れる。

自分の肢体に……恐る恐る手を伸ばす。けどない、ない……無い。手が肩が、身体が震える。これ、夢だね。きつと悪い夢。そう現実逃避したくなる。だけど痛みがそれを許さない。

話を聞く限り落札者の希望通り切断していくという悪趣味なショーで……落札価格が拮抗したお陰なのか、取るか取らないかで揉めていたお陰で竿の方は残っている。だからこそ何事もなかったのだと勘違いしてしまった。

「無論手術でくつつけることは出来ませんがなあ……唯の飾りです。数術使いの力でも借りなければ機能回復までは出来すまい」

僕は男として終わった。さようなら僕。僕の人生。終わった。終わったフィルツァー家。父さん母さんごめんなさい。僕じゃ跡継ぎ作れません。

「貴様、数術の心得があると聞いたが？ 医者連中には数術を学んでいる者も多いのだろう？」

「残念ながら私は純血です故、そんな魔法のようなことは出来ま

せんよ。概念、理論を囓っているだけでまだ混血の術師レベルには至らないので、神経を繋ぐ回復数術なんか使えませんよ。……もつとも、壊死する前に西の主という混血……セネトレアの魔女を頼れば何とかなるのでは？」

「セネトレアの魔女か。……情報屋だと聞いたが？」

「噂では割と手広く商売なさっているとか。情報さえあればそりゃあなんでも出来ますか」

「混血……」

まただ。混血にはどうにか出来る。だけど純血じゃ駄目。

僕が元の身体を取り戻すには、混血なんかに縋らないといけない。だけど嫌だ。僕が混血なんかには頭を下げなきゃいけないなんて。こんな恥ずかしい依頼っ、どんな顔で頼めて!? 第一僕にはそんなお金有るわけ無い。父さん達のことだってまだ解決してないのに、自分のことに使えるお金なんて……。そんなのあったら父さん達に回してる。

重たくのし掛かる絶望に、目から熱い物が込み上げる。それをごしごしと拭って僕は、恩人の前へと立つ。

「……貴方の剣、貸していただけませんか？」

「死ぬつもりか？」

「だって、こんなのっ!……父さん達に会わせる顔がありません! こんなことなら、もっと早く死ねば良かったっ」

生きていてもこうやって嫌なことしかないのなら、僕はもっと早くに諦めてそうしていれば良かったんだ。それならいっそ、ロセツタじゃなくて僕がその役を買ってみんなを逃がせば良かった。僕が犠牲になって怒りを買って死ねば良かった。彼らを守れて死ねるなら、十分それには意味がある。僕の生には意味があったと誇れる。だけど、こんなの……僕に誇れる物なんか何もないじゃないか! 口

セツタはタロックに売り飛ばされて、僕はフォースともパームとも離れ離れ。父さんと母さんに恩返しも出来ず、こんな身体になってしまった。僕は自分が情けなくて恥ずかしい。こうして一分一秒呼吸をするのも生き恥だ。

「逃げるのか？」

「違いますっ！僕は……っ」

逃げるんじゃない。僕は……負けなために死ぬんだ。

「混血なんかに縋って僕は生きたく無いっ！それが僕の、純血としての最後のプライドなんです！……だから僕を、死なせてください」

「……ならば、私に縋れ」

泣き出した僕を抱き留めて、その人は低く囁く。

「………え？」

「君がこうなる前に救えなかった。それは私の責任でもある」

「……同情ですか？それなら結構です。僕は貴方もその人も怨恨でいません」

「ならば何を怨む？」

「この世界そのもの……こんな、わけのわからない世界っ！壊れてしまえば良いんです……でも、そんなこと出来ないから……僕が壊れて消えるしかないじゃないですか！」

あまりにも理不尽で、無意味に残酷なこの世界。消えろ消えろ消えてしまえ。そう願ってもまだこの世界はここにある。

「同情と言ったな。生憎私……俺にはそんな感情はない」

赤目の男は、淡々とそんなことを僕へと告げた。

「俺はお前の誇りが気に入った。その高潔な魂を死なせるのは余りに惜しい」

そんなこと言われたの、初めてだった。こんな壊れた、壊された欠陥品の僕を見てどうしてこの人はそんな言葉を言うのだろうか？

「貴様、名は？」

「僕は……グライド。グライドⅡフィルツァー……です」

僕が名乗るとその人は、頷き一度僕の言葉を小さく確認するように呟いた。そして、僕の両肩を掴んだ。

「良いかグライド。死ぬべきは貴様に非ず。混血なんぞに現を抜かすこの国、この世界の方だ。俺はいずれ王になる男だ。俺の傍にいれば、お前の望みは叶う。この世界、一度俺が壊してやろう」

「グライド、俺に仕えろ。俺の物になり、俺のために働け。貴様に復讐の機会と生きる喜びを教えてやる」

有無を言わさぬ迫力。気がついたら僕はその人に頭を垂れていた。東の主と知り合ったことで、フィルツァーの家は持ち直した。彼がヴァレスタ様がその援助をしてくれた。ヴァレスタ様の口添えもあり、仕事やし易くなった父さんは生き生きと仕事を再開し、以前の商才を取り戻した。僕はその家業を手伝う傍ら……いや、逆だ。ヴァレスタ様に仕える傍ら、家の仕事も手伝うようになった。

「ヴァレスタ様っ！」

「そうはしゃぐな、グライド」

一刻も早くあの人に会いたくて、僕は言いつけの時間より早くgimmickに顔を出してよくあの人を困らせた。僕のために請負組織の建物内に部屋を設けてくれたけど、父さん達が心配で、僕は実家通いを続けていた。

何時しか……いや、すぐにだ。この人のために働くのは僕の生き甲斐になっていた。僕は完全にこの方に心酔していた。本当は一秒だって離れずお仕えしていたくらい。

「ふむ、またいい働きをしたな」

僕が持ってきた書類にヴァレスタ様は満足気に笑う。天にも昇る心地だった。

「グライド。君のお陰で私の仕事が捗るようになった。礼を言う」

彼は例の一件を城へ告げたらしく、その野放しが議員の縁者に危害を加えたと言うことで、金融業は商人組合が独占で担うことになったのだと言う。王は君臨すれども統治せずと言われているこのセネトレアだが、商人議員関係者にはそうでもない。

もつともそんな取り決めが出来たとしても守らないのがセネトレア。城に連行すれば勿論それ相応の処罰は受けさせられるが、そのためには誰かが捕まえないといけない。

そこで僕に任せられた仕事の一つが、金貸し狩り。暗に金融業を行う者を見つけて、その容認のための条件を呑まなければ殺して構わないと言われている。

商人組合と繋がりのある請負組織gimmickの管理下に入らなければ、殺してその財産全てを没収。入った場合は月々儲けから決められた割合を収めることになっている。

一度死のうと思った僕だ。誰かを傷付けることにも、殺すことにも別にそんなに抵抗がなかった。どうでも良かった。この人が喜んでくれるなら。僕の苛立ちが静まるのなら。

「また後で剣を見てやろう。君には……いや、お前には才能がある。俺のために腕を磨いておけ」

「は、はい！ありがとうございます！」

僕の襟元には齒車の形のピン。この請負組織の一員……その幹部にしか与えられていない身分証明。これ一つ身につけることで、僕はあの物騒な東裏町を自分の庭のように自由に歩ける。僕を傷付けると言うことはg i m m i c kを敵に回すと言うこと。僕はあれから危険な目に遭うことは殆ど無かった。ヴァレスタ様のお陰だ。小さないざござは何度かあったけれど、それも僕の力で解決できるところだった。

忙しさは喜びだった。嫌なことを忘れられる。忘れさせてくれる。過去も未来も今の僕には関係なくて、僕は今を生きている。生きていられる。希望がある。……それは紛れもなく幸せなことだった。

そんな僕の幸せに、暗い影を落としたのは……とある混血との出会いが原因だ。殺人鬼S u i t……銀髪紫眼の混血。あの男と出会ったことで僕は親友のフォースと再会し、彼と対立する今に心を痛めた。生き甲斐であるはずの仕事を辛く感じさせたのは、あの二人の所為。

そして……S u i tを呼び出すために拉致した混血、人質のリゼカ。そう……あいつは唯の人質だった。用が済めば殺すはずだった。なのにヴァレスタ様はS u i tに会ったことで何か変化が生じた。その変化の結果、あのゴミを傍で飼うことにしたのだ。あの人の傍で隣で働くのは僕の……特権だったのに。いつの間にかあのゴミは……あの人の近くにいた。ヴァレスタ様もあいつ相手だと、僕には

見せない顔をする。僕相手にはいつも取り繕った余裕のある優雅で格好いい顔をするけれど……僕は、意地の悪い貴方の顔とかそういうのも向けて欲しいんです。それ全部引くくるめて貴方でしよう？ 貴方は僕に、自分の欠けた場所を決して見せようとしなない。完璧でいようとする。そんな貴方の様子に僕は……本当は僕は信頼なんかされていいんじゃないかって悲しくなるんです。

奴隷のあいつと貴族の僕では、あいつが僕に勝るものなんてそうそうない。剣なら僕の方が上。後ろ盾だって資産だって僕の方が上。仕事の成績だって僕の方が遙か上。僕の方が上手にお茶を淹れられる。僕だって数術が使える。外見色はあいつの方が稀少だけど、顔の造形自体なら僕だって負けてない。それなのに何故？

あいつにあって、僕にないもの。それを考えると……僕はまた、混血という生き物が憎くて憎くて堪らなくなる。

＊

「まあ、詰まるところ君はあれだね」

「お茶のお代わり、要らなそうですね」

僕はヴァレスタ様の取引相手という死神商会のお頭を睨み付けた。オルクスという名の金髪青目のカーネフェル人。

彼も純血だけれど数術の才能があるらしく、同じ境遇の僕を興味深く見つめている。

「ヴァレスタ兄さんが本当に大好きなんだねえ」

兄さん。同じタロック人のロイルさんなら解るけど、タロック人のあの人をカーネフェル人のこの人がそう呼ぶのは違和感がある。けれど両親どちらもカーネフェルの血を併せ持つタロック人ならカーネフェル外見の子供が生まれることはあるらしい。彼の青目は僕

の赤目と同じで劣性遺伝ではなく数値異常から始める確立による色彩効果なのだと考えれば辻褃は合う。

「うん、リゼカ君だっけ？エルム君だっけ？彼が淹れるお茶より気品があるね君の香りは」

「当然です。父さんがシャトランジアから直輸入で仕入れてきたお茶ですし……あんな混血と僕を一緒にしないで下さい」

だけどこの人は苦手だ。僕とは違うというか……僕より数術の才能がある。物事に聡すぎる。だから僕の思考を読むようなそんな素振りを見せるのが嫌だ。

「そんなに混血が嫌いかい？」

「大嫌いです。滅べばいいのに」

「あはははは！面白い子だねえ」

僕の言葉を客人は、けたけた笑い飛ばした。失礼な。

「君は自分より後にやって来たあの子が自分よりヴァレスタ兄さんの傍にるのが気に入らないんだろう？」

「……………」

そうだ。気に入らない。あの赤髪の混血。僕より後から来た癖に、あの人の傍にべったり。ヴァレスタ様もあれは人間ではないからと道具扱いしているけれど、道具だからこそ人の僕より一緒にいられるあいつが僕は羨ましかった。

（また、……混血だ）

いつも僕の前に現れて、僕にこういう不快な感情を植え付ける。

アルタニアで出会ったあの美しい少女……にしか見えないあの男。フォースが仕えている殺人鬼S u i t。不快だった。

だって僕はもう壊されているから、誰かに対してそういう風に思うことはあり得ないはずだった。だけどあの目を見るとドキドキした。妙な感覚に襲われた。

これが恋というものなんだろうかと錯覚した。僕にはもうそんな感情知らないままに終わってしまったのだと思ったけれど、僕の胸は高鳴った。それがどんなに嬉しかったか。僕が男に戻ったような気がした。あの子にキスされて、僕は恥ずかしくて嬉しくて……悲しかった。それ以上を望む心が自分の中に湧き上がる。だけど僕にはそれ以上なんてあり得ない。可愛い女の子をお嫁さんに貰って、平和な家庭を築くとか……そんなこと出来やしない。

おまけにあの子がヴァレスタ様の敵で！男で……混血だって知った時の僕の気持ち解る奴なんて誰もいないだろう？

人の心を弄び、ずたずたにして引き裂いて。ああ、嫌いだよ。混血なんか。

「一つ教えてあげようかい？風えの噂でなんだけどねえ……殺人鬼S u i tが君の生まれのタロツクの王子さまだって言うのは知っているよね？」

「それが何か？」

「それじゃあ彼が毒殺されて毒人間になったのも知っているですよ？」

「ええ、まあ……」

「それで彼、面白いことに体液全てが毒になったんだってね。全てっていうんだからあんなどころからこんなところまで全部毒って訳だよ、うん」

以前あいつに口付けられた時、僕が気を失ったのはその毒の所為だ。そこで解毒をされていたから僕はまだ生きているのだけれど……

：それは、僕があいつに見逃して貰った……っ！フォースの友人だからと情けを掛けられたのだ、混血風情にっ！

そう思うと許せない。あの人に救われた僕の生を、また混血なんかが辱める……

「彼は君と同じさ。跡継ぎなんか作れない。毒の王家は順調に、滅びに向かっていているわけだ」

「そうですか」

怒りが勝り、別段彼のその現状に僕は哀れみを覚えない。故郷の存亡などもうどうでもいい。僕が仕えるのは未来のセネトレア王ヴァレスタ様なのだ。タロクなんか勝手に滅べば良いんだ。

「でも彼の場合はさ、あの外見だけど君と違って全部丸々残されてるんだよね。つまりあんな少女みたいな成りでも身体や精神は健全過ぎる青年なんだよ」

「……は？嘘、ですよね？」

だけどそれには驚いた。あんな女顔負けの女顔で歴とした男だっ……て！？てっきり全部除去されてるものだと思った。僕なんかこんな身体にされたのに、あいつはまだ男として生きてるのか。

「ははは、そこで怒るのは筋違いだよフィルツァー君。これはむしろ彼にとって苦しいことなんだからねえ。彼は女に惚れても男に惚れても絶対に手を出せない。彼の恋は実ることを知らない、許さない」

「だからこそ彼は人を愛するんだよ。混血を奴隷を守って庇って愛してる。そうすることでしか人と接することが出来無いんだ彼は」

「つまり……」

「そういうことさ。彼は自分が何かされるより、自分の大切な者を壊される方が堪えるってこと」

だからあの人は敵陣に混血を潜り込ませたのか。僕は合点がいった。

「所でさ、君は何故ヴァレスタ兄さんが彼に固執するか解るかい？ 僕から言わせれば、君が羨んでるリゼカ君が羨んでいるのが那由多王子なんだけどねえ」

オルクスの片手には硝子ケースに収められた紫の眼球。ヴァレスタ様は捕らえたSuitを解体して売り捌くおつもりなのだろうか？ それにしては……目だけというのはちよっとおかしい。それにまだ……手術部屋から出て来ない。そんな僕の疑問にヒントを与えるように、オルクスは妙な言葉と共にお茶のお代わりを頼んでくる。

「リゼカが彼を？」

「混血にもグレードがあってね。那由多王子はその最上級だ。それに比べたら彼は中の下レベル。劣等感はあるんだろうね」

渋々彼へを茶を出す僕に、気をよくしたのか彼は鼻歌ながらに頷いた。

「憎しみのない恋はあっても、憎しみのない愛はない。恋というのは対象の欠点まで美德に見えてしまう精神疾患で、愛というのはそれが見えていながら許してしまえる愚かささ。敬愛でも愛は愛。それは変わらない」

「はい……？」

何故いきなりそんな方面に話が飛ぶのだろうか？

「或いは異常な程の憎しみ。深すぎる憎悪が生む執着は、愛と紙一重とも言う。好きの反対は無関心だからねえ。関心があるって事はある意味愛してるってことなのさ」

「え、ええと……」

「つまりヴァレスタ兄さんを大好きな君は、彼の欠点が本当に見えていないか見えているのに気付かない振りをしている。兄さんは兄さんで君に嫌われたくないばかりに、君に多くを語れない。彼は別に君を厭ってるとかあの子の方がお気に入りというわけではないんだよ。だって、兄さんのお気に入りには那由多王子だからねえ」

「……あの男が」

「金にしか興味執着を持たないあの人が、金を言い訳にするなんて初めてだもん。彼に比べればあの赤毛の子なんて取るに足らない存在だよ」

「……………」

「兄さんが彼の目を取って見たかったのはきっと、全部この眼の所為だと思ったからなんだろうねえ」

「そ、そんな言いがかり止めて下さい！ヴァレスタ様があんな男に御心を傾けられるはずがありません！あんな顔でも彼は男なんですよ！？」

「タロック育ちはみんな固定概念堅物派なんだねえ。いや、あの闇医者さんだけ例外か」

「あの男の話は聞きたくありません」

ヴァレスタ様を裏切って、Suitなんかが付いたあの男。埃沙の異母兄という闇医者、洛叉。真純血のタロック人だからとヴァレスタ様も深く信頼していたのに、それをあの男は裏切ったのだ。とても許せる事じゃない。

「それにしてもフィルツァー君、君は綺麗な声をしているね。顔

良し声良し頭良し、ついでに家も身分もかなり良し。欠点と言えばその性格くらいなものだね」

「解りました。次のお茶のお代わりには毒でも混ぜておきますね」
「あははは、冗談が通じないのはヴァレスタ兄さんにそっくりだなあ。そりゃあ気も合うか」

「あの人は……確かにお金が大好きだけど、それだけじゃない。あの人は……そんな理由で僕を拾ってくれたんじゃないやありません」

僕は知っている。僕を助けてくれた日のあの人は、あの人の傍へと走っていく僕を見下ろすあの人は、とても優しい目で僕を見ていてくれた。僕の行動を、僕の存在を金銭で置き換え価値を計るような目をしていなかった。あの人は商人だけど、とても優しい人なんだ。純血としての僕の誇りを、あの人は愛でてくれている。だから僕はこんな自分を誇ることが出来るんだ。

「そっか、そっか。それならごめんね。変なこと言っちゃった。お詫びに君にいいことを二つばかり教えてあげよう」

「え？」

「君は頭も良いし実にいい声をしている。素質があるよ。作ってみたものの僕には使えなかった数式が君には使いこなせるかもね」

そう言っただけでオルクスは僕の手を握る。その瞬間、僕の脳内に流れ込む数式がある。脳に浮かぶそれをなぞり……僕はその現象を理解し受け入れた。

「だけどそれは数式だけじゃない。奴は二つと言った。一緒に流れ込む画像は地図。」

「君、明日……っていうかもう今日か。今日はオフだったよね？これから帰宅？でもまあ、この間第五島まで出向いて怪我したんだ。大事を取るように言うなんて兄さんは確かに君を大切にしているよ。」

「だけど優秀な部下は休みに休むかな？ 君はどうなの？」

その場所で大きな功績を挙げれば、あの人はまた喜んでくれる。僕を褒めてくれる。……ああ、そうだ。僕に休んでいる暇など無い。父さんの仕事の手伝いも、今日は入っていないかった。

「もし行くのなら、第五公から借りて来た僕の軍を貸してあげようか？ 彼らも向こうを攻める理由はあるんだよ。エリアス様を取り戻すっていう目的もあるし」

「……………僕に、軍を？」

「君さえ頷いてくれるなら、彼らごと向こうの拓けた場所に飛ばしてあげても良いんだよ？ 今から向かうんじゃ、リゼカ君達の働きで終わっちゃうかも。そうなれば……兄さんはまたあの子がお気に入りになるかもしれないねえ」

挑発だと解ってる。それでも適確に此方の不安を煽る言い方。僕だって取り澄ましてはいるけれどまだ子供だ。大人になりきれない。頭で理解しても心が割り切れない。

「ヴァレスタ様……」

貴方が喜んでくれるなら、僕は何人だって殺します。混血も、純血も。みんなみんな……

貴方のために働きます。頑張ります。だからどうか僕をお側に置いて下さい。それが、それだけが僕の……

＊

アルムとディジット、エリアス……それから大勢の住民を逃がした僅か後。フォースは空気が変わるのを感じていた。何かが来る。

数術の気配。下位カードの自分ではあまり数術は理解できないのだけれど、それでも殺気や気配は分かる。突然人間が増えればそれは違和感を感じもする。

(……空間転移)

トーラでさえ大勢の人間を飛ばすのは手こずる。それをやってのけた相手は誰か。このセネトレアでそれが出来そうな相手と言え、おそらくオルクス。剣を構える手にも力が入る。

近づいてくる大勢の足音。それを相手に俺は何処まで戦えるだろう。俺は数術も使えない。人殺しとはいえ、正々堂々戦って殺したことはない。今日、人を斬った。直接俺の手で。まだ手が震えている。それさえ卑怯な手を使って勝った。じゃなきゃ俺みたいなガキが、大人相手に勝てるわけないんだ。

俺は汚い。それでも俺には守らなきゃならない人と場所がある。逃げられない。どんなに怖くても、足が震えても……それを武者震いだと脳に錯覚させるしかない。

俺は睨み付ける。目に映るもの全て、かつてのカルノツフェル……それを見るように。行き場のない憎しみを横暴な暴力として目の前の相手にぶつけよう。そうでもしなければ俺は勝てない。

「久しぶり……でもないか。また会ったね、フォース」

「グライド……」

その大群を率いるは俺の……かつての親友。今だってそう呼べるものなら呼びたいけれど、それはもう許されない。

今だけ強くあろう。全部終わったら、俺は泣いてもいい。こいつの前でしか泣けない俺じゃなくなった。弱い俺を受け止めてくれる人がある。俺の汚い所を見ても、それでも俺を抱き締めてくれる人がある。俺の罪を被ろうとする、そんな優しく残酷な人が。

（リフルさん……）

俺は人を殺します。殺気も殺しました。だけどそれは自分のためじゃありません。俺が生きたためじゃありません。俺は苦しくて、これから辛い思いをするし、一生自分を呪い続ける。だけど……俺は守るためにやるんです。

（だから、許して下さい）

俺にもう二度と人を殺させないとした、貴方を裏切る俺を……どうか嫌わないで。

貴方が俺の居場所なんだ。貴方を取り戻す。貴方が帰って来る場所を守りたい。俺が貴女の傍にいたい。信じたいんだ。貴方が今も無事だって。信じるために、もう俺は逃げられない。

＊

随分遠くへ来てしまったねお互いに。

フォース……君とは半年ぶりとはいえこの間も僕らは会っているし、そこまで久しぶりって訳でもない。それでも妙にそんな風に思うのは、こんな所で出会ったからか。

茶色の僕の髪とは違う、タロツクらしい灰色の髪。僕とは違うその灰色の目を君はあまり好きではなかったね。僕の赤い眼を羨ましそうに眺めていた。

要するに君という人間は、自分人は何の価値もなく、自分を本当にどこにでもいる取るに足らないつまらない人間だと思っていたんだ。

だから何時も幼なじみ達の前では強がって、兄貴風を吹かしていた。そんな君をロセツタは下らない男のプライドだと呆れていたし、

パームは君に懐いてはいたけどそれで尊敬なんてしてはいなかった。それでもめげずにそんなことを続ける君の姿を僕は隣で見て来て、君はとても弱いけれど強い人なんだと思っていた。

そうだ。君自身はとても弱い。それでも君が自分を強く大きく見せようとする時は……自分じゃない他の誰かを守りたいという時なんだ。

半年前、アルタニアで見た君はとても小さな男に見えた。ボロボロに傷ついた目をしているあの日の君は捨て犬のようだった。それが今は……君は刃を抜いている。事もあるうにそれをこの僕へと向けている。自分の足場を知って尚、覚悟を決めた灰色の目。

「フォース、君は馬鹿だね」

時にそれは優しさと呼ばれるものかも知れない。だけど僕は今、それを敢えて愚かと呼ぼう。言い換えるなら君の弱さだ。

混血なんて化け物を、自分と同じ人間だなんて錯覚してしまうなんて本当に愚かなことだ。出来れば君の目を覚ましてあげたかったけど、それももう無理なんだろう。

君は優しいから、そういう勘違いをしてしまった。犬も3日飼えばって言うしそういうことなんだろう。君はあんなゴミ屑のような化け物達に愛着が湧いてしまった。あんなゴミ屑を守るために殿に立ち、君と同じ人間を斬るんだから。

「遅かったな、グライド。他の奴らは数日前にもうここに潜り込んでたんだろ？」

「どうしてそれを？あの屑達が裏切ったのかい？」

「んなわけあるか。それでもねえと計算が合わない。あくまで俺の推測だ」

内に手引きした者がいなければ、こんな奇襲あり得ない。彼はそ

う考えたらしい。

だけど僕はフォースのそういう口調に違和感を覚えた。

「推測……ね。君らしくない言い方だ」

「……………だな。けどまあ、トーラの傍にいとそんな風にもなるさ」

トーラ。その名はセネトレア一有名な請負組織の名にして、その頭の名。通称セネトレアの魔女と呼ばれる情報屋。もっともそれが通説だと言うだけで、女だという確証は特に無い……が、それが真実だと僕はごく最近知った。そいつに縋れば僕は助かると聞いた……その名が再び甦る。今更だ。

「……まったくあんな不気味な女の目をどうして」

「……目？」

「最近ヴァレスタ様の仕事の取引相手にやたら眼球マニアがいるんだ。僕らにも、今日の仕事で殺すのはいいいけど目だけは傷付けるなって通達が来ている」

確かにゴミは廃棄すべきだけど、そのゴミを高い金で引き取ってくれる馬鹿がいるんだ。商人としては利用すべき。例えばそれがあんなゴミ共に高価な価値があると黙認する意味に受け取られることになっても。その屈辱に耐え、より多くの金銭を得るのが商人としての力量。財の大きさこそ商人の力。金さえあれば幾らでも見返せる。やり直せない失敗はない。それくらい金の力は偉大だと、あの人が僕に教えてくれた。だから僕の家は再び社交界に戻れたし、各所の信頼も取り戻せた。結局は金！金なんだこの世界は！

……でも、世の中金だけでもない。金では取り戻せないものもあるのだ、確かに。彼の足下、地面には彼に倒された者達が転がっている。

（腐っても、“残虐公の番犬”か）

フォースがそう呼ばれたのは半年前まで。ヴァレスタ様が後釜に据えた新たなアルタニア公カルノッフェル。その前の公爵に僕の親友は仕えていたらしい。セネトレア王都で離れ離れになった後、彼が流れ着いたのはそこだったのだ。その過程の何処で殺人鬼Suiもなんかに出会ってしまったのか僕には解らないし、どうしてあんな男に君が入れ込んでいるのかも解らない。

あんな女みたいなの顔の男。顔くらいしか取り柄がない……その上男だなんて混血だなんて最悪だ。思い出すだけでも屈辱だ。一瞬でも可愛い子だなどか思った自分を絞め殺したい。よりにもよって混血に、あんな事をされるだなんて。フォース……君だってあの女男に誑かされてるだけなんだよ本当は。ヴァレスタ様も言っていたし、僕自身もそれに惑わされた。あの男の目は悪しき光を宿している。

「それで？そこを退いてくれないかな？じゃなきゃ僕は君を斬ることになる」

「退けない」

「あの殺人鬼にどんな命令されたか知らないけど、君がこんな場所のために命を賭ける価値はない」

「そうだな。俺はリフルさんを疎むこの街が嫌いだよ。……だけど俺がここにいたのは、待ってたんだお前を」

「僕を？」

「お前に聞きたいことがあった。それに……お前が来ないはずがないんだ、グライド」

「君に僕の何が分かるって言うんだ？」

何も知らない癖に。あんな女男に誑かされるって事は、君はまだちゃんとした男だって事なんだ。

「お前、ロセツタに酷えこと言ったんだってな。何でだよ？ あいつだって俺達の……」

「だけど彼女は混血だ！ 混血なんかを一瞬でも友と呼んだ僕の屈辱が君に解るのか！？」

あんな酷い裏切り。僕は他に知らない。年下の女の子に守られて、僕はとても情けない思いをしたけれど、彼女のその自己犠牲に感謝したし彼女を尊敬する思いがあった。

彼女の好意に気付かない僕じゃない。僕がそれに応えなかったのは、フォース……君が彼女に想いを寄せていたのを知っていたから。それでも誰かに好意を持たれること自体に嫌悪感を抱いたりはしない。自分の存在意義を見出せない僕にとって、それは確かに支えの一つではあったんだ。

（それが……よりもよって、混血っ！！）

僕は裏切られた。過去さえ僕を裏切った。思い出の中の記憶は美しく、決して損なわれることがない。そんな前提すら覆す、酷い裏切りだった。

フォース、君だって同じだ。所詮君も遣伝子レベルで女に現を抜かすだけの男なんだ。だからそうやって、すぐ女を庇う。女が女ってだけの話で。

あの殺人鬼だってその辺の女より綺麗な顔の女に見えるから、君は無意識レベルで騙されているんだ。だから守りたいと思うんだろう？ それはつまり、結局君だって僕の大嫌いだった両親と何も変わらない。君だって理不尽の権化だ。僕は友情よりもあの人への忠誠を取った。君も同じように見えて、結局は違う。君はあの女男に惚れて居るんだ。そういう下心で仕えているんだろう？

ああ、恋なんて愛なんて下らない！ そんなものなくたって人は僕

は生きていける。そんな物に縋る奴は人間じゃない。人の魂を持っていない。もっと下賤な何かだよ。僕はこんな汚らわしく低俗な奴を一時でも友と呼んだことを心から恥じるっ！

「これ以上君と話すことは何もない……」

「グライドっ！」

「そこを退け。残虐公改め殺人鬼の飼い犬」

「……っ」

「退かないならば……力づくでも」

僕は息を吸う。見せてあげるよ。僕と君の違いっていう奴を。ねえフォース……君はまだまだ幸せなんだよ。本当に。

3..Alitur vitium vivitque tegendo.

(後妻

未遂で済まそうと思ったんだけど、色々考えたら彼が壊れた理由と混血を憎むようになった理由は未遂程度じゃ済まんだろうと思い決行。敵ながら可哀想なことをしました……全除去かむしろ焦らしであっただけ残すか考えたけど、色々調べた結果あなりました。影のある美少年ってレベルじゃないっす。リフル以上にある意味悲惨ですがな。

でもグライド君の精神不安定なところとか、ヴァレスタにべったりなところとか姑の如くエルムいびってた理由になんか納得した自分が嫌だ。居場所取られるってことはアイデンティティの喪失に等しいんだよな彼にとっては。

4: **S e m p e r a v a r u s e g e t .**

風呂から上がり、咽が渴いた。茶でも淹れて貰おう……そう思ったのだが。

「グライド……？ 帰ったのか？」

それはおかしい。ヴァレスタは暫し考え込む。あの少年が俺に挨拶など無しに帰るはずがない。

「やあやあ兄さん、長風呂だったねえ。何かやっていたのかな？」

「……オルクス、もう終わったのか？」

「そりゃあ勿論。僕ってば凄い数術使い様だし？ 兄さんのお気に入りのフィルツァー君の前ではちゃんと純血の振りしてあげたから感謝してね」

「感謝など誰が。そのようなことをせずともその時は貴様がグライドに殺されていただけの話だな」

「あはは、怖い怖い」

さして怖くも無さそうに死神が笑う。

「でも驚いたよ。兄さんあの赤毛の子以外にもあんな怖いの飼ってたんだ。正気？ 自分の傍に純血を置くなんて」

「貴様には関係ない」

「彼も精霊憑きだから？」

「違う」

「え。嘘お！ 違うの？ じゃあ有能だから？」

「有能なのは認めるが……」

別に、それだけが理由ではない。

俺はこれまで多くの純血に裏切られてきた。しかしあそこまで純粹に俺を慕う純血は……グライドが二人目だ。かつてのロイルを彷彿しなかった……そう言ったら嘘になる。

あの愚弟は女に現を抜かし俺を裏切った。しかし……

（グライドは……違う）

あれは愚弟ロイルのように女に現を抜かすことはない。常に俺に忠実であり続け、俺を慕い続ける。それが保証されている。俺が正体を明かさない限りそれはそう、絶対だ。

「王になる気のない貴様に問うても無駄だろうが、一応聞いてやる。オルクス、王にとって必要なものが解るか？」

「えー…金とコネと運じゃない？」

「概ね可だがそれでは零点だな」

「概ねあつてるなら百点にしてよ兄さんのけちドケチー」

「何か言ったか？」

「いいえー何も」

俺の視線にさっと目を逸らすオルクス。食えない男だ。御しがた
い。こういう者が一番厄介。

「貴様の解には一なるものが欠けている」

「何それ？」

「駒だ」

「駒ねえ……なるほどなるほど」

「如何に優れた王であろうと、チェスも将棋も王1人では話にならない。無論コネも必要だが、大事なのは駒だ」

俺は弁えている。俺の願いは願うだけでは叶わない。そこまで自惚れてはいない。俺がそこまで万能だとは。

だからこそその積み重ね。必死にかき集めた金が無意味になったとしても、そこまで忠実に仕事を繰り返した俺の功績は、必ずや意味のあるものへと変わる。仕事の過程で俺が培ったコネクションはあの憎き女王を討つための力と変わる。

「そうだなあ……ロイル君は猪突猛進だから塔。リィナさんはそこまでまっすぐ進めないから騎士あたり？もつとも……兄さんのじやなくてロイル君の فقط」

俺の言葉を吟味しているのかオルクスは妙なことを言い出した。

「あんな愚妹、端女か下女で構わん。もしくは生ゴミ」

「そんな駒チェスにないよ兄さん」

俺はこの男の笑いが俺に向くのが好きではない。この男が相手を馬鹿にする意味以外で笑ったところを俺は見たことがないからだ。軽く嘆息する俺の傍でオルクスはんーと考え込む素振り。

「カルノッフェル君はポーンかな？カードじゃない割りには頑張ってくれたけど……一般人なんてあんなもんなのかなあ」

死神の嘲笑は俺からあの男へと移る。その名で思い出した。後任の件を考えるにもあれの死体が上がらなければ。

「オルクス、カルノッフェルはまだ見つからないのか？」

「ははは、無茶を言わないでよヴァレスタ兄さん。向こうには神子様直属の聖十字がバックに付いてるんだよ。教会兵器持ち出されちゃ流石の僕も簡単にはいかないよ」

けられらと笑うオルクス。その態度の所為でいまいち信憑性が無い。

「真面目に探せ」

「短気は損気だよ兄さん、歴史上でも焦って良い結果を生んだ人間は須く居ない様な気がするよ。たぶん。詳しくは知らないけど」

「まあ、ここは僕がお茶を淹れて差し上げますから優雅にティータイムしながら一ゲームどう？」

片手を鳴らしてテーブルに、チェス盤を呼び出すオルクス。

「兄さん、どっち良い？」

両手に駒を隠し持ち、にこりと満面の笑み。

「下らん。貴様のことだ。両手に黒を持っているんだろう？」

「えー……何で解るの？兄さん数術使えたっけ？」

「俺が何年この国で……この島で生きていると思ってる？貴様のように安全圏の他島へ逃れた奴とは違う。……だが、百万シエルくらい出すなら付き合っても良い。その茶番にな」

「兄さんたら本当に兄さんだねえ。少しは変わったと思ったけどそんなことはなかったのかもしれないなあ。まあいいや。別にお金には困ってないしね、キャッシュでポンっと支払いますよ」

言葉を媒介に音声数術。空中から札束が現れる。が……

「オルクス、一枚足りない」

「兄さん、早過ぎ。指怖い。人間止め過ぎ。そんなものの数秒で

正確に枚数数えないでよ」

「やはり足りなかったか。安心しろまだ半分しか数えていなかった」

「十分人外だよ兄さんもかなり。ああ、一枚抜いたのは送料分だよ」

その送料がこの金のことなのかグライドの事なのかは解らない、含みを宿したその言葉。

「……オルクス、グライドを何処へ運んだ？」

「そんなに疑り深い目で見ないでよ。繊細な僕の心が折れたら大変でしょう？……っとまず2マス。はい、次は兄さんだよー」

「……………何が望みだ？」

「そんなに警戒しなくても。幾ら兄さんに苛められて？ロイル君と引き離されたリィナさんが今し方ここを出て行った気配がするからって僕を責めることないじゃないか。兄さんの周りのカードがみんなバラバラになってガードがら空きとはいえ兄さんは最強の一角だし？僕みたいな数兵にはこうしてお茶の相手をするくらいのことしか出来ないよ」

暗に奴はいう。聞きたいことがあるならこのゲームに付き合えと。俺は舌打ちながら黒の駒を手を取った。……確かにだ。俺がその気になればこの男くらいすぐに消せる。まだ利用価値があるからそうしないだけ。

「足りんな。時は金なり。一億くらいは払って貰う」

「家族サービスの精神ないねえ兄さんは。別に良いけど」

＊

不意に、風が吹いた。

長い茶色の髪が風に遊ぶ。その風を生み出すのは……彼。正確には彼の内から溢れる何か。それは異様な熱気。彼の怒りを表すようにそれは温度を上げていく。今が真夏とはいえ、こんな肌を焼くような風が吹くだろうか？彼の起こす風は自然界のそれとは違う、人為的な何かを感じさせる。

フォースはそんな友人を見ていた。見るしかできない。迂闊に近づけないのだ。相手がただの数術使いならまだしも、相手は剣も扱える。死角無しとはこのことだ。

（くそっ……）

対する自分とは言えば、全く呆れるしかない。借りた教会兵器。それもあの風の前には意味がない。水がないなら直接身体に触れなければならぬ。となれば接近戦を強いられる。慣れない武器は不意打ちには使えても、実用性はない。かといって、剣一本で戦える相手でもない。第一グライドの後方には彼率いる兵士の大群。俺一人でどうにか出来るわけがない。解決策はないのか？俺にも数術……可能性があると聞いたけど、見込みは薄いとも聞いた。才能のない俺が一朝一夕でどうこうできるものでもない。無い物ねだりだ。徒歩の人間ならまだしも……馬に乗っている奴なんか、どうすれば？身動きを取れずに固まっている俺を、グライドは笑った。

「フォース、君はさ……声随分低くなったよね」

「え？」

突然グライドはそんなことを言い出した。鼻で笑ったというよりは、自嘲の笑みに俺には見えた。

「何でもないよ。ちょっと羨ましいと思っただけさ」

羨ましい？グライドが俺を？そんなこと……何時もお前を羨んでいたのは俺の方なのに。

此方はどう動くか悩んでいたのに、その間彼はそんなことを思っていたのか？あまりの思考の相違に、隔たった長い壁、深い溝を感じた。

「さあ、祈りの時間だ！焼き焦がせフェスパアツァイト」

ぞわと、肌が鳥毛立つ。その言葉が引き金となり何か恐ろしい物が彼から湧き上がる。目には見えない。見えないが……彼は何かを飼っている。

その声に時が止まるように、俺は呆然と立ちすくむ。俺が今まで以上に動けないのはその迫力に押されたのもう一つ。彼の声に聞き惚れていた。

なんて綺麗な声。綺麗な歌声。その音が一つ一つ火を灯す。その旋律が炎を動かす道となる。

我に返った時にはもう遅い。空中には人魂のような無数の炎が浮いていて、何時でも好きなところに落ちて燃やす準備が整っている。

「エリアス様は向こうだ！他は殺して構わない！」
「待てっ！」

炎が木々を焼き倒し、俺の周りに道を拓いた。そんな俺は炎に囲まれ動けない。

（くそっ！あんな使い方あるのかよ！）

炎と風の合わせ技。燃やして切り倒し襲わせる。こっちは足下もおぼつかない。避けるので精一杯。その内にどんどん逃げ場を失っ

ていく。

逃げた奴らを助けに行くとか、そう思ってもその方向に行けば木に落し潰されて火達磨だ。何とか突破口を開こうにもロセツタから借りた銃には実弾しか入っていない。さっき使ったの電気の技はこの銃そのものの特性だ。弾切れになった後も戦えるようにこれにはそんな仕組みがあるらしい。

だけど今、実弾と電気でこの大群を止められるとは思えない。炎をどうにかすることも出来ない。俺が一步踏み出せば炎が俺に襲い来る。迷いの最中にも兵士達は俺を通り過ぎて逃がしたみんなを追いに行く。

（カードの力を使えば……）

俺は比較的幸運なカードだ。怖いけどそれを信じてみる？火に飛び込んでみてもすぐには死なない。燃える衣服を脱いで走りぬければ何とかなるか？そう考えた俺が衣服に手を掛けたときだった。炎がふつと俺から離れる。

炎操るグライドが俺に薄ら笑う。俺とまだ話し足りないんだろう。まだ、殺さないでくれたのだ。とても卑怯なことだけど、俺の勝算は多分そこにしかない。グライドの俺への甘さと認識の甘さとその優しさに……俺は勝機を見出した。

「以前君に見せたのは風の数術だったね」

そうだ。アルタニアで見たときは、グライドはアスカのように風の数術を使っていた。あれはグライド自身の力なのだと思っただけ……今のは違う。純血の数術使いがこんな大きな式、扱えるわけがない。それこそ……契約するか、祝福されるか精霊憑きでも無い限り。

「契約……したのか？」

グメーノリアで精霊を捕まえて来たと言うトーラののように、精霊との勝負に勝って？それともアスカのように親の七光りで祝福された？

「違うよ。憑かれたんだ」

「エルムと同じか」

「あんなゴミと一緒にしないでくれ。不愉快だ」

吐き捨てるようにグライドは言う。

「でもあいつはお前の仲間なんだろう？」

仲間をそんな風に言うなんて。そう思ったが彼は俺の言葉を否定する。

「あいつはヴァレスタ様が温情で生かしてやっているだけのゴミだ。自己修復の力があるから蹴っても殴っても壊れない。いたぶり甲斐があるから傍に置いていらっしやるだけ。それだけだ」

自分自身に言い聞かせるように、疑念を否定するようにグライドは頭振る。そんな負の感情に駆り立てられるよう、彼の周りの炎は勢いを増す。

こんなの飼ってたなんて聞いてない。しかも火の精霊だって？んな馬鹿な。タロックには風の元素、セネトレアには土の元素が集中しているってトーラが言っていた。だから火の元素を持つ強力な精霊はカーネフェルにしか存在しない。グライドが出会えるはずがない。

いつからなんだグライド。お前はいつから……？

「フォース、タロックにも炎の精霊はいるんだよ。だってタロック王が多くの村を焼いているじゃないか」

「……………」

確かにそうだ。狂王は火あぶりが好きだった。よくいろんな村を焼いたって話は聞くし、風の強い日には俺達の村まで火あぶりの臭いが届いたものだ。

しかしその言い方だと、タロックの頃からお前にそれが憑いていたみたいじゃないか。

「それがどうして、お前に憑いた？」

「僕の……俺の壊れているところが気に入ったんじゃないかな」

「壊れてる？お前が……？」

疑問符を浮かべた俺を、グライドは僅かに悲しそうな目で見た。わかって欲しい。わかって欲しくない。そんな矛盾がそこにある。

「憑いてるのは二年前から知ってたけど、会話が出来るようになったのはごく最近だよ」

知らなかっただけでそれ以前からいたんだろうと彼は苦笑し目を伏せた。壊れていたんだ。僕は元々。そんな風に彼は諦めたような笑みを浮かべる。

（違う……）

変わったんじゃない。知らなかったんだ、俺が。俺はいつもこいつの表面しか知らなくて、それが全てだと思い込んで決めつけて。

解ろうともしなかった。俺は一度だってこいつから悩み事を打ち明けられたことがない。俺が頼ってばかりだった。憧れるって言うことはその人を人としてちゃんと見てやれていないってことだったのに。

俺はアーヌルス様を、リフルさんを、カルノツフェルを人として見られるようになったけど、誰よりも傍にいたはずの相手のことを、ちゃんと見ていなかった。最低だ。

「グライド……」

今更彼に何が言える？何が届くだろう。目の奥から熱いものが込み上げてくる……そんな俺の背を思い切り踏みつける足があった。正確には飛んできた蹴りだ。吹っ飛ばされた俺は炎の包囲網から抜ける。抜けた瞬間熱さはなかった。俺の周りに水の膜が張り巡らされていったから。

「あんた馬鹿？馬っ鹿じゃないの？」

「そ、その声……ロセッタ!？」

痛む背を押さえながら俺が起き上がると、俺を吹っ飛ばした張本人がそこにいた。

「仕事に私情挟むんじゃ無いわよ」

「お、お前には言われたくねえよ!」

「うっさいへたれ!返しなさい!」

ロセッタは俺の足を蹴りながら、俺の手から教会兵器を奪い取る。ロセッタの姿を認めた途端、グライドの目付きが鋭くなる。その様子から本当に、混血が嫌いなんだと感じた。それは相手が幼なじみでも変わらない。もし後天性混血になったのが俺だったとしても

彼は今と同じ目で俺を見たのだろう。

「……まさかあんたまで精霊憑きだったとは思わなかったわ。前回は何？手加減でもしてくれたわけ？」

「……代償の問題だよ。僕は多大なる苦痛を支払った。支払っている。そして更に捧げよう」

「グライド！？」

何をするかと思いきや、グライドは剣で自らの腕を傷付ける。利き腕ではない方とはいえあれは……

（リフルさん……）

その戦い方は、リフルさんのそれみたいじゃないか。リフルさんは傷つけば傷つくほど武器を得る。不利が有利に、どんでん返しの大博打。グライドの戦闘スタイルはその類似型？

「フォース、ロセッタ。混血共と組してる君たちの方が数術には詳しいと思う。勿論数術代償のことは知っているだろう？」

「ええ」

当然ねとロセッタ。俺はトラがでっかい術使う前後は爆睡してる姿を思い出す。あれが数術代償。人によってその代償が違うとは聞いた。

「僕の痛みを糧として、フェスパア^{ツアイト}は力を増していく」

「フェスパア^{ツアイト}って言ったらあの夕暮れの炎？贖罪の火！？黄昏の^{フェスパア}聖炎？ちよっと、なんであんたがそんな有名な精霊持ってるのよ！？」

「え……？有名なの？」

首を傾げるグライドは俺より年上なのになんか可愛い。一瞬だけ此方へ向けられる敵意や殺意が和らいだようにさえ思う。だけど精霊のことは詳しくない俺にはよくわからないのは当然として、使役しているグライド自身もよく分かっていないとは。

俺と同じような気持ちになったのか、呆れるようなロセツタは自分のペースがグライドに乱されていることに苛立っているようだ。

「タロックじゃ知られてない話だけど、教会内部じゃ割と有名な話。有名なんてもんじゃすまない大精霊よ。エルムって言った？あの混血のガキなんかが連れてる悪魔なんかとは格が違う。初代狂王がカーネフェル遠征にて連れ帰ったものの、従えることが出来ずに手放したって伝説上の無精霊！」

専門用語多すぎてわけわかんねえ。黙ってそれを聞いているグライドは話しについて行けているみたいだけど俺は無理。頭痛がしてきた。

「元々精霊ってのは気難しくて人間嫌い。精霊数術はいくら才能あっても意味がない。トラってのがなかなか恵まれなかった、どうこう出来なかったのもその所為よ」

俺のために少し簡単にロセツタが説明してくれた。俺をどこまで馬鹿だと思ってるんだ。いや……有り難いけど。

「だけど無精霊なんて……一番相手選ぶ奴じゃない。才能有ればいいってもんでもないけど、素養の低い純血が扱えるようなもんじやないわよ。ましてやそんな数術代償……精霊から堕ちて悪魔化してる。そんなの憑けてたら術者だってろくな目には……」

その口ぶりからはロセツタは、まだグライドを案じる気持ちが見て取れた。俺にはあんなこと言う癖に、自分だって……

（そうか）

俺はロセツタのこともちゃんと見えていないのだ。こいつは口では立派なことは言うけど、俺と1歳しか変わらない女で……離れてる内に強くなったとか大人びたとか思ったけどそんなことはなくて、こいつも……まだガキなんだ。完全に割り切れてなんかいないんだ。

「フォース！ あんた前衛！ 私は調べ事しながら後方支援する！ 出来るだけ時間稼ぎなさい！」

「時間稼ぐ！？」

「出来ないって言うの？ やるまえから」

くそつ。それでもロセツタは俺を知っている。俺がどういう奴なのか。俺がどの程度昔と変わっていないのか。

俺はこいつにそんなことを言われて……引き下がる男じゃない。他の誰かなら逃げ出す、それでも……これは昔からの癖。売り言葉に買い言葉。条件反射で強気になる俺。

「や、やってやろうじゃねえか！」

そんな俺達のやり取りを、グライドは鼻で笑うかと思ったのだけど……少し寂しそうに俺達を見て微笑。

君たちは変わらないねとその目が言っているようで……俺の空元気が向かう先に迷いを見出す。どうしてお前はそんな悲しそうな目で俺達を見るんだ？

俺の目に気付いたのか、グライドは炎を遠ざけ消して俺の方へと

歩み寄る。鞘から抜き払われたまっすぐな剣。使い込まれているのかその刀身には何本物傷がある。

「……君が相手ならフェスパアツアイトは使わない。剣一本で勝負だフォース」

「グライド……」

「僕らを隔てたこの二年……どのくらい君が変わったのか、見せて貰おう！アルタニアにSuitに捧げた君の忠義を見せてくれ！」

「……………ああ」

多分言葉じゃ何も引き出せない。何も理解できない。俺がその痛みを知るには……この方法しかないんだろう。

アームルス様から頂いた、大事な俺の宝物。そして俺の罪の証。冬椿を俺は手に取った。俺の剣はグライドのそれより綺麗。卑怯な俺は専ら、剣より毒矢を使って来た。剣を使ったのは……カルノツフェルに負けて、グライドに負けて……剣での俺の勝率は著しく低い。どこまで食らいつけるだろう。こんな事ならアスカにしっかり教えて貰えば良かった。だけど無い物ねだりは出来ない。仕方ない。冬椿の鞘を抜く……

俺は俺のやり方で、俺に出来ることをする。

「やろう、グライド。とことんこれで」

＊

「フィルツアー君が王様で、リゼカ君が女王様で兄さんが僧侶辺り？」

「何を戯れ言を。俺が王に決まっておろう」

「あはははは！そりゃあないよ。だって兄さんが一番恐れてることはフィルツアー君が鍵じゃない」

「グライドが……？」

オルクスの問いに、ヴァレスタは疑問を抱く。チェスの勝負は中盤。こいつものりくらりとかなりやる。腹の探り合いも終わらない。息抜きに今度は俺が自ら茶を淹れる。

「兄さん僕のは？」

「一杯1000シエルな」

「金の亡者ー」

「冗談だ」

物事には飴と鞭が大事。程ほどに飴は必要と、俺は客人にも茶を与える。

「ふう、やっぱり兄さんお茶が一番美味しいよね。兄さんこんな仕事止めて茶ソムリエか喫茶店のマスターにでもなったら？」

「戯れ言を。そんな安っぽい商売、このヴァレスタ様には似合わないだろう？」

あくまで俺が狙うは玉座のみ。それ以外など興味はない。

王に必要なのは民ではない。心の底から信じられる忠臣、そして悪なる敵。

定期的に出没する敵を討つことで王の名声は上がる。その敵の悪名が高ければ高いほど良い。無論それを倒すためには臣下が必要。金で王を売るような者は駄目だ。俺のために金を集め、金にはなく俺に執着し、何があっても俺を裏切らない、強い臣下。

玉座は金で買えても、それは金では買えない。同じように金で俺が売られてはならない。それを防ぐために必要なのがそういう駒なのだ。

(グライド……)

あいつに俺の正体を打ち明けるタイミング。それを俺は悩んでいる。もつとだもつと。まだ心酔が足りない。俺が居なければ生きていけないくらいに心酔させる。そこまで行けば俺の正体を知ってももはやどうでも良くなるはず。

俺の全てを否定せずに肯定する才能。俺の周りで唯一その可能性があるのが彼なのだ。

ロイルやリィナは話にならない。カルノツフェルは用済みだ。

リゼカやリフル……混血などに認められても嬉しくなど無い。俺が認めて欲しいのは……純血相手に。あの誇りある少年に認められたいのだ俺は。

「それで？ いい加減吐け。グライドを何処へ飛ばした？」

「薄々感づいてるんじゃない？ あの子がちゃんと休日休む子に見える？」

「……貴様、グライドに何をした!？」

「短気は損気だよ兄さん。僕はちよつとあの子の力になってあげただけだよ。可愛いよねえ、兄さんのためにとっても健気で」

その一言で俺は察した。怒りのままに胸ぐらを掴み上げるが、オルクスは笑顔を絶やさない。

「僕はね、第五公の兵を彼に貸してあげて西の本拠地に飛ばしてあげただけ。あそこで手柄を立てれば兄さんにとってもプラスになるだろう？」

「本当にそれだけか？」

「んー……一つ数術を教えてあげたよ。以前教会の関係者が横流しにくれた機密の記された本なんだけど、僕には扱えない術があったね。だけど彼の声ならやれそうだ。音声数術のいろはは彼の

精霊にインストールしてあげたからねえ。面白いことになるかもしれないよ」

「余計なことを……グライドに何かあれば貴様を括り殺してやる」
「うん、そう言われると思ったからさあ、那由多王子の目玉一つ彼に貸してあげたんだ。あの触媒が有れば純血の彼でも凄い奇跡を起こせるよ」

「何!？」

この眼球マニアが一時でもそれを貸し出すとは。むしろそのことに俺は驚く。

「もう一つはちゃあんと保管して……ってないいいいいいいいい!?!
ないっ! 無いよお! 僕のとっておきいいいいいいいいいいいい!!」

「そういえばロイルの阿呆が出かける前にこの辺で何やらがさごそやっていたな。眠かったから止めなかったが」

慌てふためくオルクスに、俺は愚弟の活躍に内心ほくそ笑む。あの男はいつもそうだ。その気はなくともこうやって事態をかき回す。それが自分に被害が飛ぶ時は災難だが、他へと向けば役に立つ。御しがたい男だが、時折使えるから傍に置いておく価値はある。この小憎らしい男に一矢報いるカードを手に入れた。やるじゃないか、ロイル。後で肉でも買って褒めてやる。

「ぼ、僕としたことが! 眼球植え込み手術に向かった隙にロイル君そんなことをしてたのか! さ、流石はコートカード。並の幸運じゃないね」

「あれは勿論乱雑で、グライドも混血の一部を所持していると思えば粗末に扱うかもしれんな。貴様のとっておきもどうなることやら」

「失礼兄さん！僕は取り返してくるよ！万が一両方破損なんてことっ！あつたらとんでもないよ！！！」

珍しく本気で慌てた様子なオルクスは、数術用いて姿を消した。騒がしい部屋が一瞬で静まった。静寂は嫌いではないが最近は賑やかだったため、少々違和感を感じる。

「……………」

東を空けるわけにはいかない。俺まで西攻めに加わった隙に城に動かれては敵わない。事前に情報は流しておいたから、後は城がどう動くかだ。

考え込む俺の背に、扉を叩く音がする。入れと言え、混血狩りのメンバーだ。

「ヴァレスタ様、アルタニアからやって来たという客人が……如何なさいますか？」

「アルタニア……………」

その地で俺の知り合いなど数えるほど。あの男、生きていたか。いや……だがタイミングとしては悪くない。オルクスもない。上手く使えば伏兵として今後役立つ。

「通せ。彼は私の知人だ。呉々も丁重に扱え！」

「は、はい！仰せつかりました！」

暫く後、連れてこられた客人は……金髪青目の純血擬きの混血だ。俺は手下に下がるように伝え、鍵を掛け……防音結界を張る。

「無事だったかカルノツフェル。気が狂ったと聞いていたが？」

「その件はなんとかあったんだ。よく考えたら私は元々気狂いのようなものだしね」

はははと笑う男は以前と変わらずおかしいが、それがこの男の何時も通りだ。オルクスめ。俺を嵌めようと嘘の情報を流していたか。やはり信用出来ん。

あれは王になる気がないとはいえ、もう金儲けに興味がないと言っただけだ。……それは信用に値しない。奴の目的はどうにも不穏だ。

数術使いというのは商人以上にろくでもない。知的好奇心のためなら何だってする連中だ。金で操れる人間の方がまだ可愛げがあるというもの。あいつは最悪俺の目さえ狙っている？……そのために俺を失脚させる企てをしていると見るのが正しい。隙など与えてやるものか。お前財産ごと、お前の目も俺が売り捌いてやる。そのために……今はこいつを十二分に労う必要がある。

「よく帰った。しばらくはゆっくり休め。部屋を貸してやる」

「お言葉に甘えたいけど、今こそ貴方には私が必要かと思ったんだけど、違かったかな？西とやり合うと聞いてね。第三島から武器と防具を取り寄せたんだ。勿論目立たないよう沖に停泊させている。知らせを出せばすぐにでも……」

「それは有り難いが、些か遅かったな。せめて昨日にでも来てくれれば良かったのだが……」

そうだ。今日は東の戦力の大半は西へと向かっている。噂を聞いた阿呆共もぞくぞくとそれに続いているはずだ。そんな野蛮なところに俺は行けるか。万が一でも俺の正体が判明したら不味い。今日は午後から天候も怪しい。なるべく外には出たくない。雨に濡れれば髪の色が落ちるし俺はそこまで補助系の数術が得意ではない。集中力を乱されれば解けてしまう可能性もある。君子危うきに近寄ら

ず。危険な橋は渡れない。

渋る俺に、カルノツフェルはにたあと笑う。

「うん、そう言われるだろうと思って腕っ節の良い兵士達も乗せて来た。すぐにでも戦える、アルタニアの兵力だ」

「貴様……何を」

「彼らは私の権限で恋人家族を全員人質にして来た。勿論この戦の後は大量の金銭を与えると約束しているし、裏切れば人質殺すと言っている。まず間違はなく彼らは裏切らない」

「人質が逃げないと保証できるのか？」

「ああ、保証できるよ。私の命を賭けても良い」

やけに真剣な目をしているアルタニア公。以前の狂気はなりを潜めている。誠実ささえ感じる目。何を考えているのか、逆に見えなくなっている。

「何が望みだ？」

「殺人鬼 S u i t を貰い受けたい」

「何？」

予想だにしないその答えに俺は目を見開いた。この男は自身の姉にしか興味がない変態だ。その姉と勘違いしたが故、あの男に一時期興味を持ったが……それが何故今更？

「聞こえなかったかな……？それじゃあもう一度言うよ。私は……僕は那由多王子が欲しい。僕には、アルタニアには彼が必要だ」

真剣な顔つきで、カルノツフェルが俺を見る。そしてゆっくり膝を折り、手袋を外してみせる。

「未来のセネトレア王、取引しよう？僕にあの子をくれるなら……僕の兵と僕の力を貴方に捧げる」

「カードでもない人間が、何を……」

「カードじゃない？面白いことを言うんですね」

何も描かれていない手の甲を笑い飛ばす俺を、臣下希望者が嗤う。一瞬……その手に何かが浮かんた。そしてすぐに消える。

「僕はカードであり、カードではない」

「貴様……」

「僕は使える。それを理解してただけましたよね？ヴァレスタ様」

にっこりと、そいつは俺に決断を迫る。

「何人だって殺します。貴方を必ず王にしてみせる」

「っ……………」

待ち望んだ願い。それがすぐ傍まで見えてくる。この切り札は大きい。欲しい。オルクスなどに盗られて堪るか。

（だが……）

脳裏にちらつく影がある。あんな男のことなど俺は……何とも思っていない。金のなる木くらいにしか思っていない。だから平気だった。傷付けるのも、両目を奪うのも。

あんな醜くなった抜け殻が、まだ何かの役に立つのなら……交渉の道具になるのなら譲り渡して損はない。

俺の頭はすぐに正しい解を導き出す。しかし喉の奥に引っかかった小骨のような感覚が拭えない。何だ、これは？

「だからあの子を、僕にください」

その小骨が煩わしくて、それが拭い去れるのならばと俺は……その言葉に頷いた。骨はその瞬間に咽から肺の付近へ移動した。それが煩わしくて、仕方がなかった。

5.. Ut sementem feceris, ita metes.

> i 3 1 0 1 6 — 3 8 3 <

カラカラカラと、遠くで何かの回る音。それがどんどん遠離る。あれは車の車輪の音か。私から離れてどこか遠くへ駆けていく。馬車から落ちた私は地面にぶつかるともなく、ぽっかり空いた暗闇の底の底まで落ちていく。

……不意に、そんな想像が脳裏を巡る。何も見えないはずの暗闇の中、それでも私には見える景色があった。黒の中にも輪郭があり息づく者の気配があるのだ。

それに気付けば世界が変わる。ほんの少し明るくなった。鬱蒼と生い茂る木々の中、私は倒れていた。だけど明るくなったとは言っても妙だ。一言でその違和感を表すなら……色が無い。モノクロの影絵のような世界が広がる。森の木々なんて言ってもそれは枝も幹も木の葉も全部黒一色で表されている。別の色を探すなら、空高く……丸い月が浮かんでいる。それがこちらを見る誰かの目のようで些か居心地が悪い。その気味の悪い月。それだけが白い。

ここは、そこから発せられる光によって映し出される影の森。実体はない。だって、手を伸ばしても木々には触れられないのだ。正直な話私が今を疑えば、この足場さえ消え失せてしまうのでは？ そんな心許ない空間が今私がいる所。

影劇で使われるような人形だ。それがひよこひよこ現れる。その数全部で8体。全てが骸骨。その内半分が真っ白な骨。残り半分が黒塗りの骨。それが月の光に照らされて、影絵の森に佇んでいる。面白いことに白い奴らの影は黒。それはわかる。だけど黒い奴らの影は……無いのだ。彼らは踊るように不思議な足取り。私の傍まで近づいた。

「私に何か用か？」

尋ねてみると、少し驚いたように戸惑う素振りを見せる人形達。カタカタと骨を鳴らして顔を見合わせる人形達。

（か、可愛い……）

人形は小さいが良く見れば人骨に似た何か。それはそれはリアルな造形でとても可愛いとは言えた物ではないのだが……その思いも寄らぬ反応に、うっかり絆された。

落ち着け。落ち着け私。ちよっと抱き締めたくなったとかそんな駄目だ。私は毒人間だし……いや、あれは骨だし人形だし大丈夫？ いやでも間接とか外してしまったら可哀相だし。

「零の海で自我を保てる人間がいるとは……あれの言うことも全てが誤りではないと言うことか」

「……え？」

突然聞こえた声に振り返れば骨のような仮面を付けた1人の男がいる。彼は漆黒を纏う、黒いローブに黒い髪。見た目の迫力に反して、安らぎを感じるような不思議な声の持ち主だった。その声自体に聞き覚えはないのだけれど、何故か既視感を感じる響きがそこにはある。考え込んだ私に、その男性はあの人形達のように少し驚いているようだ。

「本来……通常の人間なら肉声を発することも自らの形を保つのも困難。名すら思い出せないはず……まして、自らの色をまだそこに刻むとは」

意味が分からなかったが、確認のために髪を解いてみれば……確

かにそれは白ではない。銀色だ。彼は黒にも白にも塗り潰されない私に疑問を抱いていたのか。

しかし彼の言葉は面白い。

「生憎、普通の人間とも呼べない身の上なのでな」

含み笑う私に、仮面の男は言葉を無くす。自虐ネタだったのだが滑ってしまったらしいなこれは。反応に困る仮面の男を見て、何故だろう……不思議と彼らやこの場所を恐ろしいとも思わないし懐かしいとさえ思う。

「11年……10年ぶりか」

「10年？」

「貴様は10年前までこの森にいたのだ」

「という私が仮死だった頃の話か」

男は妙なことを言う。

「それではここは死後の世界という訳か」

「あながち遠くはない」

「なるほど、それは驚いた。要するに貴方は本物の死神と言うわけだ」

「……………教会などにはそう呼ぶ者も居る」

「それではさしずめ……以前トーラが言っていた、神の審判の片割れだという零の神？」

確かトーラは、生を司る壺の神と死を司る零の神が神の審判を行っていると言っていた。

その死の神が目の前にいると言うことは……とうとう私は死んだのか。確かにあれはなかなか痛かった。ショック死しても仕方ない。

妙に納得する私を、彼は尚も不思議そうに眺めている。死して尚、観察されているという訳か。気恥ずかしい思いに駆られながら、生前のあんなこととかそんなところもぼつちり見られてたと思うと神を前にしてもその存在を否定したくなる。その心から目に映る存在を私の頭はなかなか信じようとしえない。恥の概念とは素晴らしいものだな。

「夢幻の中に現の記憶をそこまで持ち込めるとは……惜しい逸材だ。才さえ壺に奪われなかったのなら、貴様も神子に等しい位になれただろうに」

私を哀れむ響きを宿す男の言葉に、私が顔を上げると炎のように燃える彼の赤い眼は確かに私を哀れんでいた。

「哀れだな、眠り王子」

その声は心の底から私を哀れんでいた。

「壺に縛られ、救われることもなく今日まで生かされてきたのだろう。死こそ其方の救いだだろうに」

その言葉に、どくと胸が鳴る。思い出したかのように、私に鼓動を伝える。私はまだ死んでいないのか。

「まだ死なせて貰えないのか私は」

「そうでもない。其方が望めばそれも叶う。今の其方は幸福だ」

「……面白い話だな」

願いは何でも一つ叶うと謳いながら、カードになることで叶えられる願いも多い。いや、私の場合はそれまで叶うべき願いさえ遠ざ

けられていた。何者かの意味により。今はそこから逃れたから、私は再びここへ帰った。この男はそう言っているようではないか。

「死か……」

これまで何度も望んだ願い。唯こんなに簡単に死ねて良いのかとは甚だ疑問。私は償えたのだろうか。あの程度の痛みで。まだまだ足りなかったのでは。そう思う心もある。

（しかし……）

今更だ。死の誘惑は甘い。もう私はその淵へと腰まで浸かっている。無理をしてまで岸に上がる気がしないのだ。川の流れに逆らって、戻る意味がそこにはない。

私は無くしてしまった。守る者。守る場所。私を裁いてくれる人。非日常から逃げ出す相手もういない。トーラもラハイアもリアももう居ない。

生きれば生きるほど、過ちと後悔ばかりが増えていく。ああもつと早くに死んでいればこんなことにはならなかったとそんな思いばかりに支配されるのだ。

「生まれ出づる悩みも痛みも悲しみも、生まれさえねば生まれない」

私に何かを教えるように仮面が私を見ている。

「眠り王子よ、其方は刈り取ることを悪と言うが我はそうは思わん」

「……？」

「この世で最も罪深きは、生み出すこと。望まぬ生を与えること

だ」

殺しが罪ならば、何かを生み出すというのも同等以上の重み……罪を持つ。それくらい重いことなのだと彼は言う。人と交わることが罪なのではなく、新たに生み出すことが罪なのだと彼は言う。

「人殺しが殺されるべきならば、子を為した男と女もそうされるべきなのだ。生と死とは同じものなのだから。仮に生み出した彼らが裁かれないのなら、人殺しもまた罪にはならず、裁かれてはならない。仮に人殺しが罪ならば、彼らが裁かれないのは不公平で平等で理不尽だ」

生まれることを拒否する権利が赤子にあるのなら、私はそれを選んだろうか？ 選んだだろう。こんなことになるのと知っていたのなら誰が望むものか、こんな人生。

そんな嫌がる魂の声さえ聞かずにカラカラと紡ぎ車を紡ぐ女が居る。それこそが壱の神だと彼は言う。生まれること、生きること。生きていることが幸せになるための唯一の道なのだと信じて疑わず……世界に嘆きを振りまいている。

悪があるのなら、さあもつと人間を作りましょう。そうすればその人達が世界を変えてくれるでしょう。そんな人の善を信じて。

だけどそうではない。そうではないのだと零の神。辺りを見ると彼は言う。8体あった骨人形。いつしかみんな影が無く、4体あった白い人形も皆黒塗りに姿を変えている。世界は黒。生まれた時点での魂の色に限らず、須く人は世界に染まっていく。それを変えるためには数があっても無意味。世界自体を塗り替える、作り替える必要がある。

私には彼の言葉の方が正論のように聞こえる。ごくごく自然に、滅ぶべきなんだと私も納得をしてしまう。

あの現の何処に希望があるのか。もはや潰えた。どんな善人だっ

て世界の悪意の前に為す術もなく散らされる。信じるに足る物など地上の何処にも有りはしない。

「……どうしたら、私はここから本当の死に場所へと行けますか？」

「死を望むか眠り王子」

「死にたい理由は幾らでも。でも……生きたい理由がありません」

「ならば塔を目指せ」

「塔？」

彼は頷き片手で示す。その方向に骨人形達が一列に立ち並ぶ。その人形立ちの向こうに月明かりが差し込んで……これまで無かった一本の道を示した。この道の向こうに塔は有るという。

「全ての未練を捨てて、塔の最上階まで上るが良い………何故、笑う？」

話の途中で私の口元が笑んだのに気付いたのだろう。別に彼を笑ったわけではないと私は首を振る。

「てっきりどこかへ下るものかと思っていたので。まさか上るとは思わなかった……それだけです」

仮面の男へと一礼し、私は道へ踏み込んだ。そんな私の後ろでカタカタカタ。

示された道を辿る私の後ろを、骨を鳴らして付いてくる人形達。愉快な道連れだ。少し心を和ませながら歩みを遅めると、私を案内するよう一体が前へと進み出た。

暫く進むとその先に小川が道を遮る。人形はその水に飲まれて姿を消してしまった。

「おい、大丈夫か？」

慌てて助け出そうと私も河へと踏み込むも、人形の姿はない。代わり暗い小川が白く輝き出していく。

その光に飲まれると、景色は変わっていた。私の右目と左目……長途顔の真ん中から世界が二分されている。私は同時に二つの景色を見せられていた。まるで鏡合わせ。右と左が逆の世界。その住民達は私が見えていないのか、慌ただしくうろろしている。

そんな中1人だけ椅子に腰掛けどっかりと構えた長い黒髪の青年。彼は目を伏せ時を待っているようだ。

（あの……）

右と左の世界に言葉を投げてみるが……先程までとは違うのか、私の声は目の前の人々には伝わらない。発したはずの声も有耶無耶に何処かへ吸い込まれるよう消える。そんななか左右対称の世界で扉が開いた。

「！すでれま生お！王與須」「須與王！お生まれです！」

「かうそ……」「……そうか」

兵士に呼ばれた男は椅子より立ち上がる。

（須與王……だと！？）

言われてみれば……その室内の装飾品、建築様式……タロックのそれに似ている。

右の世界では笑顔の医師が、左の世界では沈痛そうな面持ちの医師が王を迎える。

（か、母様！）

若い。記憶の中の母より数歳若い。それでもその金髪と深い青色の目は忘れもしない。母様だ。出産での疲労で意識がもうろうとしているようだ。そんな妻の元へと駆け寄る王は、動かない赤子を見つけてしまう。

医師は王へ、双子だったが一方は死産だったことを伝える。僅かに沈んだ王も、もう一人いるのならと……顔を上げその子を求める。王の言葉に、助産婦が銀色の髪の子を抱えて連れてくる。

「すで子の男、らがな年残……様王」「王様！可愛い女の子ですよ」

左の世界では泣きそうな顔で顔を背けて壁へと拳を打ち付ける王。右の世界では満面の笑みで、その赤子を手に取り抱く王の姿。

（これは……）

「この娘は亜由多と名付けよう！マリー！お前に似て美人になるだろうな。今から将来が楽しみだ」

「貴方ったら……随分と気の早い」

右世界ではしゃぐ王に、母もクスリと笑う。

対照的に左の世界では、王はもう赤子を見向きもしない。歯ぎしりの後、吐き捨てる。

「なる怠を備準。るめ進くなり滞は件の例……。けおてけ付名もでと多由那はにれそ」

「?! かすでのるせな死でま子のこ……は子のこ！っなんそ」

無事に生まれた方の子供を死なせると言う男の言葉に、母は泣き叫ぶ。けれど王は振り返らない。それが決定だと言い残り部屋を後にする。

（那由多……）

それは私の名前だ。

右の世界では父は私だったかも知れない私を抱き上げ微笑んでいるのに。

その両者の落差に私は、力なくその場に蹲る。口から乾いた笑いが漏れた。涙が込み上げてくる。ズキと両目が痛んだ。

私の涙が川へと落ちたのか……それが合図となって二つの世界の幻が消えて……また静かな森に戻された。

川の中に屈む私を心配そうに7体の骨人形がカタカタ言っていた。

5. Ut sementem feceris, ita metes. (後事

死にかけ主人公。復活までまだ遠い。

6..Medice, curate ipsum!

河を渡る。その先にも影の森は続いている。

先程見たものに引き摺られているのか、足取りは重い。なんとなくだけれど、このまま進むことで私はまた……何度もあれを見せられるような気がする。骨人形達は私を心配しているようだけど、その意に反してその存在はその役割は……多分そう言うものなのだ。けれどそれを越えて行かなければ私は塔まで辿り着けない。

(そう……何も悪いことではないかもしれない)

あれはより私を絶望させて、生を手放すために背を押してくれる役割なのかも。私の未練を完全に断ち切るための。

「……未練だと?」

面白いお節介だな。私は苦笑。今更こんな私に何の未練が残っているというのだろうか。

私の前に立ち塞がるのは小さな池。泳げないことはなさそうだけれど、底は見えない。服でも脱ぐべきだろうか。悩んでいる内にまた一体……私を追い越し溺れて消える。

彼らの犠牲に報いるためにも後を追うしかないだろう。私が踏み込んだ瞬間、あの小川のように池が光り輝いた。

再び鏡合わせの二つの世界。成長した私と私の妹が隔てられた世界の彼方と此方に映る。まだ4, 5歳くらいだろうか。今からでは考えられないような喜怒哀楽の表情を次々と二人は見せる。そんな子供の世話をしている黒髪の男が1人。

(あれは洛叉か……)

眼鏡は掛けていないから、気付くのに遅れた。それにしても男と
いうのは間違いか、彼はまだ若い。十分、少年と言っても良い年頃
だ。

面白いことに右と左の世界のどちらでも、彼は同じように振る舞
っている。

彼もまた今の彼からは予想が付かないような素っ気ない態度。振
り回しているのは私の方。この頃の彼はまだ普通だったのか。いや
……それにしては見ていないようで私を見ている。私は観察されて
いる。

（なるほど、混血への興味はあったんだな）

昔からあの男は学者肌だったんだろう。そう思うと私の知る彼と
の共通点が見出せて、少し安心できた。

（……………ん？）

何か違う。二つの世界に初めて変化が生まれた。

右の世界では外で遊びたがる王女。その我が儘に従って、洛叉は
庭園へと出かけたようだ。がら空きになる右の世界。残された左の
世界では、同じ我が儘を言う王子に洛叉は「王子は身体が弱いので
すから駄目です」との一言で、それを切り捨てた。

（私は身体が弱かったのか？）

身に覚えがない。記憶にない。よくわからない。

「とつき、すませみてし治が私。すで夫丈大もで」

洛叉はその一言にだけ……妙な熱意を情熱をもって私に告げた。それが妙に洛叉なのに、洛叉らしくない。私が疑問を感じていると、部屋にやって来る老人。彼も白衣を着ている。彼が私の医者だろう。食事と薬を運んで来たらしい。

「ぞすで理料手の様ーリマは日今、様多由那」
「?! の様母」

はしゃいで駆けていく私。そわそわとしている。ああそうか。なかなか会えない母様が私のためにとしてくれたこと。嬉しくないはずがない。

だけど私の傍で洛叉は苦い顔になる。それに気付いたらしい医者。が黙っている。と視線で彼を睨み付ける。

何だ、この光景は。笑みながら箸を進める私は……やがて背中から倒れる。

「?! かのな者医もでれそは方貴」

洛叉が私を抱いて、老人を睨み付けていた。

「んえら逆はに令命」

老人は首を振って、気を失った私を静かに見下ろしていた。

＊

物事を確率と計算で考えるようになればもう、お終いだ。洛叉はそう考える。

混血という人種に関しては、確立をねじ曲げる力が作用している。それを理解して尚、確率と計算を考え始めれば、もうお終いだ。

一生かけてあの人の治療を行う。そして普通の人間に戻してやろうと思ったこともあった。そのための知識を俺に授けてくれるなら、神でも悪魔でも……プライドを捨てて崇めてやっても良い。そんな不条理を受け入れることも是とした。魔法や奇跡じゃない、人として俺が……あの人を人に戻してやりたかった。

しかし神という物は、その願いに期限と条件を設けた。俺が得たのはほんの少しの幸運と、これまで見えなかった数術という世界に触れる才。

しかしそれに対して俺の目的達成の難易度はあまりに困難。そしてそれは無意味な物になり果てた。あの人を治すという願いのために、あの人を殺さなければならぬというのは矛盾している。それとも一度手に掛けて？そこで普通の健康な身体として生き返らせる？そんなものは気に喰わん。それは俺が治した訳じゃない。第一、あの人はそんなことで喜びはしないだろう。

あの人の身近な人々もカードに選ばれた。その物達を手を掛けることはあの人の怒りを買うことになる。それ以前にあの人は言っていた。

（戦争は嫌だ。暗殺が良い……か）

俺はその訳を問うた。それにあの人は答えた。とても暗く悲しい目で……それなら失敗しても死ぬのは自分一人で済むと。狂王の子でありながら、父とは違う答えを見出した。

今もこうして我々を傍に置くことを、あの人は是とは思わない。だからこそ、いつも一人で暴走、何処かへ行ってしまうのだ。

（リフル様は、本当に困ったお方だ）

自分も決して弱くはない。剣も扱える。あの鳥頭にだって負ける気はしない。だと言うのに唯の一度もあの人の隣で、その背を守ら

せて貰えたことがないのだ。いつも手当ばかりを任されて……医者
の仕事は第一に傷付けないことだとも言うのだろうか、闇医者
の俺に？

アルムの診察、ディジットの治療。そして今度は第五公のご子息
の世話。金髪のカーネフェル人のその少年は、あの鳥頭などとは違
いそれは愛らしい少年ではあったが……

「洛叉、彼のことは食っては駄目だからな」

オルクスの魔の手から保護した大事な人質。それに手を出そう物
なら一気に此方の分が悪くなるとあの人は言う。城へと出向く前……
あの人は迷い鳥を去る前に、もう一度私に会いに来た。その別れ
の挨拶はとても酷い物だった。

那由多様は何処まで俺を信用していないのだろうか。あの鳥頭
にあることないこと吹き込まれたか。確かに俺は少年少女を愛して止
まないが、俺の愛はそこまで真っ直ぐな物ではない。おいそれと手
を出す物か。

「ご安心下さいリフル様。彼に手を出すような私なら、とうに俺
は貴方を食っていましたよ、タロック時代に」

「当時はまだそういう嗜好と性癖に目覚めていなかったのではな
いか？」

目覚めていなかったのは貴方の方でしょうに。再会した貴方がそ
んな風に物を語るようになるなんて、当時の俺は想像さえしていな
かった。多少影を背負っていたとはいえ無邪気も無邪気な貴方が、
そんな下ネタ猥談ばかりを口にする淫乱殺人鬼になり果てようとは
誰が予想していたか。

「兎に角だ！他の者に何かをするくらいなら私にしておけ。死な

ない程度に相手をしてやる」

そう言えばあの人がこれから出掛けるなんて微塵にも思わない。一番頭の回る俺を欺せれば、姿を眩ませたことが露見するのは遅れるだろう。本当に酷い人だ。

あの人はとても矛盾している。口ではあんな大きな事を言う癖に、内心ビクついていてちよつと触れればそれだけで身体が強張るのを知っている。治療の診察ですらそう。それでもその目は常に人を誘い、内心期待を抱いている。

奴隷時代に刻まれた屈辱と快楽。それが常に彼の中での鬨ぎ合いを行っている。毒を防ぐため、禁欲を気取る様な露出のない衣服に身を包んでおきながら、口から出るのはろくでもない猥談ばかり。そんな危うさこそ彼が人を惹き付ける魅力なのかも知れないと、最近では俺はそう思い始めた。完璧に見えて不完全。それが彼という人間だ。

邪気のない次期第五公の幼い瞳も、立ち去るあの人には何かの興味を抱いたようで、扉の向こうを見つめていた。

「あの人……」

「ああ、彼がリフル様です。フォースから聞いていますかエリアス様？」

「何処か怪我してるの？」

「何故そう思いましたか？」

「だって、痛そうな顔してた」

治せないのと尋ねられ、痛いところを突かれたと思った。彼を治せない俺には自分など治せないと思っっているのだろうこの子は。

「あの方は優しい人なんですよエリアス様。ですから貴方が治れば彼の痛みも和らぐでしょう」

「そうなの？」

「ええ、そうです」

最初はそう、あの子に言い聞かせるための言葉。それが何時しか俺にとつての言葉に変わっていた。どこかあの人に似た境遇。重ねていたのかも知れない。俺はあの人を治せない。治すだけの時間が無い。確率的に治せない。あの人をもそれを望まない。願いとはなるとも独りよがりなものだろう。俺はそんな自己満足のために、オルクスに毒されたエリアスという少年の治療を望んだ。

俺は知っていたのだ。あの人自身が治らなくとも、そのことを大いに喜んでくれるであろうと。

「……僕はどうせ治らないよ」

「いいえ、治ります。俺が治してみせます」

「でも……」

「フォースやアルムと外で遊んでみたいとは思いませんか？」

「そんなの無理だよ」

「無理ではありません。貴方が望むなら」

「……本当に、治してくれるの？」

「ええ、約束します」

「……じゃあ、僕は何をすればいい？」

「はい？」

「治療ってお金がかかるんでしょう？僕はお金を持っていないし、それにかわることをするのが……」

セネトレアという国で育った少年は、世の中の法則を良く理解していた。しかし無垢な少年は世の中に俺のような生き物がいることを知らなかった。

「お金なら必要ありません」

「でも」

「良いですかエリアス様。私は子供が大好きです。だから治療の対価は貴方の笑顔一つで十分です。それだけでも変態には過ぎたご褒美です」

「……へんたいって何？動物が成長過程で姿を変えること？」

「まだ貴方は知らなくて良いことですよ」

＊

「……………」

洛又は燃える砦を駆け下りる。ロセッタは後天性混血。あの素早さには付き合えない。

行く手を阻む炎も、数術を使えば恐るるに足らず。他のカードが上手く誘導したのか逃げ遅れなどには出会わない。そういう者は既に死体となっている。

埃沙を殺した。俺の妹だ。思ったほど衝撃がない。酷い兄だと思う。俺は安堵していた。あの方の前であんな殺しをしたならば、俺は今以上に嫌われてしまっただろう。

医者の名乗りながら人を殺す。だから俺は医者とは名乗れない。殺したのは久々だが……無感動。何も感じない。半分とはいえ血の繋がった相手だ。それを何とも思わない自分の薄情さが不思議でならない。結局の所、あの鳥頭から学んだつもりのものは俺を何も変えはしなかった。

「数値破り。あんたが何を願ったか知らないけど、あんたは勝ち残っても願いを叶えられないわ」

俺と別れる前、ロセッタはそんなことを言っていた。ルール上、上位カードが下位カードを殺すことはあってはならない。だが、時

と場合によっては出来なくもない。俺はそれを犯してしまったというわけだ。

「問題ないな。元々俺は神になど縋って叶えて貰う願いなど無い」
「じゃあなんであんなカードに……」

「願いはある。だがそれは俺の手で叶える。失格になろうとそれは変わらん。数値破りとやらになってもまだカードを殺すことは許されるのだろうか？」

「え、ええ……それはそうだけど」
「なら、何の問題もない」

俺が頷くと彼女は尚も何か俺に聞きたがったが状況が状況だ。先に行けと促した。

（願いはある？……馬鹿なことを）

正確には、願いはあった。だがもうない。だからあれで良い。

俺がすべきことは次期第五公エリアス様の護衛。リフル様から任せられた仕事であり……それだけではない、大事な仕事。あのままロセッタを1人にするわけには行かず、それは幸い効を成したが、この件については目を離したことは失策だった。脱出の際に確かめたが部屋には居ない。無事に逃げ出したようではある。

ディジットとアルムが気遣ってしてくれた様だからひとまずは安心……とも言っていられない。カードは一般人より幸運。その傍にいれば危ないことはないだろうと思いたいが、カードは同時に危険を呼ぶ。殺し合いの参加者なのだからその傍にいるのは一概に安全とも言えない。矛盾しているが早くその加勢に向かう必要がある。街には略奪者が溢れていたが、俺を追う者は居ない。単に俺が金にならない対象だから……というわけではなく、俺の視覚数術によるものだ。

急ぎ足で俺が迷い鳥を抜け山道に踏入ってしばらく……何者かの気配。待っていたのだろうか。その気配の主が現れる。

「先生！」

「アルム!？」

俺に抱き付いてきたのは薄桃色の髪の混血の少女。見れば彼女の後方には他の人間達の姿もある。俺より先に逃げただろう者達がまだこんな所にいるとは妙な話だ。状況を探るべく俺は俺の視覚数術を解き、エリアスを抱えるディジットに視線を向けた。

「先生!？」

俺の術を見抜いたのはアルムだけだったのか、俺が突然現れたように見えたらしくディジットは青い眼を見開いていた。それでも俺が尋ねれば、冷静さを取り戻す。

「何があったんだ？」

「山を登って下って王都を目指したつもりだったんだけど……多分数術使いに追われてる。何回行っても同じ道に戻されてしまうの」

「なるほど。視覚数術の中に方向感覚を失わせる術が働いているのか。そんなモノまであるとは数術は奥深い」

破るのは容易いが、これは踏み込んだ人間全てに作用する数式ならそれは追っ手にも同じ事。迂闊に破れば面倒なことになりかねない。

ディジットは元々一般人……数術の知識は無いに等しい。おまけに火属性。こういう地の数術を理解するのは難しい。アルムは水属性。相性は良いが、理解できるか破れるかは別の話。こういうのは天敵同士の方が向いているということか。

「こっちだ。付いて来い」

数値の気配。風の流れ。それを読み取り歩みを進める。最初は戸惑っていた者達も、景色が変わるにつれて歓声を上げる。

「す、凄い先生！」

「喜ぶのはまだ早い。裏町までまだ距離がある」

「そうそう。ちよつと警戒解くのが早いよね」

聞こえた声。それはオルクスの……！辺りを見回すが、奴の姿はない。まだ誰かに乗り移ったのか！？

「え、エリス君……？」

ディジットの負ぶる少年を見て、アルムが震えている。見ればエリ阿斯様の様子がおかしい。小気味よい笑い声。それは彼の口から漏れている。

「洛叉さん、貴方は医者という者に幻想を持ちすぎだよ。貴方だって大概あれな癖に」

「貴様……エリ阿斯様にまで！」

「この子は僕が弄ってたんだよ？こんな風に僕に適応させていないわけじゃないか」

オルクスは、治療と称してこの少年を改造していた！？いつでも憑依できるようよりしろとして自身とリンクさせていたのだ。将来この子が第五島を継げば、その口から借りて良いように操れる。それを知ったなら、彼は従順になるしかない。

貴方は病気じゃない。すぐに良くなる。治してみせる。そう告げ

た時の彼の反応。それはあの人のそれとは違かったけれど、私はあの頃の気持ちを思いだした。こんな俺に僅かに残った医者としての誇りを。

「き、きゃああ！ちよつ、何するのエリス君！こら！くすぐったっ……」

「んー……僕のベルジュローネほどじゃないけどお姉さんもなかなか良い胸してるね。でもこの反応……合格だ」

「……ええと、本当にどうしたの？」

胸を触られるというセクハラをされても、子供のすることだと怒る素振りを見せないディジット。怒って払い落とすくらいしてくれた方が今の場合有り難かったのだが……

「あー！エリス君狡い！アルムだって最近ディジットのおっぱい触らせて貰ってないのに！それはアルムのなんだよ！……片方なら譲っても良いけど両方は駄目ええ！」

「あのねアルム……私の胸の所有権はいつからあんたに移ったのよ。あんたもお母さんになるんだからいい加減乳離れしなさい」

「だって手からおっぱい細胞吸収してアルムのおおきくならなかなって」

駄目だ。この子発想が愉快過ぎる。子供は何を言い出すか解らないが彼女はそれを一回り越えている。

「ていうかあんたが私の胸揉むわ揉むわでこんななったんじゃないかって疑ってんのよ？あと胸肉増えても肩凝るしカップ上がると下着も可愛いのないしセールで買えないし金銭的にも馬鹿にならないんだから。エリス君も故郷から離れて寂しいのは解るけどあんまりこういうことは……」

「狡い！アルムも触るー！」

「いや、……アルム？デジット？あれはエリ阿斯様ではなくて……おい、聞いているか？」

何故こんな展開になる。俺だけではなくオルクス自身も戸惑っているようだ。この二人、こんな状況で真顔でふざけられるとは。本人達は至って真面目なのがまた困る。敵も味方も微妙な空気になると言うのに気付いていないのか。なんというシリアスブレイカー。

「まあ、いつまでも脱線されている訳にもいかないんでね」

「き、貴様っ……！何を！」

オルクスが空間転移で取り出すは、一本の注射器。脱線とセクハラを良いことにそれをデジットの首筋に気付かれないまま突き刺した。ここでようやくデジットも何かがおかしいと気付いたようで……身体を小刻みに震わせる。

「な、なんか……」

デジットの顔は赤く、次第に息が上がってきている。風邪でも引いた？いや違う。あの反応は……

洛叉がオルクスを睨めば、ご名答と言わんばかりの笑みで応える。

「僕もこう見えて向こうでは医者を名乗っていただけあってね、那由多王子の毒は色々調べさせて貰ったわけだよ」

「っ……貴様……！」

「彼の毒は素晴らしいね。ちよつと手を加えれば麻酔や解毒剤、それに強力な媚薬を作れる。まあ、副作用が大きいのが当面の問題かな。あの毒性さえ何とか出来れば素晴らしい代物だ。彼は鑑賞品ではなく愛玩動物でもなく実験材料として愛でるのが一番いいやり

方だ」

それは当然。あの人の体内にある毒は既に世界から失われた毒も数多く存在している。それを上手く抽出し、そこから研究を重ねれば様々な病への特効薬を生み出すことだって出来るはず。しかしその材料があの人 の 体液である以上、死なれた時点で供給源が絶たれる。あの人 が 生きる 償いを見出すとすれば、俺がそういう薬を作れた時だ。だがあの人の中にはあのトールでさえ把握できない毒物がある、そういう未知の探求。だからこそ時間がかかる。それでも時間さえあれば、必ずあの人 は 誰かを救える者になる。あの人 の 忌み嫌う毒で、人を救うことが出来るようになる。

あの人 の 毒は、そういう希望の箱だ。それをこの男は、再び絶望の淵へと変えようとしている。毒をもっと酷い毒薬にされ、それで仲間を殺されたりなどしてみる！あの人 が どんなに悲しむか！

「くそっ……」

「悔しい？へえ、自分の妹を手にかけても何とも思わなかった貴方がそんな顔をするんだ」

でもそれは誰のため？オルクスが笑う。リフル？ディジット？それともエリアス？

元のエリアスの少年らしい愛らしさなど微塵も残さぬ歪んだ笑みを浮かべるオルクス。今すぐ黙らせてやりたいが、これでは手を出せない。

（あれはエリアス様だ）

「貴方はさ、那由多王子を治せなかったことに後悔がある。だからその那由多王子に任されたこの子は絶対に医者として治してやりたいと思ってしまう。昔の彼を重ねてしまう」

動けない俺を見て、本当に奴は嬉しそうに笑う。この俺を陥れたことを純粹に喜んでいるのだ。

「そうなることを見越した上で、僕が彼を乗っ取るとは思わなかった？この子は僕の患者だよ。心の奥の奥まで脳の奥深くまで僕がたっぷり弄ってあげている」

先程と同じように撃退出来るわけがない。自分の身の安全を確信して後は高みの見物を希望するオルクス。その様子に嫌な予感がひしひしと忍ぶ寄る。

リフル様の毒を用いての攻撃。それを加工した物のようだから毒性は落ちている。しかしゼロには成り得ない。手持ちの解毒剤で治療しきれるかも怪しい。ゼクヴェンツは解毒剤としては優秀だが、毒性は強い。毒に冒された人間の治療だけなら良い。

(しかし……)

ディジットはまだ病み上がりだ。大怪我をしたばかり。それを表面上は数術で回復して貰ったが、それは身体に負担を掛ける。無理をさせ傷を塞いでいるようなもの。今の彼女の身体……その体力、免疫力共に低下している。

場の流れが変わってきたのに流石のアルムも気付き出し、大好きなディジットを傷付けたらしい相手を噛み付くように睨む。

「ディジットに何したの！？エリス君っ！」

「いっつもおっかないへたれナイトに守られてた貴女は、男を知らない貴女は当然こんな媚薬を使われたこともないだろう？そっちのませた子とは違って生娘なんだから」

反応の確認とはそういうことか。あのセクハラは厳選していたのだ。ターゲットとして意味を成すかを。

「その症状は今までみたいに走って逃げるなんて許さない。足手纏いになる。症状を沈めるにはやるしかない。だけどあくまで一時的な物だ。ついでに毒性を快感から出る脳内物質に結びつけた。放って置いても毒で死ぬ。治療しようにも毒で死ぬ」

耳元で囁かれた死の宣告に、赤いデジタルの顔が一気に青ざめる。必要最低限の治療器具しか携帯していない。俺もカードだ。他の女子供よりは戦える。だからこそ、治療よりも戦闘を重視した装備をしていた。それが最悪の決め手だった。

「さあ、洛又先生？天才って呼ばれた医者の方なら彼女をどうするんだい？彼女の心を救うには、どっちの治療をするんだい？ねえ、店主さん？不可抗力でラッキーって考える？最後に惚れた男に相手をして貰えるかもしれないんだからさあ！」

そんな言葉を最後に、ふらっと倒れるオルクス。起き上がれば何が起こったのか解らないといった顔のエリアスがそこにいる。

彼は守らなければならない。それでもまたいつオルクスになるかも解らない。今は一刻も早くこの場から逃げなければならない。俺がデジタルを背負うのはまだいい。しかし……

「アルム」

「先生？」

洛又はその場にしゃがみ込み、アルムと目を合わせる。

「エリアスは病気だ。ああやって悪い奴に乗っ取られる病気にか

かっている」

「先生、治せないの？」

「アルム、君なら治せる」

「私なら……？」

「彼は君の友達だろう？」

「……うん」

「ならさっきみたいなのが あったら、しっかり彼を呼んであげてくれ。君の声ならきつと届く」

立ち上がり最後に彼女の頭を撫でて、数術で彼女に逃げ道の情報を送り込む。

「う、うわあっ！ え、何？」

「その道の通りに行けばいい。数術使いは君だけなんだ。この人達を守るのは君だけだ。しっかり西裏町まで逃げろ。そしてT O R A 本社に逃げ込め、いいな？」

「でも、先生とデジタルは？」

「彼女は俺が治して追いかける。だから先に行ってくれ」

心配そうに此方を振り返るアルムに、強く頷けば彼女も頷き返す。遠離る足音は、出会った頃の彼女よりも重い。それを成長と呼んでも良いのなら、それをそう呼んであげたいと俺は思う。

「立てるか？」

「え、ええ……」

肩を貸しデジタルを立たせて、洛叉は周りを探る。他の追っ手が来る前に何処か廃屋か山小屋かを見つけなければ。数術を使って周りの情報を即座に集める。……あった！

「しばらく進めば休めそうな場所がある。そこまで耐えてくれ」
「……………」

ディジットは何か思い悩んだ様子のまま、曖昧に頷く。

「先生……私を置いてあの子達の所に」

「……断る」

「でもあの子達が心配よ。アルムを一人にするなんて……エリアス君だってあんな調子じゃ……」

「君はこんな時も誰かの心配か！？馬鹿がっ！今は自分の身を案じろ！」

勝手に口から零れた言葉。それに目を見開いた後、くすと彼女は笑う。

「……？」

「いいえ、何でもないの」

なんでもないわと、ディジットはもう一度だけ繰り返す。そして何だか懐かしいわねと彼女は笑う。

「懐かしい？」

「だって、本当不思議なのよ。だって信じられる？最初に先生と二人っきりになったのって私が人質で、先生が立て籠もり犯だった時じゃない」

「……………」

彼女は笑っているがそんな思い出ったことを思い出し、彼女に頭が上がりなくなる。出会ったときから助けられていたのは自分だった。俺はこの娘に何か一つでも恩返しをしたか？いや……エルム

とアルムを引き離し、対立させる原因を作ったのは俺だ。それを一度として彼女が責めただろうか？俺は本当にいつも、彼女の好意に甘えていた。

言い返せない俺に、彼女は尚も昔を懐かしむ。それがどうしようもなく嫌だった。こんな時くらい弱音を吐いて欲しかった。そうすれば俺が医者だ。死なせない。そう言い放つことが出来るのに。それがどんなに難しくても、そう言うのに……それが不可能だと知っているから彼女はそれを言わせない言い回しを企むのだ。俺などより余程頭が切れる。いや、人の心が解るのだ。人を人とも思わずに生きて来た俺をも彼女は人として見るのだから。

「だから不思議だなんて。あの時は先生がこんな人だなんて思わなかったから」

「こんな人……とは何だ？」

「お医者様なのね、そう思っただけよ」

＊

その少女は俺よりも6つも年下だった。それは奇しくもあの人と同じ年齢だった。まず最初に殺せなかったのは、その共通点だろう。あの人も生きていれば……そんな風に思った。

「どうぞ、紅茶しかないけど」

事もあるうにその少女は、立て籠もり犯に茶を淹れる。命令されただでもないというのに。

「緑茶以外俺は茶とは認めん」

「それなら青と黄色の着色料入れて魔緑にしてやろうか」

あまつさえ笑顔で脅しに来た。

「別に毒も睡眠薬も入ってないわよ。ぼったくりの料金請求もしないから安心しなさい」

そう言っって俺の隣のカウンターに腰掛けて、自分も茶を啜り始める。

「でも聖十字に追われるなんて貴方一体何したの？」

「人を殺した」

「へえ」

「……怖くないのか？」

脅える様子はない。人殺しの傍にいて何とも思わない子供がいるか？

「だってよくあることよ。セネトレアだし。それに人はみんな遅かれ早かれ死ぬじゃない」

それが恐れる事かしら？少女は首を傾げていた。

「もし仮に貴方が本当に酷いことをしたのなら私は貴方を恐怖しない。だけど軽蔑する。唯それだけ」

怖がらせたくて人に恐れられるようなことをしている奴を怖がってやるなんて絶対に嫌と、そんな姿勢が垣間見える。

「唯あいつらに追われる位の悪人にしては普通に見えたから、一体何をしたのかしらと思っただけよ」

「……………」

「ノーコメントってわけ？」

「君に話す意味を見出せない」

「あっそ！ならいいわ！徹底抗戦！私を人質にしたいならそれでもいいわよ。だけどここは私の店。ここに踏み込んだ以上貴方は、あんたは客！それ以上でも以下でもないのよ！」

店主が客に脅えてどうするのよと少女は意地を張る。

「リピーターになりたいって思わせるくらい美味しい料理食べさせてやるんだから！覚悟してなさい！」

あくまでその少女は俺を犯罪者と認めない。

「通報しないのか？金が手に入るぞ」

「あのね、言ったでしょ？」

指を此方に突きつけて彼女は言う。

「貴方は客！客の身の安全を守るのは店主の務め！当然の義務！貴方が他のうちの客殺したりでもない限り貴方も客よ。幸い今日は誰も客がいなくて良かったわ」

「こんな小娘が店主とは、大丈夫なのかこの店は」

俺が金目当ての強盗でなくて良かったなと告げれば、少女は短気にも激昂。

「し、失礼ね！そりゃあ、あの男がいなくなってから客も減ったけど！これでも持ち直して来てるんだから！」

おかしな少女だ。本能的に生きる道を察知しての行動？それとも

それは計算された言葉？ いや違う。思ったままにそうしている。この少女は本当に俺を聖十字に突き出す気がないのだ。

「……………」

それは僅かな興味だった。

タロックからセネトレアという国に逃れて数年が経つ。人間が如何に醜悪なものかを深く理解した。だからそんな醜悪な国にある、不思議なこの少女の正体を暴いてみたいと思った。取り繕っているだけだろう。どうせこれもあの人とは違う。所詮は人間だ。それを確かめたかった。だから俺は口を開いた。

「……俺は医者だ。今は闇医者だが」

「お医者様？」

「救いたい人がいたが、救えなかった。王の怒りに触れて国を追われた。それだけならまだ良いのだが、他国の国家機密にも関わっているとして聖十字からもあること無いこと罪状を作られて追われたのが気に入らなかつたので、とりあえずその罪状全てを現実にしてやったまで」

「へえ」

「今度はそれが気に入らなかつたらしくますます追っ手が増えた。唯それだけのことだ」

「あんなに真面目に仕事する聖十字、初めて見たわ」

「俺にはかなりの懸賞金が付いているからな。それが目当てなのだろう」

「ふうん」

「それでまだ通報しないのか？」

「疑り深いわねあんた」

呆れた視線を送られる。その後彼女は吹き出し笑う。

「そんなことよりメニュー見なさいよ」

「これはセネトレアにしては随分と良心的な値段だな」

「解った？金儲けがしたいならもっと値段上げれば良いだけ。そこまで私は金儲けに興味がないのよ」

「……………なるほど」

「唯、うちに居座るのはいいけど、一応うち店やってんのよ。この1階占めされると仕事が出来なくて困るの。そういう営業妨害は困るから地下に移動して貰えると助かるわ。あっちは今空き部屋だし」

「君は俺を匿うと？」

「だって殺されるよりはマシだもの。私はどうでも良いけどこれから買い物に行ってる私の弟と妹が帰ってくるの。あの子達まで人質にされたら堪らないもの。その辺で手を打って貰えると嬉しいんだけど」

信用に値するかは解らない。口先だけでこの場を凌ぎ、後は通報する可能性はある。しかしこの少女は俺の疑い、その推測の域を越える可能性がなきにしもあらず。俺はその可能性に興味を持った。裏切られるならそれはそれで構わない。ついでに前科がまた一つ増えるだけ。

久々に面白い人間に出会った。観察対象にでもしてみよう。そう思っただけであの店には、次々に面白い人間が増えていった。混血の双子に、セネトレア王子、かと思えばあの腐れ鳥頭のような馬鹿もいた。そしてあの店は再び俺とあの人を巡り合わせてくれた。

あの日の気紛れ。俺があの子に興味を持たず、すぐに殺していたならば……俺がリフル様と再会することは無かったのかも知れない。

不思議な物だ。混血と、カーネフェル人、タロック人……それがあの店では普通に共存出来ていた。それを壊した原因の一つは俺の

好奇心にある。俺は恩を仇で返した。己の知的好奇心のために、アルムとエルムを引き裂いた。満足かと問われれば、満足だと俺は言うだろう。

「……くそっ」

過去を懐かしむ暇など無い。解っているが単純な数術などでは解毒出来ないほどあの人の毒は奥深い。持ち歩いている薬品と毒、それを弄って何とか解毒剤を作れないかと試してみるが、俺はオルクス程人の脳が見えない。数術に触れてきた時間の差は歴然だ。

オルクスがあのような回りくどい手を打って来たのを察するに、あいつは俺達よりも弱いカードだ。そう、だからあの攻撃でディジツトは死なない。いや、そうとも限らない。奴はカード破りの存在を知った。しかしそのリスクは知らない。その禁に触れるため、それを調べるためにこの手を打った可能性がある。つまりこれは奴の実験。ディジツトが死ぬか死なないかを試している。俺の足掻きも、俺の諦観も計算で導き組み込もうとするその愚かさ。

（屑がっ……!）

自身の不甲斐なさを噛み締める。そんな色を察してか、古びた寝台に横たわるディジツトが俺を仰ぎ見た。

「先生……リフルの毒………ゼクヴェンツ、持ってるわよね？」

「ディジツト？」

「ううん、ドタバタしてたから持っていないならそれでも良いの。……私も持ってる。ほら、何時だったか S u i t に入りたいって連中が増えた時期があったでしょ？」

……増えたと言うよりあれは東と西に暗黙の不可侵協定が結ばれ

た、が正しい。リフルとヴァレスタ、西と東の影の支配者が共に相打ち、死亡したとの情報が飛び交った。となればまだトーラが健在の西を恐れる連中は多い。殺人鬼S u i tを飼っていたのがトーラだと露見した所為もある。あれだけの殺人鬼を飼い慣らしたセネトレアの魔女のこと。まだ彼女は隠し球を持っている、だから西は安全。そういう認識が広まったのだろう。

「そう、半年前よ。リフルに代わってトーラに取り入りたいって奴とか、身の安全を求めて庇護を得るためお近づきになりたいって奴とか」

そうだ、あれから西に逃げ込む奴隷達が増えた。それが理想だった。助けを待つという受け身だけではリフル様達の仕事はいつまで経っても終わらない。西裏町を安全地帯とすることで、自ら逃げ出して来てくれる者が現れる。その大脱走が成功すれば、次々にそれを倣う者が現れる。これには奴隷商達も業を煮やしたはずだ。しかし死体の見つからないS u i t怖さから、それを奴隷商達が出来ない。追ったとしてもセネトレアの魔女お抱えの暗殺者達がそれを葬る。そこからまだS u i tの意思を継ぐ者の存在を臭わせた。あの人の不確かな死は、一時的に西をに秩序をもたらしただ。裏の奴隷商達を束ねる請負組織g i m m i c kの頭とやりあったのだ。奴隷達にとって殺人鬼S u i tは救世主であると大々的に知れ渡ったとも言える。

トーラも迷い鳥というアジトを守るために優秀な人材を必要としていた。リフル様もそう。これからもっと大きな仕事をするためには協力者が必要だった。だからその見込みがありそうな者にはコンタクトが取れるようにS u i tの手がかりを残した。それがリフル様の血を薄めた毒水。香水のように仄かに香るその小瓶は、人を殺めるほどではないが昏倒させる程度に俺が調合した物だ。それに着色料やら葡萄酒やら混ぜて、薄まったそれに元の色合いを取り戻さ

せる。

仲間入りを申し出る輩にはそれを差し出し、飲む勇気があるなら
トーラの所まで案内すると告げるのだ。

ディジットもその選別役を任されていた。だから毒の瓶は持っていた。それを思い出したのだろう、彼女は首から服の中へと提げていた小さな小瓶を手にとった。

「解毒できるとすれば多分、これしかないわ」

「……しかし」

この量で足りるかは怪しい。それに彼女の身体が保つかどうか……

「私が食らった毒って、先生が見たこと無い毒なんでしょ？ つまりリフルはそれだけ危険な状況にあるって事」

熱に浮かされながら、それでもディジットは自らの見解を述べる。
一通り摂取できる毒に関しては、俺は調べさせて貰った。調べ漏れがあるとすれば……あの人の身体を解体でもしなければ見つからないようなものだけ。そう、言われて気付く。これはオルクスの加工だけじゃない。俺が解らないのはこれまで俺が分析したことのない毒だから。

「ならばゼクヴェンツで解毒できる保証もない」

確かにゼクヴェンツは多くの毒を含む。故にそれを相殺する力を持つ毒。だからこそ紙一重。解毒は確かになるだろう。相殺よりもゼクヴェンツ側が上回れば解毒薬が毒薬に代わる。

「そんな危険を冒すくらいなら、この毒の解析を行う方が賢明だ」
「あのね……私ね、ちょっと前まで貴方のことが好きだった。面

白い人だっと思ってた」

返される言葉は過去形の告白。それは俺に想いを伝えるのが目的ではないと知れるし、気付いていたとはいえ、この状況だ。戸惑いもする。

「と……突然何を」

「だけど貴方はアスカと同じよ。あの子を見ている。貴方はそう言う人なのよ。素直に見えて素直じゃなくて、器用に見えてとても不器用。……私もリフルのことは好きよ。だから踏ん切りも付いた」

じっと此方を見上げる青はそこに決意を宿している。それはその場凌ぎの治療を、望む目ではなかった。

「エリス君はアルムが守るわ。あの子はもう子供じゃない。立派な数術使いよ。私なんかよりずっと強い。それに……私が一番に考えなきゃいけないこと、考えたの」

「……一番に、考えること？」

「アルムはもう私は必要ない。自分の足で歩いていける。あの子達に置いて行かれるのは私の方よ。そうなって初めて解ったことがある。私はね、もう一回エルムとちゃんと話をしないといけないの。あの子もここに来ている。来ないはずがないわ」

「ならば、尚のこと……俺は」

エルムは殺しに来るはずだ。アルムを。そして他の誰かに殺されるくらいなら、ディジットをその手に掛けたいと願うはず。

「先生、貴方はリフルを助けに行つてあげて。それが貴方が一番今、やりたい事よ。こんな所にては駄目」

「だが……」

「私はあの子の毒を信じる。きっと大丈夫。あんなに優しいリフルだもの、私を殺しはしないわ。……流石に一人で飲む勇氣はなかった。ついてきてくれてありがとう。だけでもう大丈夫。ここならしばらく気絶してても大丈夫でしょ？」

そう言っでディジットは、微笑みながら毒を飲む。

「私が起きた時、先生がまだ傍にいたならぶん殴って軽蔑するか」

そんな物騒な言葉と満面の笑みを残し、彼女はゆっくり目を閉じる。毒と毒が戦いを始めている。その決着がどうなるのかは解らない。

（リフル様……）

ここから去れば貴方は俺を軽蔑するか。

「すみません、那由多様」

それでも俺は……また貴方を助けられないことの方がずっと耐えられない。

小屋一帯を数術で人目に付かないようにする。そして数術の気配を限りなく殺す数式を描く。これが今できるせめてもの……

「……ディジット、俺は君に……貴女に感謝する」

ああ、そうだな。俺も貴女を嫌ってはいなかったよ。長らく興味を持っていた。計算で割に合わないことをする、貴女に興味を持っていた。

(それでも……)

俺にとってあの人は、研究対象などという言葉では計り知れない、大きな存在で。悔しいが、俺は彼女の言うように……あの鳥頭と同じ物なのだ。俺にとって大事なのはあの人の命令ではなく、あの人の心だ。俺は愚かになりたくなくそこから逃げた。だが、俺は愚かだ。それを今認めよう。

邪眼に弄ばれるのが嫌だった。それは俺の心だと信じたかった。だから以前に増して美しくなったあの人を美しいと思うことが嫌だった。それでもあの人は、本当に美しくなった。あの頃以上に、その心が。魅せられて当然だ。それを受け入れるまで、一年半も掛かった。

(リフル様……待っていてください)

俺が貴方を助け出す。その後は幻滅されようと見下されようと、軽蔑されようと俺にとってはご褒美です。あの人の俺を蔑む目？ぞくぞくするじゃないか。

そうだ、何でも良い。貴方が生きてさえいてくれるなら……俺は。

*

池の中に人形一体、深く沈んでまた消えた。それと同時にリフルが見ていた映像も、そこで途切れる。

「洛叉……」

悔しそうな彼の顔。薬と言われ毒を飲ませられている私を、救えない自分。王の命令に従いそんな処方を施す師。何もかも許せない

と彼の漆黒の目が語る。

「私は……」

私は忘れていた。こんなにも彼が私を大切にしてくれていたこと。

「先生っ……洛叉っ」

思わず、来た道を振り返る。けれどそこには道がない。一度進むと決めた以上、引き返せない。そんな暗黙の了解をこの闇は私に迫る。

「私は……私は馬鹿だ」

どうして私はもっと彼を信頼してやらなかったのだろう。誰よりも昔から……私の傍にいてくれた人。私の他人行儀な態度。それが彼が東に行った発端の一つだったのだ。研究のためとか、埃沙のためとか、それだけじゃない。彼は私の態度が許せなかったんだ。

私をもっと彼を大切にしていたら、こんなことにはならなかった。ディジットの店はあの日と変わらぬまま、今日そこにあっただろう。そう思うと膝が折れ、水面に顔が触れる。気が付けば、池は足が着くほど水位は低くなり、しまいには干上がって残されるのは道ばかり。先を進めと私に促す。

この先に何が待っているのか解らない。それでも立ち止まることは許されていない、それがなんとなく解った。

骨人形達は、私の周りをカラカラ音を立てながら回って踊る。励まそうとしてくれているのだろうか。

私はこれまで何度も死を望んできたけれど、未練というのはこういう事なんだろう。もっと言いたいことがあって、言えなくなること。未練なんかないと思っただけでも、私の忘れた記憶の中に、私の

未練は眠っていたのだ。

「俺は、約束さえ守れない」……か」

最後に子供の姿の洛叉がそう叫んでいた。城の中では臣下という身分。だから友達にはなれない。そう断る彼に、私はそうだ、言っただ。外に出られるようになったら友達になってくれる？と。そうして約束、指切りをした。

「ごめん……ごめんっ……洛叉」

破ったのは私だ。外で再び出会ったのに、私は約束を思い出せず、彼を友とも呼ばなかった。酷い裏切りだ。裏切ったのは私の方だ。

私が彼を、みんなのように先生と……呼び度彼は、傷ついていた。それならもっと呼んであげれば良かった。彼の名前を。

大好きな、大好きだった遊び相手。はじめての、私の友達。そして……多分もう、呼べない人。私の未練。

7::Ubi spiritus est cantus est.

(前書き)

少し注意回。

7: **Ubi spiritus est cantus est.**

8体あった骨人形。白黒消えて、今は6体。カタカタと骨を揺らしながらリフルに着いて来る。森を進む内に、辺りは岩肌の露出する山道になっていく。

これは現実ではないからなのか、余り体力には自信がないリフルも疲れを感じることはない。それでも足が重くなるのは、後ろ髪を引かれるような思いがあるからだ。

(父様……洛叉……)

これまでのパターンから、どうせまた水場に差し掛かったらだろう。そう……油断していた。

「!？」

突然前方からの落石。避けきれず潰れた人形が一つ。岩が通り過ぎれば押しつぶされた人形は影も形も消えている。代わりに今度は岩肌に、地中から照らし出される景色がある。

そこに映る黒い影。黒い衣服に身を包むその小さな影は少年のそれ。しかしそれはすぐに大きくなって私の背丈を超えていく。

「フォース!？」

黒と呼ぶには僅かに明るい灰色の髪と目の少年。彼は私が可愛がっている弟分だ。

これまで見せられてきたものと違うところと言えば、映像が二つ無い。なるほど、私が女だったら私は殺されなかった、奴隷にもならなかった、殺人鬼にもならない。だから、私とフォースは出会わ

ない。

元々彼は農民の子だ。私が普通に王族をしていたならば出会うことがなかった相手。

(……フォース)

はじめてだ。この道を歩いてきて初めて、私は私が私で良かったと思った。忘れもしない。彼との出会い。フォースとの出会いがあったからこそ今の私がいる。私が殺人鬼から暗殺者への転身考えたのは彼のお陰だ。

彼は奴隷だった。混血の私とは違う。そういう奴隷じゃない。可愛がられるための奴隷ではない。

タロック人の男は幾らでも産まれる。だから奴隷としての価値はないに等しい。労働力としての使い捨て。そうやって食い潰されるために、消費されるためのシステム。それに一枚噛んでいるのが私の父であるタロック王、狂王……須臾。

「私は……」

未練などもう何も。そう言った。けれど、私の足は再び重くなる。だってまだ何も解決していない。私は父様を殺せていない。止められていない。なのに私は死に向かってい歩いている。

「アーヌルス様！」

その風景の中には私の知らない男の姿。それを追いかけるあの子がいる。

最初は強張った顔。それがどんどん親しみに満ちていく。恐怖が親愛に勝っていく。あの子の悪い癖。

「ニクス、またお前の一番多くを狩ってきたようだな」

「はい」

「それで、今度はどんな罠に掛けたのだ？」

少年は嬉々として自らの悪意を語る。私の知らない顔。

(……あ、あああ………)

これは過去だ。私が彼と離れていた間の過去だ。だけどその中で彼は、私の知らない顔をする。人殺しの顔だ。あんな普通の少年を、人殺しに仕立て上げたのは……私だ。私と出会わなければ彼は、こんな事には。

*

フォースが思い出すのは、見つめる死。今は誰が友達とか、大切だとか、そんなことは忘れる。これに破れれば俺は死ぬ。グライドは既に一度、俺を殺しかけた。トーラとリフルさんの力がなければ俺はもう死んでいた。どんなに取り繕ったところで俺はガキだ。死ぬのが怖い。嗚呼、物凄く怖い。その怯えと弱さこそが、俺の本質。俺が今まで生き延びられた、俺の力。

だからこの剣に込める。この二年、俺が吸収して来たすべて。

剣を扱う素早さは彼。足の速さは俺。純粹な力は俺が勝ってる。

だが油断は出来ない。彼は数術使いだ。追い詰められれば必ず数術を使ってくる。

(……なら、俺は罠を仕掛ける)

「はあああっ！」

「くうっ………！」

打ち込まれた一撃は、思いの外重い。ビリビリと両腕に痺れが走る。言うなればグライドはアスカタイプの剣士。早さで攻撃力を上げる。それでもグライドはアスカじゃない。そう、あそこまで卑怯な男じゃない。そして彼は俺が自分より劣っていることを知っている。だから必ず隙が生じる。俺がやるのはそれを待つだけ。その一瞬が巡り来るまで必死に食らいつくことだ！

防戦一方。しかし刀身がぶつかると、いやぶつけに行く。その度に俺は思いきり力を込める。ぐらいどの細い指。優雅で気品さえ感じさせる繊細なそれ。雪国の寒さを知らないだろうその、御貴族様の手。長期戦に持ち込めば、必ず先に壊れるのはお前の指だ。

それに気付いたお前は勝負を急ぎに来る。絶対に。俺はそれを死に物狂いで防がなければならぬが、それが出来たなら、勝機は必ず此方にやって来る。

「……君の負けだ、フォース」

「ぐあっ……」

弾かれた俺の剣。アールス様から貫った俺の冬椿。手には届かない所まで飛ばされて……為す術もない俺にグライドは剣を突きつける。

「確か君は毒籠手も持っていたよね。トリガーは中指だった」

近くの木の根元まで俺と追い詰めそして俺の手を握り……掌を思い切りその幹に串刺しにする。常に剣一本しか見せなかったのはこいつのフェイク。他に隠し持った凶器の類に気付かせないため。現に俺は気付かなかった。

（そんなとこまで、アスカ似かよ！）

彼が所持する無数のナイフと短剣。そういえば一時期アスカは東でグライドに仕えていたんだ。剣の稽古とか付けていてもおかしくはない。

念には念をと両手の全ての指をナイフで固定。あっちこっちから激痛。もうわけがわからない。

「ひー、ふー、みー、よー、いつ……」

「うぐっあああっ！」

一つ一つ、歌でも歌うように彼は俺の指を串刺しにしていく。良い声だ。綺麗な声だ。俺の汚い悲鳴がその声を掻き消してしまうのが申し訳ないくらいに、良い声だ。

そんな声の友人は、躊躇いもなく適確に俺の指の腱を切っていく。具ライドも、東にいただけのことはある。人体の構造には俺なんかより遙かに明るい。

（ゆび、動かねえ……）

痛みで動かせないのは確か。それでも感覚がないのだ。指先の。とてもじゃないがもう……剣を握ることもままならない。

「ゼックス、ズイーベン、アハト、ノイン、ツエーンっ……はい、お終い！」

間近で微笑む友人の笑顔は可愛らしい。あの凶暴女のロセッタなんかより、よっぽど色気が可愛気がある。耳元に掛かる声にも艶がある。こんな状況だと言うのに、不覚にもドキドキした。やばい、俺も西のみんなに毒されて来てるのか。

「フォース、君はそこで見ていい。僕がこれからあの女を殺すところを、じっくりと」

「や、止め……うあああっ」

動かない身体で藻掻いた所為だ。両掌に深々と刺さったナイフがまた肉を抉る。痛すぎて泣けて来た。

大精霊フェスパアツアイト。それを突破するための糸口、まだ情報収集が終わらないらしいロセッタ。ゴークルの向こうの彼女の赤目も焦りが見える。それでも、自衛のため教会兵器を掲げて距離だけ保つくらいの余裕はあった。

しかしグライドは数術使い。弱点である接近戦さえカバーしている。身体能力だけなら後天性混血児のロセッタが勝っているだろうけど、数術の柔軟性はグライドが遙かに上。教会兵器は何でもありに見えて融通の利かないところがある。

ここからどう攻める？数術か？俺の予想に反しグライドは、言葉を紡ぐに留めた。しかしその、恐るべし精神攻撃。

「フォース、君は彼女に惚れていたんだろう？それならこれほど悔しいことはないよね」

「へっ!？」

「ば、馬鹿っ!んなわけねーだろ!？」

俺とグライドを交互に見回すロセッタ。その顔はその髪の赤ほど赤くなる。この男女は男勝りだから男に好かれたことなど無いのだろう。だから、こんなことでも狼狽えてしまう。それがほんの少し女の子らしいなと思う俺まで動揺してしまう。

「ちょ、本気にするな!俺はお前のことなんか……」

だから声が上擦って。折角練っていた切り返しの策も罠も頭の内

から飛んでいく。

(ロセッタ……)

塀の中のお姫様。そうかと思った。綺麗な黒髪、綺麗な赤目。綺麗な着物。俺が初めて見た同じ年頃の女の子。違う生き物。確かに最初はドキドキしたさ。

だけど！こいつは喋ってみればお淑やかなんてことは全然無くて！俺は裏切られたようなもんだ。あの頃からだって我に返ってみれば、ていうか隣に並べてみれば余裕でグライドの方が可愛らしかった。その程度の女だ、ロセッタなんて。

いつも俺を馬鹿にして！ちよつと1年くらい先に生まれたからって偉ぶって！グライドみたいに優しくもない。グライドは俺より年上だけど、そういう嫌味のない良い奴だった！それがどうしてこんなことに。

フォースもロセッタとグライドを見比べる。

「ば……馬っ鹿じゃないの……？」

頬を赤くしそっぽ向く、ロセッタはいつにも増して女の子らしい。

(ちよつ……な、何だよあの反応っ)

男女のお前らしくもない。不覚にも可愛いなんて一瞬でも思ってしまうなんて、このフォースっ！一生の不覚っ！

頭の中でエリザにキスされたこととか、リフルさんにぎゅつとされたこととかが思い起こされ罪悪感に駆られるのは何でなんだ。

「私はあるみたいないな平凡な顔の男に興味ないわよ」

「だ、誰が平凡だっ！やっぱお前可愛くねえええっ！お前だつてちょっと髪の色が綺麗で珍しいってだけじゃないか！リフルさんとかグライドの方がずっと可愛い！」

「何ですって！？聞き捨てならないわね！私があんな女男とグライドに負け……」

俺とロセッタの視線を注がれるグライド。居心地悪そうなその顔。うつすら桜色に上気したその頬。これには認めざるを得ない。

「……負けました」

実に悔しそうにロセッタが敗北宣言。可愛らしさに関しては、2年前からの暫定王者の揺るぎなき勝利に終わる。

「でも、こっちの戦いはそういうわけにはいかないのよ。私も教会の駒なんだから、任務は絶対！来るなら来なさいよ。相手、してやるわ」

「……兵は追い付いた頃合いか。なら、僕も遠慮は要らない、そういうことか」

二丁の拳銃を構えるロセッタに、グライドは笑う。

「ふ、ははは！フェスパアツアイト……僕の痛みが聞こえるかい？」

「グライド……？」

それでもその声は震えている。まるで泣いているように。

彼を守るように吹き荒れる風が、火を熾す。俺とロセッタの……先程のやり取りさえ、彼にとっては苦痛だったと言わんばかりに炎は勢いを増していく。

「歌……？」

最初はそれを誰が歌っているのか解らなかった。それでも俺もロセツタも呆然としている。消去法的に歌っているのは一人しか居ないのだ。

「グライドの……歌？」

惚れ惚れするような、力強く甘い歌声。だけど何故か悲しい気持ちになるくらい、……唯々綺麗な歌声だ。

「発動合図なんてもんじゃないっ！これは、聖歌数式……！？信じられない……純血が、いいえ、混血だってみんながみんな扱える代物じゃない！音声数式って、一つの幸運！才能よ！？その中でもこれは誰にも歌えないとされた歌っ！」

その歌声に、ロセツタが取り乱す。ガクガクと震え出す。

「グライド……あんた、まさか」

＊

「いいかいロセツタ」

あの人は言う。神子様は言う。

「数術というのは万物に作用する奇跡。それでも扱うのが人間である以上、不可能事は結構多い」

「神子様でも、ですか？」

「うん、僕でもだ。現に僕は言霊数術は使えても音声数術は使えない」

「音声数術……、ですか？」

「その辺りは順を追って説明しよう」

運命の輪に入ったばかりの私に、神子様は私の知らない世界を説く。あの-googleがあればそれに触れることはできるけれど、理論を理解していなければそれも意味はないのだとあの人は言っていた。

「まず視覚数術。これは高等式だけどそれなりの術者には扱える」

そう言って神子様はご自身の外見色を変えたり、服装を変えたり分かり易く説明してくれる。それはそう見えているだけで、実際神子様の外見が変わったわけではないのは理解した。

「次に嗅覚数術。これは動植物の匂い。自然界に多く存在する数式だ。人が調合で作りに出すことも可能。だから悪用されるケースが多く、教会ではその取り締まりを行っている。数術使いでない人間が、相手の脳内物質に干渉、代償無しに数術現象を引き起こす……と言ったらその恐ろしさを解って貰えると思う」

「……はい」

「裏で取引されてる媚薬なんかはこのケースである場合もある。」

その辺は僕も一網打尽にしていきたいと思ってる。僕も君もその辺りの物には痛い目に合わせられて来た口だからね」

「はい！」

私に一度精神崩壊を引き起こさせた私の飼い主。私の調教に使われたのもおそらくはそう言った類の物だ。元が自然に存在する物である以上、取り締まりは難しい。故に罰を厳重な物にしての法の整備しかないだろう。

「それで次は触覚数術。例えば……ソフィア。自分の胸部を確かめてご覧」

「お、おおお！み、神子様！？」

すごい、でかい！重い！柔らかい！掌からはみ出す。見た感じはそんなこと無いのに私の胸が増量しているっ！

はしゃぐ私に申し訳なさそうに、神様が術を解くと、その錯覚も霧散。夢い夢だった。

だけど今は説明を受けるのが私の仕事。浮かれている暇はない。

「それが触覚数術。視覚数術と合わせることでかなり高度な嘘を作り出せる。実際にマリアージュのような変身数術を産まれ持った才能がない術者が行えば脳味噌沸騰即死爆発も良いところだ」

「……ですが、神子様には才能がありますよね？」

顔を合わせる度に、違う顔になっているあの女だか男だかもはっきりしない現在女。数術使いとしてのレベルは同僚のマリアージュより、遙かに神様が格上。あいつは変身に特化しているだけで、他の数術は殆ど使えないに等しいレベルだから。

「才能があっても数術代償によっては割に合わない。僕もやろうと思えば出来るけどやらないしやりたくない。だから遙かに代償の少ない視覚、触覚数術を使うのが一般的なやり方だ」

数術を扱えるのは才能、或いは混血に関してだけを語るならそれは生存本能。そして命を削らない数術代償を得られるのは幸運。仮に数術の才能があっても、その代償がとんでもないものならば、その者は数術使いとして意味を成さない。すぐに代償に食い潰されて死んでしまう。

「それでソフィア……視覚、嗅覚、触覚と来たら残りは何があると思う？」

「味覚数術とか、ですか？」

「ああ、それもあるね。だけどそれは嗅覚数術よりも難しいよ」「と言いますと？」

「誰が食べても絶対に美味しいとか、絶対に不味いとか、常に同じ快感と不快を与えられる式を持つ食物というのはちょっと考えられない。だから味覚数術の数式を展開させられるとしたら……それは凄腕の数術使いじゃなくて凄腕の料理人ってことだよ。計算し尽くした料理でも、それには叶わない」

「唯一普通の人間が扱える奇跡ってことですか？」

「ああ、そういうことだよ。そう言う意味では音声数術の次に存在証明が難しい分野。勿論薬品で無理矢理脳内物質を弄するということは可能だ。だけどそれは味覚数術ではなく毒数術に該当する代物。嗅覚数術同様、教会の取り締まりの対象になる」

「神子様、頭が痛いです。数術ってそんなに色々あるんですか？」

「まあ、万物を数術で言い表すならってことだから、分野として言い表せるだけで意味を成さない部分も大きい。要するに麻薬とか毒薬があっちこっちで売買されていたら普通に危険だからね」

「ああ、そうですね。それなら人を不快にする騒音とか超音波とか黒板、硝子を引っ掻く音まで聴覚数術とか言い張れそうですね」

「良いところに目を付けたね」

呆れた私に神子様は、眼を細めて笑う。

「その程度のことを数術と数え上げたらキリがない。皆何かしらの行動をしていて生きている。だからその行動全てが数術学上数式発生行動。つまりは万物全ては数術使いとなってしまう。それは問題だから僕らは自力で数式を見ることが出来、それに触れ作用する

ことが出来る人間を、数術使いと定義する」

「なるほど……それなら私がいくらこのゴーグルで見て、教会兵器で扱っても、私は数術使いにカウントされないってことですね」

「数術学上そうなるね。君はその銃がなければ数術は使えないから」

その定義の線引きがあるから、その戦に含まれない人間が起こす行動は、原則として数術とカウントされない。数術学的行動と称されるのが常だと神子様が語る。

「数術のいろはを何も知らない人目から見ても魔法や奇跡と思える物が数術。自分にも出来ると思える程度のことは全て数術学的行動。硝子を引っ掻くなんて誰でも出来ることだしね」

「魔法や奇跡……」

確かにそうだ。胸にパットを詰めれば外見を帰ることは出来る。触覚もだ。だけど外見を変えずに触った大きさを変えるなんて、普通の人間には出来ない。数術の仕組みが解らなければ魔法のように見えるだろう。

数術使いは魔法使い。数術使いではない人間は生きているだけの凡人。唯凡人は道具に頼ることがある。そういう考え方である程度の理解は出来る。

「そうそう、そんな僕ら数術使いの不可能事について僕は話していたね。どうして僕がそれを君に話すか解るかい？」

「え、ええと」

「君は数術使いじゃない。だから数術使いの天敵になれる」

「どういうことですか？」

「基本的に数術使いには二つの弱点がある」

「二つ、ですか？」

奇跡を起こせる魔法使いにも弱みがあるのだと、最高の数術使いは言う。

「ああ、そうだ。基本的に実戦に出られるレベルの数術使いは何十年も修行を積んだ老人の純血か、幼くして危機に見舞われ窮地に才能に開花した混血か。つまり老人と子供。身体能力が低く、接近戦が苦手という欠点がある」

神子様は私の手をそっと自分の首へと触れさせ目を閉じる。細くて白い：冷たい肌。力を入れたら折れてしまいそう。

「僕だって首の骨をへし折られたらそれでお終い。そうさせないために、相手を近づけないための数術を練りはするけど、式の展開、発動までのタイムラグは拭えない。だから僕は君たちを傍に置いている」

「はい」

「次にもう一つ。これは先に述べたタイムラグに起因するんだけど……僕ら数術使いは基本的に音声数術を使えない」

「音声数術、ですか？」

「魔法の言葉。呪文ってこと。よく魔法使いっていうと技名叫んでそれで色々現象引き起こすってイメージあるだろ？」

「た、確かに」

「でも数術は計算であって魔法じゃない。僕らは限りなく魔法使いっぽい数学者か人間電卓、或いは人間そろばん。そんなもの。だから発動をするには計算式を完成させなければならない。その式の簡略化、計算速度、それが優れた数術使いの力量だ」

「は、はあ……」

「だから数十年前までの数術学的前提として、音声数術は理論として存在するが、その概念を理解し操ることが人間には不可能。そ

う定義されていた」

神子様、そろそろ私の頭では解らなくなってきました。情報量が多すぎます。

頭を抱え込んだ私をくすくす笑い、神様がそれじゃあねと言い直す。

「要するに僕は学者であって、魔法使いじゃない。だから魔法使いという人間は存在しないとされた」

「は、はい」

「唯、ごく稀に……自身の声を引き金に数術を描ける天才がいる。これは殆どタイムラグがない。こればかりは生まれ持った運だ。殆どいないと断言できる。幸いまだ巡り会ったことがないけどね。そういうのが相手だと、僕も苦戦すると思う」

「……ゼロじゃないんですね？」

「うん、確実にいるね」

「そういう者と出会ったらどうすれば良いんですか？」

神子様でも苦戦する相手。私に為す術なんかないんじゃないか。落ち込む私の頭を神様は、優しく撫でて私を見上げる。そして天使のように優しく愛らしく笑うのだ。

「ロセッタ、数術使いも天才も人間だ。頭や心臓を打ち抜かれれば死ぬ。それに心がある」

しかしその言葉はとても残酷な物で……それでも真理に触れていた。

「魔法使いも、人間だ。必ず弱みがある。そこを曝いて攻める。まずは心を折ることが大事だ」

「心を……折る」

「うん、そうだ」

魔法使いも、学者も人間。だけど私は兵士で神子様の駒。運命の輪は、人ではない。神子様の手足で、道具だ。

信じる世界のために、任務に忠実であれ。時には人の心を捨てろ。それが車輪の役目。

「人は多くの理由で死ぬけれど、人の心を殺すのは……人間だけだよロセッタ」

＊

「……………」

そうは言うけれど、大精霊が相手だなんて聞いてない。ロセッタは変わり果てた友人を睨み付ける。

精霊フェスパアツアイト。無精霊は殆どと言っていいほど人格、姿を持たない、限りなく無に等しい、それでいて濃縮された膨大な元素の塊。元素が一定量集まると意識を持つ存在が生まれる、これが精霊。しかしその元素量があまりにも膨れあがればこんな風に意識を持たない精霊が生まれる。凄まじい元素の塊。それでも唯の元素ではなく精霊とされている以上、相性がある。それを使いこなすには波長が合わなければならぬ。そしてそれだけぴったり相性が合った奴に取り憑いたなら、違和感など感じられる。

こんな味方に付いたなら、数術代償なんてあってないようなものの。

（でも、だからって……）

精霊は触媒ではない。あくまで元素の塊だ。意識がある低級から中級精霊なら計算式を

視覚出来ないくらいそれはグライドに溶け込んでいる。無精霊は精霊の中でもとりわけ特殊な存在。

彼の身体の一部、何処かに巣くっている。同化している。それを探し出すのは難しい。生きたまま捕らえて神子様に差し出すのが、最善だけど、相手が相手。そうも言っていられない。

《フェスパアツアイトを憑かせるなんて君の幼なじみは僕の幼なじみと違って有能だねソフィア。是非とも勧誘したい所なんだけど》

私の思念に語りかけて来る神子様の念話数式。あの精霊のことを尋ねるため、先程から私から連絡を入れていた。

（残念ながら彼は純血至上主義に染まっていますしカードです）

《なるほど。無理に洗脳したところで弱体化するのがオチか。残念だけど仕方ないか》

仕方ない。それは、抹殺許可。神子様は、私にグライドを殺せとお命じになった。

《多分今後数百、数千年とフェスパアツアイトの適合者は現れない。彼を始末すればその脅威は消える》

（ですが神子様。大精霊フェスパアツアイト……その供物が歌つてのは初耳です）

《それは僕も初耳だよ。本の記述じゃ、昔のそれを持ってたカーネフェル王が敵を迎え撃つため自分共々燃やし尽くした。その炎は七七日七晩消えなかったってことくらい。詳しく記述した本は過去に

盗まれ何処かに売り捌かれて行方不明。でも聖歌の方は以前君にも話したよね?》

(はい)

聖歌には歌えない歌という歌がある。あれはその歌の一つだ。大昔は歌えていた歌なのだけれど、現代では歌えないし歌ってはならない歌。

《こういう理屈で彼が音声数術を扱えているのかはわからない。だけど彼は……とても脅威であり、そして可哀想な人でもある》

(……はい)

人は変声期に入り歌えない音階という物が生じる。声変わりというものだ。男の場合それは顕著だ。

《彼は君と同年だったと記憶しているけど》

(はい、今年で16。……二年前は14です)

《なら、あり得ない話でもない。タロックの子は食糧不足で成長が遅れている》

元々落ち着いた声を出す大人しい子だった。つい外見に騙されて、今も違和感なく感じていたが……確かにこの年の男としては声が高い。

《……シャトランジアでは歌のために男児を去勢することは禁止されて久しいんだけど、セネトレア辺りはまだ人権が行き届いていない身分も多い。ソフィア、彼もまた奴隷貿易の被害者だ》

(……はい)

《その怨みが世界ではなく混血に向かうような環境が彼にはあった。気味も彼も悪くない。悪いのはこの世界だ。だから作り替える

必要がある《

(……はい)

《やれる?》

(やります)

神子様にそう答え、私はグライドを見る。いつの間にかゴーグルの中に貯まっていた涙、それが隙間から頬を伝い出す。大好きだった幼なじみ。貴方も辛い思いをしたんだよね。

(だけど、これは仕事なんだ!)

これから私は貴方を傷付け、殺さなければならない。私情は殺す。貴方を殺す前に、私は私を殺す。

空中には次々に点火していく炎。これが何かのショーなら私もうつとりしたい気分だけど、それがこれから私を殺しに来るって言うんだからその膨大な聖歌数式には目眩さえする。それでも私は彼の弱みを探さなければならない。

「……本当、使えないわね」

軽く舌打ち。そして私が睨み、銃口を向けたのは……グライドではなくフォース。

「足手纏いは要らないって言ってんのよ、フォース。あんた私の仕事の邪魔する気?」

引き金に指をかければ流石のグライドも歌を止める。

「ロセッタ、君はっ……フォースの仲間じゃないのか!？」

「仲間? 笑わせんじゃないわよ。私は混血よ? 誰が純血なんか信

用するもんですか」

私が悪人面で小気味よく笑ってやれば、悲しいかな……やっぱ昔の私が惚れた男はいい男だ。敵対している親友のために怒っている。その燃えさかる赤い瞳に胸が痛んだ。

「あんたもさっき言ってたじゃない。そっちにいる混血のこと、信用できないって。こっちだってそう。信用もされてないのに信用できるはずがないわ」

顔を引き攣らせるグライド。説得力、あるわよね。だってこれ、あんたが思っていることだもの。私はあんたが今まで語った言葉を元に、あんたの弱みを撃ち殺す。

「はつきり言って、迷惑なのよ。フォース？身の程っての考えなさいよ。あんたと私、奴隷貿易でどれだけ値段の差が付くか！今も昔も私の勝ち！ゴミみたいなあんたに好かれたって全然嬉しくないっそ不名誉！」

「っ……」

フォースには悪いけど日頃のストレスここでぶつけさせて貰うわ。私も苛々してたのよ。ラハイアのことも悲しいし悔しいし、城が許せないし東だって。リフルの馬鹿がどうなってるのかも心配だし、胸糞悪い仕事ばかりをさせられて、心底苛ついていた。

グライドの混血憎し。これを払拭させることは出来ない。なら、その思いを利用させて貰う。私が悪人になればなるほど、グライドはフォースが可哀想で堪らなくなる。

（私は信じる）

あの二人の友情を。私なんかが入り込めない絆が今もあるんだって、それを信じる。信じた上であんたを陥れて破滅に導く。

「私はさっさとリフルを探しに行きたいの。それが私の仕事だし、垢抜けないあんたよりあいつの方が顔良いし。あいつは黙ってれば完璧なもの。どうせなら目の保養になる奴と仕事してた方が良いわ。あんたのお守りはもう懲り懲りよ」

「お、俺だってお前なんか……お前なんか大っ嫌いだ!」

「あっそ、初めて気があったわね。それじゃあ記念に殺してあげる。さよなら、フォース。クソつまらない思い出をありがとう」

引き金を引く。躊躇わず、思い切り。それに間をおいての絶叫。

「フォースっ!」

思わず駆け寄るグライド。それは反射的に。自分が何をしたかも忘れて撃ち抜かれたフォースの傷を探すため……私から目を逸らした一瞬に、その頭に向かって引き金を引く。

「何っ!?!」

その瞬間、完全に解かれていた数術。炎も風も動きはしなかった。それでも私の弾が、弾かれた。それどころか頬を掠った風がある。それは炎を纏っていて小さな火傷を私にもたらす。

「お久しぶり……と言うにはそんなに日は空いていないかしら?」

「あ、あんた……」

第二島、それから第五島で出会った目のカーネフェル人。弓矢を手にしたブロンド美人。

顔は派手ではなく大人しめの美人。本当にさらっとした薄化粧がよく似合う。背は高く、足は長くてそれでいて肉付きが悪いわけもなくむちっとした胸と太腿。私の神経逆撫するような外見だ。理由もなく撃ち殺したくなるくらいに嫌味な女。

「大丈夫？ グライド君」

「リイナ……さん」

本当、ふざけんじやないわよ。私の弾を弓矢如きで止めたですって？ 一本目で軌道を変え、続く二で撃ち落とし、三本目は私への攻撃を行った。唯の純血の癖に、やり慣れてる。裏町の破落戸、請負組織を甘く見ていた。身体能力は私に劣る。それでも卓越した技術で私に挑む。一度の攻撃で三本の矢を射れるこの女、ただ者ではない。

「私も卑怯なことはそれなりにしますけど、今のは目に余ります」

「生憎今はリフルが見てないから、好き勝手やって良いのよ。教えなければいいだけだもの」

あまつさえ私のやり方にケチ付けるとは、本当に良い度胸！
ロセッタが奥歯を噛み締める内にもリイナはこの後の算段まで練っている。

「グライド君、ここは手伝いますからこれが終わったらロイルを探すの手伝ってくださいませんか？」

「……はい、ありがとうございますリイナさん」

「いい度胸ね。もう勝ったつもりってわけ？」

「ああ、勝ったつもりだよロセッタ」

私の言葉に答えたのはリイナではなくグライド。

「さっきから君……何度もリフルリフルって、Suitのことが随分とお気に入りみたいじゃないか」

「べ、別に私は……」

「なるほどね。混血は混血同士ゴミの舐め合いをしてたわけだ」

「あいつはそんな奴じゃない!」

「やっぱり。入れ込んでるってのは本当なんだ」

「っ……」

「なんであのお客が僕にこんな物を持たせたのか解らなかったけど……こういうことだったのか」

「なんの、話よ……」

グライドが懷から取り出す小箱。何が入っているのだろう。唯のはったり? 何時でも応戦できるよう、銃口は二人に向けたまま。

「ひっ……」

「彼は見ていたよ。卑怯な君の姿をね」

小箱の中には小さな硝子ケース。遠目にも解る……鮮やかな美しい色。紫色の眼球一つ。

「り、リフル……」

追いかけるか、戻るか。私は選択した。戻ると。それがあいつにとってのベストな答えだって。

(リフルっ……)

ずっと大嫌いだっただ。二年間ずっと、憎んできた。それだけが私の心の糧だった。

それでも彼の傍に来て、彼がそんなに悪い奴じゃないんだって知った。私のフォローに努めたり、親しい人間一人や二人の死に安心に取り乱して、自暴自棄になって。その心の隙や甘さを突かれて敵に心身共にいたぶられたり。弱いし脆い。でも頑固でしぶとい。誰かのために自分を責めて壊れても、違う誰かのためにまた立ち上がる強さがある。そんな最強のコートカード。優しくて残酷なスペードのキング。

「あ、……っ ああ」

どうしよう、どうしよう、どうしよう！リフルが、リフルが死んだっ！私にラハイアの銃を預けておいてっ、勝手に死んだっ！こんなあの男に、アスカに知られたらっ！もうお終いだ。タロックのことも、シャトランジアのことも！何もかもがっ！

（私の任務が、失敗したっ……）

ラハイアを死なせて、それでリフルを生かしたのに。私は、そのリフルさえ守れずに……この狂った世界を変えるためには、あいつの力が絶対に必要だったのに。

両手が震える。とてもじゃないけど、狙いが定まらない。上手く当てられない。

炎が迫り来る。全部は避けられないし、数術弾でも打ち落とせない。もう、お終いだ。そう……ぎゅっと目を瞑った……

「悪い、グライド」

間の抜けたような場違いの声。労りを含んだその声に、私は目を開く。

「フォース!？」

フォースはグライドを後ろから押さえ込み、そして何やら無理矢理何やら謎の液体を飲み込ませている。術者の意識が途切れることで、これまで展開されていた数式も消えていく。

「あ、あんた生きてたの？」

「わざと急所外したんじゃないのかよ」

「ごめん、割と殺す気だった。仕事モードだったし割と本気で。じゃないとグライド引かかるわけじゃない」

私よりはフォースの方がカードとして強い。その幸運が風で軌道を変えてくれたのだろう。

それは良いとしても……

口に残った毒を吐き出している幼なじみを見、先程の光景を思い出し、私は彼から数歩後ずさる。

「あと、私に近寄らないでくれる変態？」

「はぁ!？ 助けてやったんだろ!？ 両手の指使えないところ、頑張って毒飲ませたのに!」

「だ、だからって口移しは無いでしょうがっ! なんてもん見せんのよ! 不潔! 不道德っ! インモラルっ! こっちの目の毒よっ! グライドを汚すなっ! 平均顔っ!」

「は、はぁ!？」

「ていうかあんたどうやって抜け出したのよ!？」

「夏だつてのに、こんな雪国仕様のブーツはおかしいと思わなかった? これは夏冬両用、切り換えブーツ」

見ればフォースの靴底は、彼が足を動かすと、雪道歩きに便利そうなスパイクが現れる。

「これ、結構頑丈で蹴りの威力もいいし、トゲは出し入れ自在で便利なんだぞ」

「いや、普通にどうやって脱出したのかわかんないんだけど」

「これで片足踏んだり蹴ったりして、そっちの痛みに集中しながら踏ん張って全部の刃物引き抜いた。お前らそっちの話に夢中で俺のことガン無視展開入ってたじゃん。その隙に」

「あんた馬鹿？っていうか手段選ばなさすぎでしょ。一応グライド、あんたのために隙を作ってくれたってのに。あと毒どうやって含んだわけ？」

「使えないの指だけだし。肘とか手の甲使って首に提げてるこの瓶の蓋口で外して、そんな感じ。ていうかだから気絶に留めたんだろ？」

「他に手段無かっただけじゃない」

「うっ」

私がフォースを言い負かしていると、背後でくすくす笑う声。

（そうだ！もう一人いたんだ）

戦闘態勢に入る私に対し、リイナは武装を解いている。それどころかフォースに向かってにこやかに話しかけてさえた。そしてその手には……倒れた時に、グライドが落としたリフルの目。

「強くなったのね、フォース君」

「リイナさん、久しぶりです」

「見事なものよ。アスカさんの卑怯さと、リフルさんの形振り構わなさ。出会った人達から貴方は色々学んだのね」

「ええ、まあ……それだけじゃありませんけど」

「私は今日はオフ。ロイルもね。この辺りでロイル……見かけてないわよね」

はあと遠い目をしてリイナは溜息を吐く。本当に良い性格してるわこの女。

「あんた私に喧嘩売ってタダで帰れると思ってるわけ？」

「この子は私の兄さんのお気に入りなのよ。だから死なせたくな
い。リフルさんの目は返すわ、これでどう？今日の所は彼の身の安
全を保証して貰えないかしら？」

「なんで私じゃなくてフォースと話進めんのよ！つーかあんたも
あんたで何手当てしてもらってんのよ！鼻の下伸ばしてっ！」

「別に伸ばしてねえし！」

「じゃあ何デレデレしてんのよ！鼻の下縮めて！」

「意味がわかんねえよ！お前とりあえず反対の言葉言えば良いと
思ってたんだよ！？」

「ふふふ、仲が良いのね」

「リイナさんまで、止めて下さい。俺は本当にこんな暴力女どう
でもいいんです」

割と本気でどうでも良さそうな声で言う薄情者。こいつ本当幼な
じみ甲斐無いっ！そりゃあ私も割と薄情かもしれないけどっ！しれ
ないけどもっ！

「リフルさん、まだ生きてるわよ。唯、見て貰って解るように……
今の彼には両目がないわ」

「リフルさん……」

「でも、もう片方はロイルが持ってるって情報があるの。ここは
一時休戦で、一緒にロイルを探して貰えない？」

「あの筋肉馬鹿がどうしてリフルの目なんか持ち出すのよ」

「あら？だってアスカさんの本気を引き出すにはもってこいでしよう？」

「ぐっ……せ、説得力は無駄にあるわね」

「私もあんなリフルさんは見ていられないの。彼の目を取り戻してあげて、フォース君」

「ってまた私無視！？」

「そういうことなら、いいよなロセッタ？」

「……っ、何か変な動きしてみなさいよ。すぐに撃ち殺して……え？」

笑うリィナ。それがどんどん遠離る。

（違うっ！）

私が落ちている。突き落とされたんだ！

咄嗟に視線をやれば、急な山の斜面転げ落ちた先には切り立った崖！

（不味いっ！）

すぐに数術弾を入れ換えて、重力緩和の出来そうな弾をっ！

「ぐえっ！」

新たな衝撃で取り出した弾が零れる。あれ貴重なのに！

その衝撃の正体を睨み付けようにも、両腕使い物にならず受け身も満足に取れないフォース。あいつは凡人。下手したら本当に死ぬ。カード的には安心かも知れないけど心配……

（って、カード！？）

思い出す。私は一度、いや二度もあの女に会っていた。しかしあそこまで嫌味な女じゃなかったはず。思い返してみれば、今の女からは……カードの気配がしなかった。

（しまった！別人っ！）

私は数術使いじゃない。だから数式は私にとって母国語のような馴染みのある文字言葉ではない。読もうと思えば読める。だけど意識しなければ見過ごしてしまう情報群。情報が多すぎると惑わされて見える物も見えなくなる。私は人間だから、数値ではなく視覚情報に囚われてしまう所がある。

片手でフォースを抱きかかえ、もう片手で銃を取る。入ってる弾で何とかするしかない。

転がり崖側に身体が向いた時、私は引き金を引く。その衝撃で身体が後ろに下がる。弾が無くなるまで連続で撃ちまくる。本当に勿体ないことだけど、それでなんとかギリギリ崖の前で私達は止まることが出来た。

「痛うつ……」

だけど大荷物を抱えての無茶。手にがたが来ている。へたれフォースは突き落とされた時に崖の下でも見てしまったのだろう。気絶している、使えない。

安堵よりも苛立ちを噛み締め、私は私達を突き落とした犯人を睨み付ける。確信を持って坂の上を睨み付けければ、まやかしは解ける。先程とは違う姿形の女がそこにいる。

「第五公の娘っ！エリザベータっ！」

フォースの馬鹿がデレデレしてたのはそういうわけか！フォースの馬鹿はあの女に惚れていた！相手がリィナではないとは気付けなくても、なんとなく悪い気はしない様子だったのは無意識下の好意があったから！

「嗅覚数術って凄いのね。みんな私が彼女に見えていたなんて」
「あ、あんたねえっ！！」

やられた。この女はグライドが倒れる前から既にいたんだ。操る風に嗅覚数術の薬を乗せたんだ。大精霊フェスパアツアイト？それをも出汁に使いやがったんだ。あれだけ大きなもん持ち出せば、みんなそっちに注意が行くもの。

「ニクスったら本当に可愛い。何回私に騙されるんだか」

「……弟を取り戻しに來たってわけ？」

「あはは、まさか。エリスなんて邪魔なだけよ」

「じゃあ、あんたがあの子と父親第五公になる腹ってわけ？」

「さあ、どうかしら。教えて欲しかったら出すもん出さないお嬢さん。世の中金よ金」

くすくすと笑いながら女は道を進み行く。その後ろからは、大勢の奴隷商、その手下が続く。

「さあ、追いかけるのです！金のなる木が待っています！」

「や、止めなさいっ！」

向こうにはアルムがエリアスがディジットが逃げた。他にも混血や奴隷、女子供はわんさかいる。

（助けなきゃ……）

私と同じ目には遭わせない。アルムもエリ阿斯もまだ子供だ。そんなの無理よ。ディジットだって剛胆に振る舞っているけどあれは絶対男を知らない。こんな状況で何かなんて可哀想。同じ女として見過ごせない。

（あいつは……本当に、普通の女なのよ）

私とは違う。ありふれたカーネフェルの女。混血に囲まれている所為もあり、特別にそこまで美人ってわけでもない。奴隸としての価値もない。

だけどどの人種の間人も温かく受け入れてくれる奴で。あの女の作ったって言う弁当は凄く美味しかったんだ。堅物頑固の精霊の岩戸の心も粉碎するような絶品料理。

あんな普通の女。普通に普通の幸せ掴まなきゃ駄目よ。

「止まれっ」

震える手で弾を詰め込み引き金を引く。その大きな音。向こうにも届いただろう。その音にエリザベータがほくそ笑む。

「ああ、あと気をつけなさい。その辺崩れやすくなってるって話だから」

大きな音。その衝撃。身体が傾ぐ。足場が消える。

「っ！」

崖の下には何がある？ 岩だらけの谷？ いいや違う。驚くほど暗い色合いの海がある。その濁った色は何だろう。叩き付けられた海面。

口の中に入り込む海水の味。

落ちてから気付く。これは血の味だ。

既に殺され、捨てられた死体達。皆、皆……虚ろな空洞。ぽっかりと空いた二つの穴。

彼らには、眼球がない。あのオルクスって変態っ、死神商会どもに狩られたのだ。

「あ、……あっ、あああああ！」

それがぶかぶかと私に躪り寄ってくるように流れる。その全てが私はリフルに見えてくる。私があいつの意思を汲んだような事を言っ
て、言ったから……あの綺麗な人は、こんな姿にされてしまった。
生きてる。まだ生きてる子もいる。

助けて、痛いようと泣き喚く。あいつが何よりも守りたかった混
血の子達が、ゴミのように、海に投げ捨てられている。

不意にタロックの田舎でのことを思い出す。犬とか猫とか。川に
流す馬鹿がいたこと。目が明かない内なら川に流しても構わないな
んて風習がクソ田舎にはあった。これはあれに似ている。

目さえ見えなければ、殺しても構わない。まるで、そう言われて
いるみたい。

助けられない。全員は助けられない。間に合わないわ。海岸まで
殿くらいあるのかも解らない。崖を登るなんて無理。頑張っても一
人か二人。それが限度。

（くそっ！くそっ！くそっ！）

ボロボロと両目から涙が溢れる。まだ泣ける私は幸せだ。この子
達、リフルは泣けないのにつ！泣いてる私は最低だっ！泣く暇があ
ったら助けなきゃ。

「こっち！掴まりなさい！」

掴ませられる位、全員持っていく。私はカードだ。一般人より幸福に恵まれている。私の幸福をここで使うのは任務として喜ばしいことではない。だけど神子様。私はここから一人だけ、助かるなんて出来ません。

声の方向、我先にと必死に見えない身体で近寄ってくる子供達。水を吸い込んだ服で何人にもしがみつかれば、私の身体能力でも怪しい。それでも沈むわけにはいかない。

「え……？」

掴まれた。力強い手。その何かに急に手を引っ張られる。誰かに引き上げられて船の上。

「げほっ……げほっ」

「大丈夫かいお嬢さん？お前達！その子達を引き上げろ！引き上げたはしから手当してやれ！一人たりとも見捨てるなってお達しだ！」

見たところ乗組員はタロック人の男ばかり。

「あんた達……一体？」

「俺達は、アルタニア公の飼い犬さ」

「アルタニア公……？」

黒いコートに無骨なブーツ。言われてみれば男達の服装は、フォースのそれと少し似ている。

「あの暴れん坊領主を改心させたんだって？」

「いや、惚れちまったって話じゃなかったか？」

「タロツクの王子様って奴はそんなに美人なんだかね。俺も一回くらい見てみてえもんだわ」

「ちょ、ちよつとどういふことなの？」

アルタニア公は死んだはず。カルノツフェルだってフォースが殺したはず……

（いや、ちよつと待て）

あのへたれ、もしかして土壇場でミスった！？でもこの流れはおかしい？カルノツフェルは東側に協力していたはずじゃないの？どうして私達混血に、こんなに好意的なの？

「あの人や、失脚覚悟で喧嘩売りに来たのさ。セネトレアって国に」

よくわからない。わからないけど、風向きが変わった。船が押されていく。このまま何処へ向かうというのだろうか？

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2023w/>

悪魔の絵本15 悪魔【逆】（SUIT編?）

2011年11月23日20時53分発行